

平安京左京三条三坊十一町

平安京跡研究調査報告

第14輯

財團法人 古代學協會

昭和59年

目 次

はじめに	1
第1章 調査の経過	4
第1節 層 序	4
第2節 A区の調査	6
第3節 B区の調査	7
第4節 C区の調査	7
第2章 遺構と遺物	9
第1節 門跡と烏丸小路の側溝	9
第2節 墓	13
第3節 その他の遺構・遺物	34
第3章 文献的考察	53
第1節 高階邸の位置	53
第2節 墓地の規制	54
第3節 姉小路との関連	56
第4節 桃山期以降	58
第4章 ま と め	59
第1節 門跡とその周辺の遺構	59
第2節 墓 域	60
おわりに	62

図 版 目 次

- | | |
|--|---|
| <p>図版第1 上：調査地遠景
下：A区第1検出面全景</p> <p>図版第2 上：S B 26・27・28 下：S B 27</p> <p>図版第3 1：S E 1 2：S E 30
3：S E 7 4：S E 3</p> <p>図版第4 1：S E 6 2：S E 36
3：S E 41 4：S E 33</p> <p>図版第5 1：S E 48 2：S E 24
3：S E 40 4：S E 29</p> <p>図版第6 1：S E 39 2：S E 47
3：S E 43 4：S E 50</p> <p>図版第7 上：A区第2検出面全景
下：S E 196</p> <p>図版第8 上：門跡検出状態
下：同 礎石露出状況</p> <p>図版第9 上：門跡検出状況
下：同 礎石取り外し後</p> <p>図版第10 上：門跡(S B 65-a)礎石
検出状態
下：同 根石検出状態</p> <p>図版第11 上：門跡(S B 65-b)礎石
検出状態
下：同 礎石露出状態</p> <p>図版第12 上：新薬師寺東門
下：法隆寺西園院上土門</p> <p>図版第13 上：十輪院四脚門
下：法隆寺宗源寺四脚門</p> <p>図版第14 1. 西獄舎
『平治物語絵詞(信西巻)』
2. 鳥羽殿『西行物語絵巻』
3. 大宮内府実宗邸
『法然上人絵詞(巻二)』
4. 押小路御所
『法然上人絵詞(巻九)』</p> <p>図版第15 上：S K 79遺物検出状態
下：S K 114遺物検出状態</p> <p>図版第16 上：S K 70上層遺物検出状態
下：同 下層遺物検出状態</p> | <p>図版第17 上：S K 175遺物検出状態
下：S X 118集石検出状態</p> <p>図版第18 B区全景</p> <p>図版第19 上：S B 207 下：S K 256</p> <p>図版第20 1：S E 230 2：S E 204
3：S E 205 4：S E 206</p> <p>図版第21 1：S E 255 2：S E 203
3：S E 222 4：S E 254</p> <p>図版第22 1：S E 209 2：S E 214
3：S E 262 4：S E 204</p> <p>図版第23 上：C区全景 下：S D 382</p> <p>図版第24 溝状遺構(S X 339)集石</p> <p>図版第25 上：S K 347・364 下：S K 363</p> <p>図版第26 上：S K 396 下：S K 353・354</p> <p>図版第27 S E 347 上：全景 下：細部</p> <p>図版第28 1：S E 309 2：S E 365
3：S E 306 4：S K 375</p> <p>図版第29 1：S E 401 2：S E 330
3：S E 371 4：S E 305</p> <p>図版第30 上：A区墓域全景 下：S D 45溝</p> <p>図版第31 集石墓 上：S X 13 下：S X 14</p> <p>図版第32 集石墓 上：S X 19断面
下：S X 19人骨</p> <p>図版第33 集石墓 上：S X 15平面
下：S X 15断面</p> <p>図版第34 集石墓 上：S X 322
下：S X 337</p> <p>図版第35 土墳墓 S X 54</p> <p>図版第36 土墳墓 上：S X 80 下：S X 82</p> <p>図版第37 土墳墓 上：S X 88 下：S X 90</p> <p>図版第38 土墳墓 上：S X 131
下：S X 138</p> <p>図版第39 土墳墓 上：S X 183
下：竹製敷物</p> <p>図版第40 土墳墓 上：S X 140
下：S X 311</p> <p>図版第41 土墳墓 上：S X 312
下：S X 315</p> |
|--|---|

挿 図 目 次

第1図	発掘調査地位置図 …… 1	第33図	SX399 土墳墓出土竹製敷物 実測図・模式図 …… 24
第2図	調査区トレンチ設定図 …… 2	第34図	SX372 火葬墓 …… 25
第3図	SB65-a, SB65-b 出土遺物実測図 …… 10	第35図	SX188 犬の骨 …… 29
第4図	SB69 出土遺物実測図 …… 10	第36図	SX386・370 出土人骨 …… 27
第5図	SB186 出土遺物実測図 …… 10	第37図	SX344 二次堆積の人骨 …… 27
第6図	SD83 出土遺物実測図 …… 10	第38図	SX315・325 土墳墓 …… 28
第7図	SD66 出土遺物実測図 …… 10	第39図	SE196 井戸 …… 34
第8図	SD99 出土遺物実測図 …… 11	第40図	SE196 出土遺物実測図 …… 35
第9図	SD98 出土遺物実測図 …… 11	第41図	SE374 井戸 …… 35
第10図	SD100 出土遺物実測図 …… 12	第42図	SE374 出土遺物実測図 …… 36
第11図	SX19 集石墓 人骨出土状態 …… 折込	第43図	SK85 出土軒丸瓦 実測図・拓影 …… 36
第12図	SX15 集石墓 …… 14	第44図	出土軒丸瓦実測図・拓影 …… 37
第13図	SX322 集石墓 …… 14	第45図	出土軒平瓦 実測図・拓影(1) …… 38
第14図	SX54 土墳墓 人骨及び抱石 …… 18	第46図	出土軒平瓦 実測図・拓影(2) …… 39
第15図	SX80 土墳墓 …… 18	第47図	SD395 出土遺物実測図 …… 41
第16図	SX82 土墳墓 …… 19	第48図	SD45 出土遺物実測図 …… 40
第17図	SX90 土墳墓 …… 19	第49図	SK396 出土遺物実測図 …… 41
第18図	SX131 土墳墓 …… 20	第50図	SK79 出土遺物実測図 …… 41
第19図	SX183 土墳墓 …… 20	第51図	SK70 出土遺物実測図
第20図	SX183 出土珠数玉 実測図 …… 20	第52図	SK327・SE374 木製品実測図 …… 43
第21図	SX311 土墳墓 …… 21	第53図	その他の平安時代の 遺物実測図 …… 42
第22図	SX312 土墳墓 …… 21	第54図	A区墓域内出土遺物実測図 …… 44
第23図	SX319 土墳墓 …… 21	第55図	五輪石・板碑実測図 …… 44
第24図	SX321 土墳墓 …… 22	第56図	SX90 出土六文銭 …… 45
第25図	SX387 集石墓 …… 22	第57図	SX97 出土六文銭 …… 45
第26図	SX140 土墳墓 …… 23	第58図	SX131 出土六文銭 …… 45
第27図	SX324 土墳墓 …… 23	第59図	SX140 出土六文銭 …… 45
第28図	SX326 土墳墓 …… 23	第60図	SX311 出土六文銭 …… 45
第29図	SX332 土墳墓 …… 23	第61図	SX313 出土六文銭 …… 45
第30図	SX356 土墳墓 …… 24	第62図	SX315 出土六文銭 …… 46
第31図	SX356 出土ビーズ玉 実測図 …… 24	第63図	SX320 出土六文銭 …… 46
第32図	SX399 土墳墓 …… 24	第64図	SX324 出土六文銭 …… 46

第65図	SX327 出土六文銭	… … … 46	第78図	SD98 出土土師器皿	
第66図	SX336 出土六文銭	… … … 46		法量図表	… … 49
第67図	SX356 出土六文銭	… … … 46	第79図	SD99 出土土師器皿	
第68図	SX359 出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 50
第69図	SX362 出土六文銭	… … … 47	第80図	SK114 出土土師器皿	
第70図	SX376 出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 50
第71図	SX387 出土六文銭	… … … 47	第81図	SK116 出土土師器皿	
第72図	SX399 出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 51
第73図	3 A15区第1 検出面		第82図	SK79 出土土師器皿	
	出土六文銭	… … … 47		法量図表	… … 51
第74図	A区墓域出土の		第83図	SK70 出土土師器皿	
	その他の古銭	… … … 48		法量図表	… … 52
第75図	C区墓域出土の		第84図	戦国期京都都市図	… … … 55
	その他の古銭	… … … 48	第85図	「僧永舜・氏女日吉十禪師社	
第76図	出土古銭統計図表	… … … 48		燈油下地寄進状」	… … … 57
第77図	SD83 出土土師器皿				
	法量図表	… … 49			

付 図 目 次

1. A区第1 検出面実測図
2. A区第2 検出面実測図・断面図
3. B区平面実測図
4. C区平面実測図・断面図
5. 門跡・溝実測図
6. 調査地周辺の遺構検出状況

例 言

1. 本書は、平安博物館が、日本リクルートセンターと明治生命保険相互会社の委託を受けて実施した、ビル新築敷地内の発掘調査報告書である。
2. 執筆分担は下記の通りである。
はじめに，第1章，第2章第1節・第3節，
第4章，おわりに
寺島孝一（平安博物館考古学第4研究室）
第2章第2節
山下秀樹（平安博物館考古学第1研究室）
第3章
藤本孝一（平安博物館文献学研究室）
3. 出土した人骨の鑑定は，京都大学理学部池田次郎教授に依頼した。
4. 写真撮影は主として藤本が担当したが，現像・焼付は，平安博物館技術室の水口 薫氏の協力を得た。
5. 本書の編集は寺島が行った。

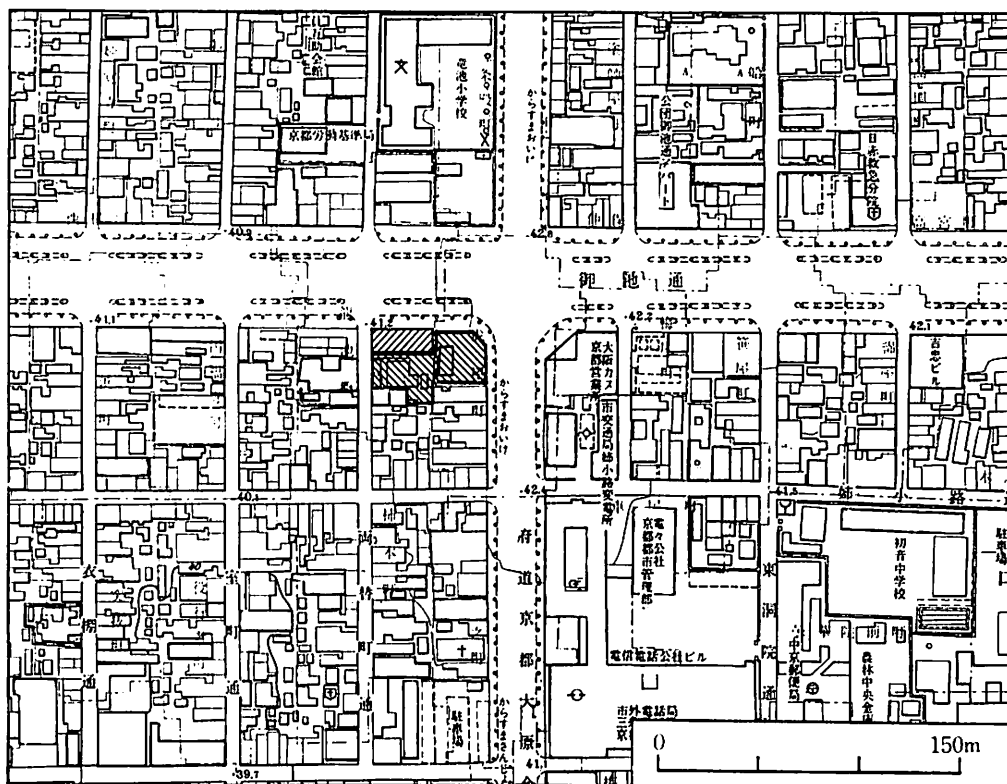
はじめに

日本リクルートセンターと、明治生命保険相互会社は、烏丸通御池西南角地に合同テナントビルの建設を計画した(第1図)。

この地は平安京左京三条三坊十一町にあたり、平安時代後期に高階為清(正五位下、備中守・佐渡守などを歴任した受領)の邸宅があったと文献に見える¹⁾。また、北には押小路殿、南には三条西殿など、平安時代後期・院政期の主要な邸宅が立ちならんでおり、これらに伴う遺構の存在が予想された。

また、南に隣接する明治生命用地²⁾、および更に南に続く中井商店ビル建設用地³⁾の調査では、平安時代の烏丸小路の東側溝と推定される溝が発見されている。

このため、京都市埋蔵文化財センターは、ビル建設工事前に試掘調査を行う必要を認め、日本リクルートセンター、長谷川工務店、平安博物館の立合いのもと重機による試掘調査を行った。その結果現地表下約2mで鎌倉～室町時代の遺物包含層を、3mほどの地山直上では、平



第1図 発掘調査地位置図 右下り斜線部分：A,B区 左下り斜線部分：C区

安時代の遺物の発見もあったため本調査を行うことが決定された。

事業主が2社に亘るため、各々所有する土地ごとに発掘調査委託契約を結び、第1次調査として日本リクルートセンター所有地(A・B区)、第2次調査として明治生命保険相互会社の所有地(C区)の試掘調査を実施した。

調査地の現在の地番は次の通りである。

日本リクルートセンター

京都市中京区烏丸通御池下ル虎屋町565-1・568・570・572番地

京都市中京区両替町通り姉小路上ル龍池町426・424-2・424-3番地

明治生命保険相互会社

京都市中京区両替町通り姉小路上ル龍池町431番地

調査体制は以下の通りであった。

調査依頼者

株式会社日本リクルートセンター

代表取締役 江副浩正

明治生命保険相互会社

代表取締役 土田晃透

調査主体

平安博物館 館長 角田文衛

調査担当者 平安博物館 寺島孝一(主任)・藤本孝一・山下秀樹

また調査補助員として次の諸氏の参加を得た。

山浦 修, 藤平 寧(以上関西大学), 酒井彰子, 須原久美子, 和田絵美, 石原みゆき, 吉田美由紀, 大西敦子(以上京都女子大学), 上杉英世(京都大学), 小宮康之, 木村弘之(以上奈良大学), 田畑文明, 相水公夫(以上同志社大学), 鈴木弘二, 石本 勝, 妻鳥万紀, 中村仁美, 山村恵美(立命館大学), 藪本幸男(京都産業大学), 小山知佐子(大谷大学), 竹田善久, 梅田敏彦, 石倉正裕, 北島かおり, 横浜二三子(以上京都コンピューター学院), 清滝龍, 津田美貴子, 宇野克美, 出口瑞鳥

作業員としては向日市を中心とする下記の方々の手をわずらわせた。また全京都建設共同組合を通じ、明輝建設の作業員の協力を得た。

橋本庄次, 橋本俊夫, 安田秀男, 吉田竜太郎, 五十栖章男, 木村謙治, 山中貞男, 三浦信一, 長谷川秀実, 田中義春, 五十棲治男, 古前健次, 福田文次, 赤沢俊夫

発掘作業は昭和58年9月中旬に重機による表土掘削を行い、9月19日～11月19日の2ヶ月をA区の調査にあて、B区は11月21日から12月10日の約20日間で実施した。

C区の調査は12月27日から開始し昭和56年2月4日に終了した。

調査終了後の整理補助員としては、以下の諸氏の参加を得た。

山浦 修, 藤平 寧(以上関西大学), 須原久美子, 酒井彰子, 大西敦子(以上京都女子大

学), 小山知佐子, 兵頭弥生, 富成純子(以上大谷大学), 妻鳥万紀, 中村仁美, 山村恵美, 湯浅久美子, 宮田明美, 夏井 環, 片桐且裕(以上立命館大学), 上杉英世, 川口浩一, 梅田和貴, 朴 貞子(以上京都大学), 小宮康之, 谷 英治(奈良大学), 田畑文明(同志社大学), 北島かおり(京都コンピューター学院), 岸本伸子, 津田美貴子, 出口瑞鳥, 鈴木とも子

尚, 発掘調査の準備段階から全調査期間に亘り, 長谷川工務店の木下俊一, 山本進一, 石樽芳久, 山口真治の各氏に, 機器の調達, プレハブ設営, 重機による掘削, 安全管理等多岐にわたってお世話になった。厚く謝意を表する次第である。また京都市埋蔵文化財センター所長浪貝毅氏, 同技官北田栄造氏には調査の斡旋から試掘調査を経て終了に至るまで, 指導・協力を賜わった。更に(財)京都市埋蔵文化財研究所には, 敷地内への国土座標の移設の労をとっていただいた。これらの方々協力の下で発掘が行われたことを記し, 感謝の意を表するものである。

註

- 1) 第3章参照
- 2) 寺島孝一編『平安京跡研究調査報告第12輯 平安京押小路殿跡・左京三条三坊十一町』(京都, 昭和59年)第3部参照。この調査地も合同テナントビル用地である。
- 3) 京都市埋蔵文化財研究所昭和57年度調査による。同研究所永田信一氏の御教示による。

第1章 調査の経過

本調査に先だって実施した試掘調査の結果、表土下2mほどまでが最近世～江戸時代の堆積層で、表土下2～3mに室町時代～平安時代の遺物の包含が認められた。この層序観察の結果と、調査期間等の諸条件を勘案して、表土下約2mまでを重機によって掘削し、以下を手作業で掘り進めることとした。

重機による掘削はまず日本リクルートセンター所有地のA区、B区について、昭和58年9月9日から17日まで、雨天による中断があったものの、ほぼ1週間で実施した。掘削にあたっては、敷地の周囲が、烏丸通、御池通、隣接するビル、民家にとり囲まれており、また3m以上の掘削が見込まれることもあり安全確保のため、約2mの法をつけ、更にその地点から約60度の傾斜をつけて掘り下げた。

ただし、敷地(A区)東端部分については、過去に実施された周辺地域の発掘調査などから、烏丸小路の西側溝が検出される可能性が極めて高いため、敷地いっぱいのラインにH鋼を打ち込み矢板で補強して、調査の万全を期した。

A区の調査は9月19日から、11月19日の2ヶ月に亘って実施し、東端部分で烏丸小路の側溝と推定される溝、門跡と推定される遺構を検出した。また、A区中央部に東西に走る溝を検出し、溝の北側では多数の土壇墓、集石墓を検出した。これ以外の遺構としては、井戸、室などが発見されている。

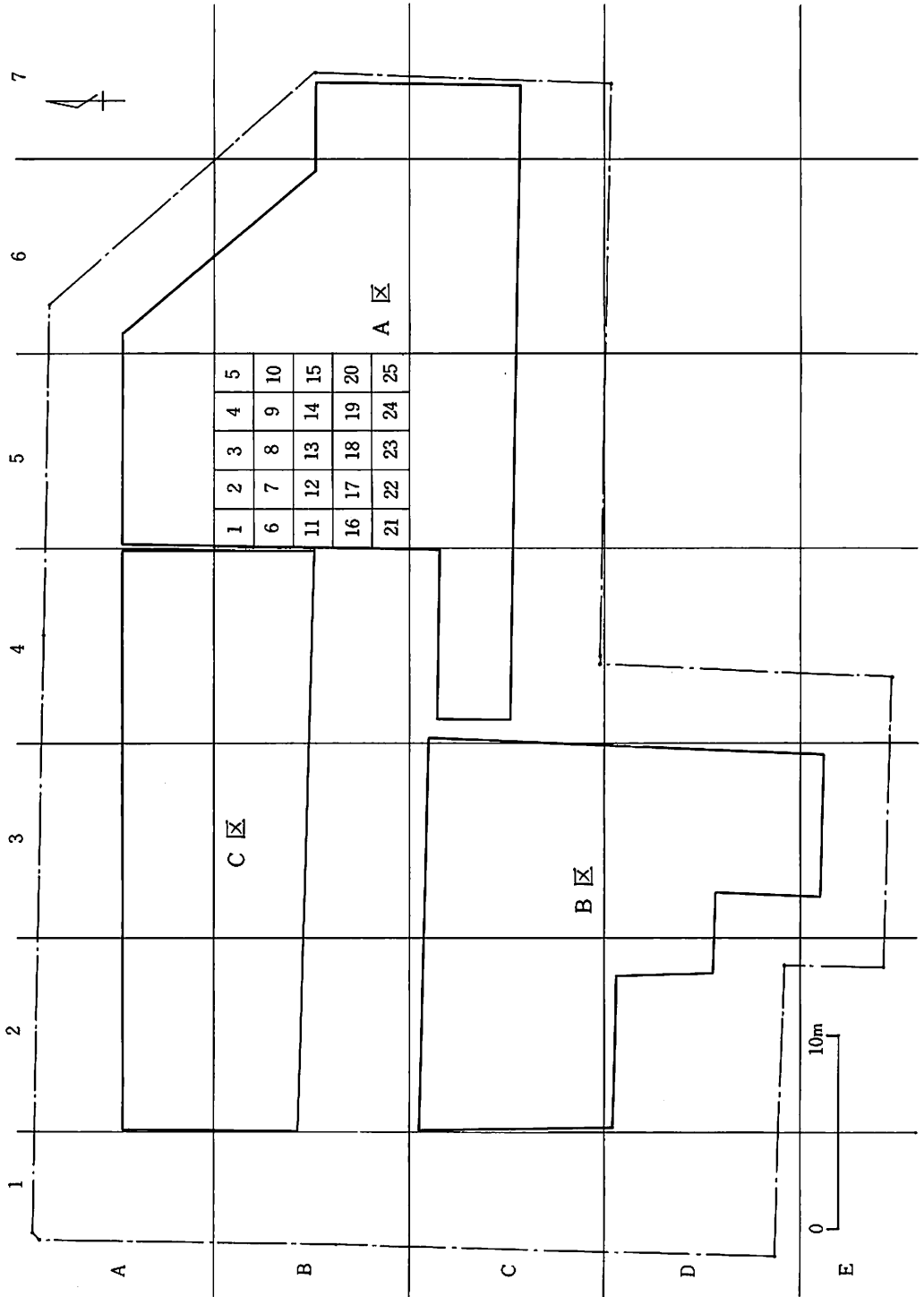
B区の調査は11月21日から12月10日の約20日間で完了したが、ここでは江戸期における粘土の掘削の跡が著しく、顕著な遺構は検出されなかった。

C区の重機による掘削は12月中旬から実施し、12月27日から翌昭和59年2月4日に終了した。C区では、A区で検出された墓の続きが発見され、50体を越える人骨や、五輪石などが検出されている。

尚、A～C区の敷地全体に10m方眼のグリッドを組んだ。西から東へ向って順に1～7の番号を付し、北から南に向ってA～Dの記号を付した(第2図参照)。更に各グリッドに2mの方眼を組み1～25の番号を付し、遺物等の取り上げはこれによっている。

第1節 層 序

調査地全体の地表のレベルが一定していない(西に向って傾斜している)ため、ユンボによる掘削の深さは一定ではないが、およそ1.5～2mを機械掘りしている。この部分は近世以降の堆積層で、一部には明治以降の大量の砂質土による整地層も認められた。また江戸末の元治元年の大火によると考えられる焼土層及び、焼土・瓦を埋めた土壇も確認されている。



第2図 調査区トレンチ設定図

6 第2節 A区の調査

重機による掘削以下の土層は、A～C区ともに13～16世紀の堆積層が主として認められ、平安時代の層としては、A区南壁、B区北壁、C区北壁に僅かに認められるのみであった。それともいづれも11世紀～12世紀のもので、平安時代前期～中期の土層は観察できなかった。また、後述する烏丸小路の側溝の部分については、溝に直交する南北両壁面とも、近世の室や土壌による攪乱のため、良好な状況での断面観察は行えなかった。

鎌倉、室町時代の層についても、多くの切り合いが認められ、一定の安定した層序は確認できなかった。ただし、墓塚の集中して発見されたC区では、14～15世紀の遺物を包含する、鉄分をやや多く含む層を掘り込んで墓塚が形成されており、墓の成立年代を知る上での一つの手がかりとなった。

C区の西半とB区については、鎌倉～室町期の堆積層も、近世の様々な掘り込みによって破壊されており、良好な堆積状況は認められない。

第2節 A区の調査(付図1・2)

重機による掘削後、30cmほど掘り下げた段階で検出した遺構を、第1検出面発見の遺構とした。この段階で発見されているものは、近世の井戸がほとんどで、他にA区中央を東西に走る溝(S D 45)の輪郭をつかんだ(付図1)。

井戸はこの段階で29基が確認されたが、ほとんど全てが、江戸時代以降のものであった。このうちには、素掘りのもの(S E 08・09・17・42・48・31)と切石を積んだもの(S E 01・05・06・07・29・30・32・60など)がある。これらの井戸がいずれも掘り方の直径1.5～1.8m、石組内径0.8～1mであるのに対し、S E 34・50は、石組内径50cmと極めて小さな井戸であった。

A区東側では室跡と推定される遺構が検出されている(S X 26～28)。このうちS X 26・28はそれぞれ南端・北端を僅かに検出したのみであった。全体を検出したS X 27では、南北2m、東西1.8mの規模で、花崗岩の切石を回らし、床面と内壁に漆喰を塗ったものである。

A区西側張り出し部分には、人頭大～拳大の礫を配した遺構が検出されたが、性格等は不明であった。

S D 45の北側では、近世の井戸による破壊が著しいものの、相当数の集石が検出された。これらの集石は直径1m程度に集中するものから、数mの範囲に比較的粗に分布するものまで、様々な様相を呈していたが、この集石検出面以下の調査で、埋葬された人骨が多数発見されたことから、墓の上部構造に関連するものと考えた。

第1検出面では顕著な遺構として集石墓を検出し、この部分(S D 45の北側)については、墓塚と人骨の調査を続けて行った。S D 45の南側については、次第に掘り下げていったものの顕著な生活面は認められず、最終的に地山に掘り込まれた遺構を検出した段階を第2検出面とした。この面に至るまでの主要な遺構としては、13世紀後半の土師器を主体とした土器を大量に含んだS K 70などがある。

A区の東端部分では、当初予想した通り、烏丸小路の側溝と考えられる溝が数本と、烏丸小路に面した門の礎石と考える遺構が検出された点が大きな成果と言える。

また墓域の下層からは平安末～鎌倉期と考えられる方形の木杵を持つ井戸が検出された。

更に中央部やや西側では、礎盤として用いられたかと思われる状態で、奈良時代の軒丸瓦、軒平瓦のセットが円形の土壌から検出されている。

第3節 B区の調査（付図3）

B区は、そのほとんど全てが江戸時代後半の粘土採集跡と推定される土壌で占められていた。この土壌には方形のもの、円形のもの、不定形のものなど様々な形態が認められる。これらの土壌を粘土採集跡とした根拠は、

- 1) 相互に重複しないように、しかも壁を接して掘られていること。これはS K 219, 212, 217, 216などの互いに接した土壌で顕著に認められる。
- 2) 井戸などの障害物がある場合はそれをさけており、必ずしも円形または方形にこだわっていないこと。これはS K 245, 227などに顕著に認められる。
- 3) いずれの土壌も、掘り方の下端が、粘土層の終る深さ、すなわち砂礫層の直上で終わっていること。

の3点である。

この数多くの粘土採集跡の間げきをぬって井戸が検出されているが、いずれも近世のものである。構造としては石組を持つもの(S E 222, 230, 208, 205など)と素掘りと考えられるもの(S E 262, 209, 234)がある。

B区中央部には、粘土採集をまぬがれて、土蔵跡と推定される遺構が検出された(S E 207)。検出されたのは漆喰敷きの床と、壁に用いたと推定される切石の裏込と考えられる花崗岩のみであったが、床面の漆喰の壁へ続くわずかな立上りの痕跡から、内径は東西3m、南北3.5mほどと推定された。またこの床面中央には、蔵の心柱の礎石と考えられる花崗岩の切石が置かれていた。この床面下では、粘土採集跡は検出されなかったことから、粘土を採集した時期以前に建造されたと考えられる。

第4節 C区の調査（付図4）

西側の5分の2ほどはB区と同様に近世の攪乱が著しく顕著な遺構は検出できなかった。

東側はA区で検出された墓域に続き、多数の墓塚が確認された。

墓以外の遺構としては、C区北側で鎌倉期の溝が検出されている。この溝は幅が約1.2mで、両端は近世の土壌によって破壊されているものの、東西にはほぼ15mにわたって検出された。

井戸もA・B区同様近世のものが多数検出されているが、鎌倉期のものも1基検出した(S

8 第4節 C区の調査

E374)。

S K364は、隅丸方形の石組を持つ井戸状遺構であるが、底部にも礫を敷きつめている。また、深さも他の井戸を比較して浅く、特殊な用途のものであると思われる(図版第25)。

また、この近くで礫を敷きつめた中に榎状のものを配したと考えられる遺構が検出されている(S X339)。木質はほぼ完全に腐食していたが、幅は約10cmと考えられる。長さは東西に約3mにわたって確認した(図版第24)。周辺には酸化鉄の付着が認められ水に関係した遺構と考えられる。

第2章 遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構・遺物で、最も注目すべき成果として、1) A区東端で検出した烏丸小路の溝及び門跡と考えられる礎石、2) A区北側からC区にかけて検出した墓壇群があげられる。

本章ではこの2者を第1・2節でとりあげ他の遺構と遺物については、第3節にまとめることとした。

第1節 門跡と烏丸小路の側溝

(付図5)

A区東端で、門跡と思われる一対の礎石と対にはならないもののいくつかの礎石ないしその抜き跡、そして南北にのびる溝を数本検出した。

1) 門跡(S E 65)(図版第8～11)

S B 65-bは1.1×1.2mの方形の掘り方を持ち、そのほぼ中央に東西40cm、南北60cm、厚さ25cmの花崗岩をすえている。S B 65-aは、東側に後の時期に置かれたと考えられるやや小形の礎石を置くものの、ほぼ方形の掘り方を持ち、東西60cm、南北70cmほどの、やはり花崗岩の礎石を置いている。厚さは前者よりやや薄く、23cmほどであるが、両者の上面のレベルは、絶対高で39m強とほぼ一致している。礎石上面の水平を保つためS B 65-bでは東側に、S B 65-aでは南～西側に根石を配している。この2つの礎石の芯一芯の距離は3.2mであった。用いられている石材の種類、形態及び上面のレベルの一致すること、また掘り方の形態の一致することから、この両者が一対となり、門の礎石となることは確実に考えられる。

この門が、2本の親柱のみによる棟門であるのか、あるいは前後に支柱を配する四脚門であるのか不明であるが、少なくとも調査地の範囲内では四脚門の痕跡は認められなかった。

両者の掘り方の埋土からはごく少量の遺物のみの顕出にとどまった(第3図)。土師皿(1～3, 5・6・8)の形態からみて10C代の年代を想定できる。

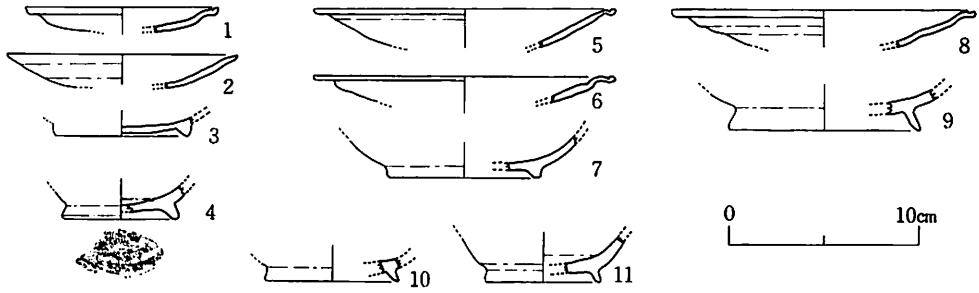
他にもS B 69の礎石、S B 68の根石など、門の遺構を推定できるものが認められたが、いずれも一対になるものは認められなかった。

2) 溝

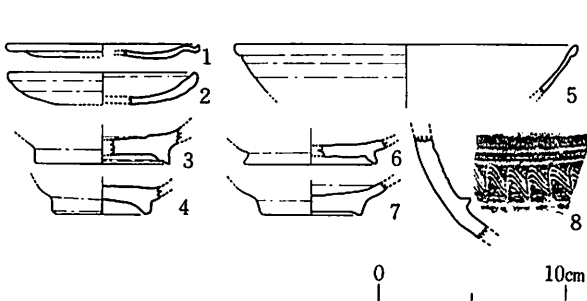
S D 83・86・98・99・130など5本以上の溝が重複して検出された。

S D 83は東端部でわずかに検出されたのみで、東肩の検出は敷地外のため不可能であった。11世紀代の土師皿を多く検出している(第6図)。

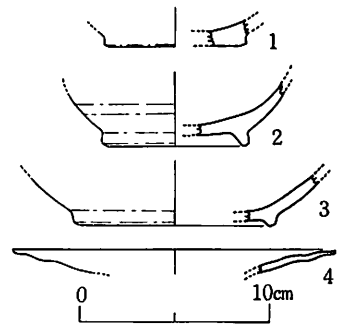
10 第1節 門跡と烏丸小路の側溝



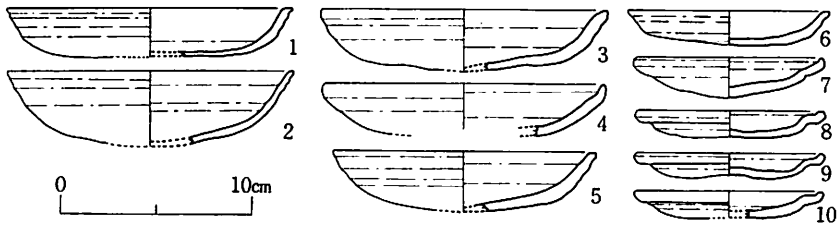
第3図 S B 65- a (1 ~ 9) ・ S B 65- b (10 ~ 11) 出土遺物実測図



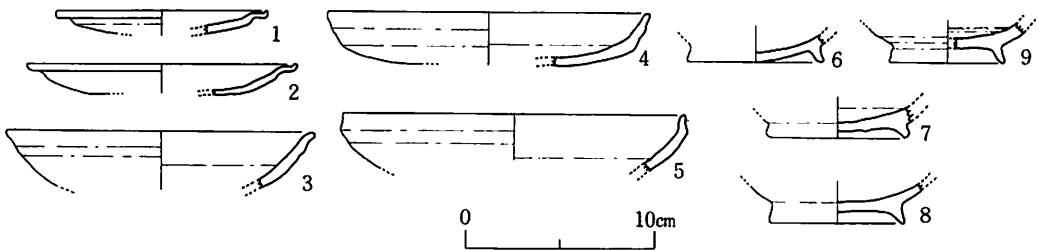
第4図 S B 69 出土遺物実測図



第5図 S B 186 出土遺物実測図



第6図 S D 83 出土遺物実測図



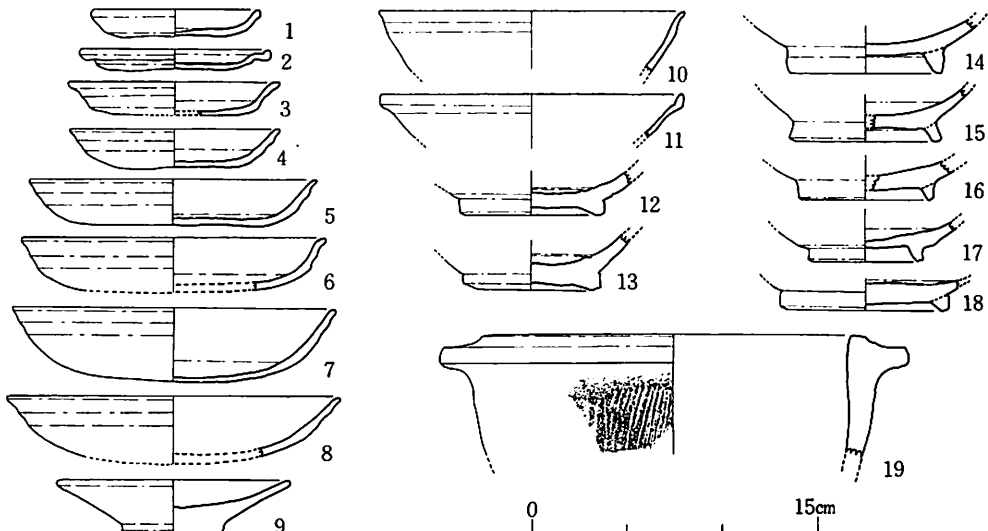
第7図 S D 66 出土遺物実測図

S D66はS B66の北側から掘削が始まり、調査地北端まで約2.2mを確認した。幅は検出面の上端で約1mであった。出土した遺物(第7図)は土師皿が多いが、施釉陶器も少量発見されている。年代は11世紀代を比定できる。

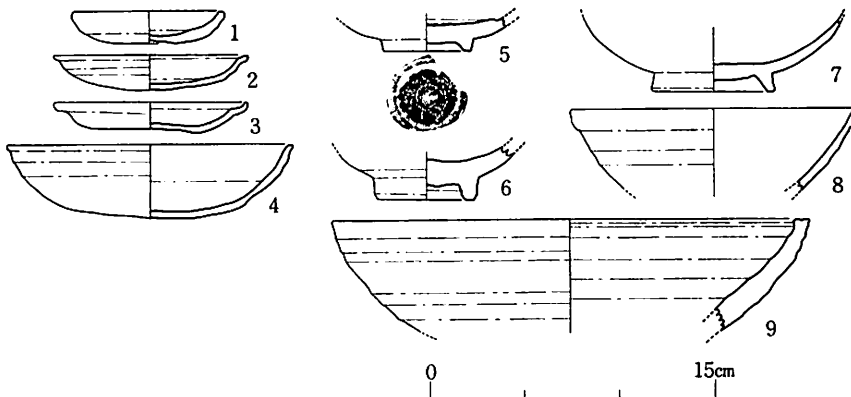
S D98は門跡より内側で、礎石のほぼ中央部分から北側にのびている。幅はやはり1m程で、北端部は後世の土壌によって破壊をうけている。遺物(第9図)から11世紀代のものと推定できる。

S D99はS D98のすぐ西側に掘られた溝で、やや不整形をなしている。土師皿の形態から12世紀代のものと考えられよう。

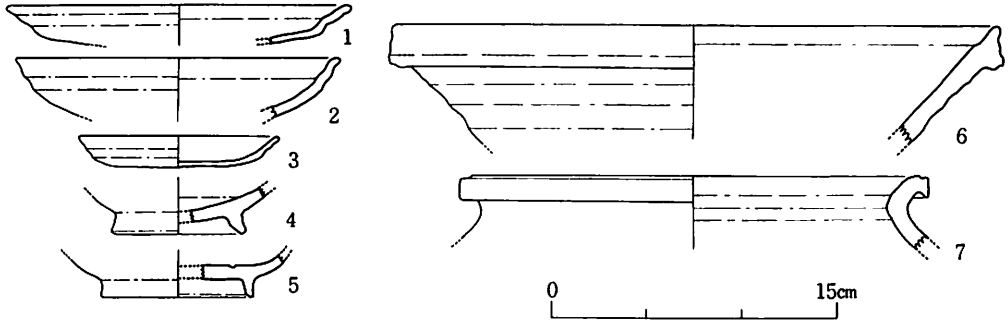
門跡の南側では多数の溝が重複して検出された(S D130, S K144, 143も溝の可能性が大きいと考えられる)。これらの溝からは13~14世代の土師皿が検出されている。また、S D98・99が埋められた段階で、この部分のごく残い溝になっていた様子で、13~14世紀の遺物及び礫が堆積していた(S D100)。



第8図 S D99 出土遺物実測図



第9図 S D98 出土遺物実測図



第10図 S D100 出土遺物実測図

3) 門跡と溝の方位と重複関係

これら検出された礎石の芯一芯、溝の方位は、いずれも東に約5度ふっている。これまでの他の調査の検出例では、多少の方向の不同はあるものの、今回の調査例のように大きく方位がずれた例は認められない点が注目される点である。

また、今回の調査で対として検出した礎石はS B65の一对のみであったが、他にもいくつかの礎石が、近接して検出されている。これに対応するかのように、発見された溝が、いずれも礎石部分をさけて掘られているのは注目すべき点であろう。

この地点は、これまでの調査例による条坊復元によれば(付図6参照)、左京三条三坊十一町の中心線よりやや北側に位置している。平安時代中期から鎌倉時代に至る礎石や溝が、いずれもこの地点を意識して配されていることは明らかで、永い期間に渉って、この場所が出入口として用いられていたと考えられるのである。

5度にも及ぶ方位のずれと、敷地中央部よりやや北に位置する門の位置は、貴族の邸宅のあり方の一つの例として興味深い史料となるものであろう。

また、関連資料として絵図に見られる棟門・四脚門(図版第14)の他に、現存する門のうち主要なものを掲げた。

図版第12-上は奈良市にある新楽師寺東門である。平安末～鎌倉初期に建立されたもので、本来親柱2本のみの棟門であったものが、後に支柱をつけ四脚門になったといい。柱の芯一芯の距離は約4.5mである。

図版第12-下は法隆寺西園院の上土門で、鎌倉時代に建立された(重要文化財)。柱の芯一芯の距離は2.5mである。

図版第13-上は奈良市十輪院の四脚門で、鎌倉時代の建立。柱の芯一芯は3.15mである。

図版第13-下は法隆寺宗源寺四脚門で鎌倉時代の建立である。柱の芯一芯距離は約3.3mである。門の幅という点からみると今回検出した遺構は図版第13に示した2つの門に近い数値を持っている。

第2節 墓

発見された墓は、土葬墓と火葬墓に大別できる。土葬墓はさらに構造の違いによって、集石墓と土塚墓の二つに分けられる。

1) 集石墓

合計17基発見されている。人骨検出の有無に係わらず、礫が集中した状態で発見されたものを全てをこの範囲に入れた。多くの場合、径50～100cmの範囲に10～100個の拳大の礫が集中している(付図1, 図版第31～34)。礫には完形の円礫が多いが、一部を欠損するものも含まれる。石材では砂岩に次いで珪岩が多く、両者でほぼ全てを占める。

集石墓は、さらに下部構造の差によって三つに分けられる。

第一は、集石下に人骨を伴う墓塚を持つ例である。これにはS X 19(第11図, 図版第32)のみが含まれる。

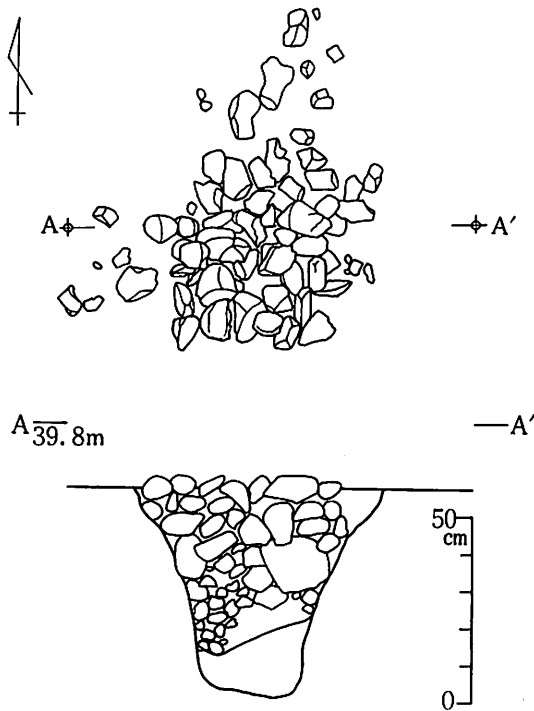
S X 19は、本調査で発見された墓の中では最も秩序だった手順に従って構築されたと思われる。

近世の井戸に切られてはいるが、平面形では径約1mの範囲に拳大の礫が集中する。集石の下には、深さ約60cmの墓塚が認められる。墓塚底面は平坦面とはならず、下方にかなり強く突出した曲面をなす。墓塚内の堆積は3層に分かれる。最下層には墓塚底を覆うように灰色砂質土が薄く堆積し、その上に径20cmを越えるような大きな礫が厚さ30cm近く積まれる。礫間を充填する土は、灰褐色の細粒シルトで粘性が強い。この上に遺体を安置した様で、人骨の多くが礫層上の暗褐色土中で発見されている。一部には、下の礫層中に落ち込んだ人骨もある。遺体を安置した上にさらに礫を配することで墓の構造が完結しているようである。このように、S X 19に見る墓の構造は単に死体を埋めるというに留まらず、埋葬方法において秩序だった手順を踏んでいると言える。

一方、繁雑な埋葬手順に反し、副葬品の出土は皆無である。また棺等の痕跡も全く留めておらず、直葬であった可能性が高い。墓塚内の人骨の分布には若干の乱れが認められるが、北端から歯が、南半から骨盤が出土し、南北方向に大腿骨が延びる事から考えて、頭位を北にした屈葬が行なわれたと思われる。頭骨のほとんどは井戸を作る際に取り去られている。

第二は集石の下に明瞭な墓塚を伴う例である。S X 15が本例に含まれる。

S X 15は、径50cm程の範囲に礫の密集した、最もコンパクトな集石である(第12図, 図版第33)。集石下に、深さ約60cmのほぼ円形の墓塚を持つ。集石を構成する礫は墓塚深く落ち込んでおり、上面からおよそ45cmにまで達する。墓塚内と上面で、礫の大きさにはS X 19のような著しい差は認められない。墓塚底には、黒褐色土が堆積する。底径は約25cmである。人骨・副葬品は全く出土していない。



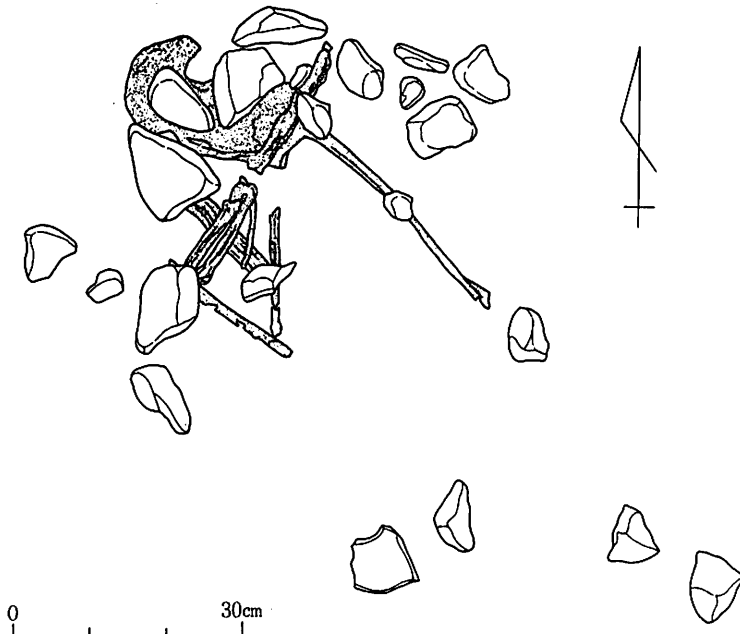
第12図 SX15 集石墓

本例は、集石と墓塚の規模から判断して、小児の墓であった可能性がある。

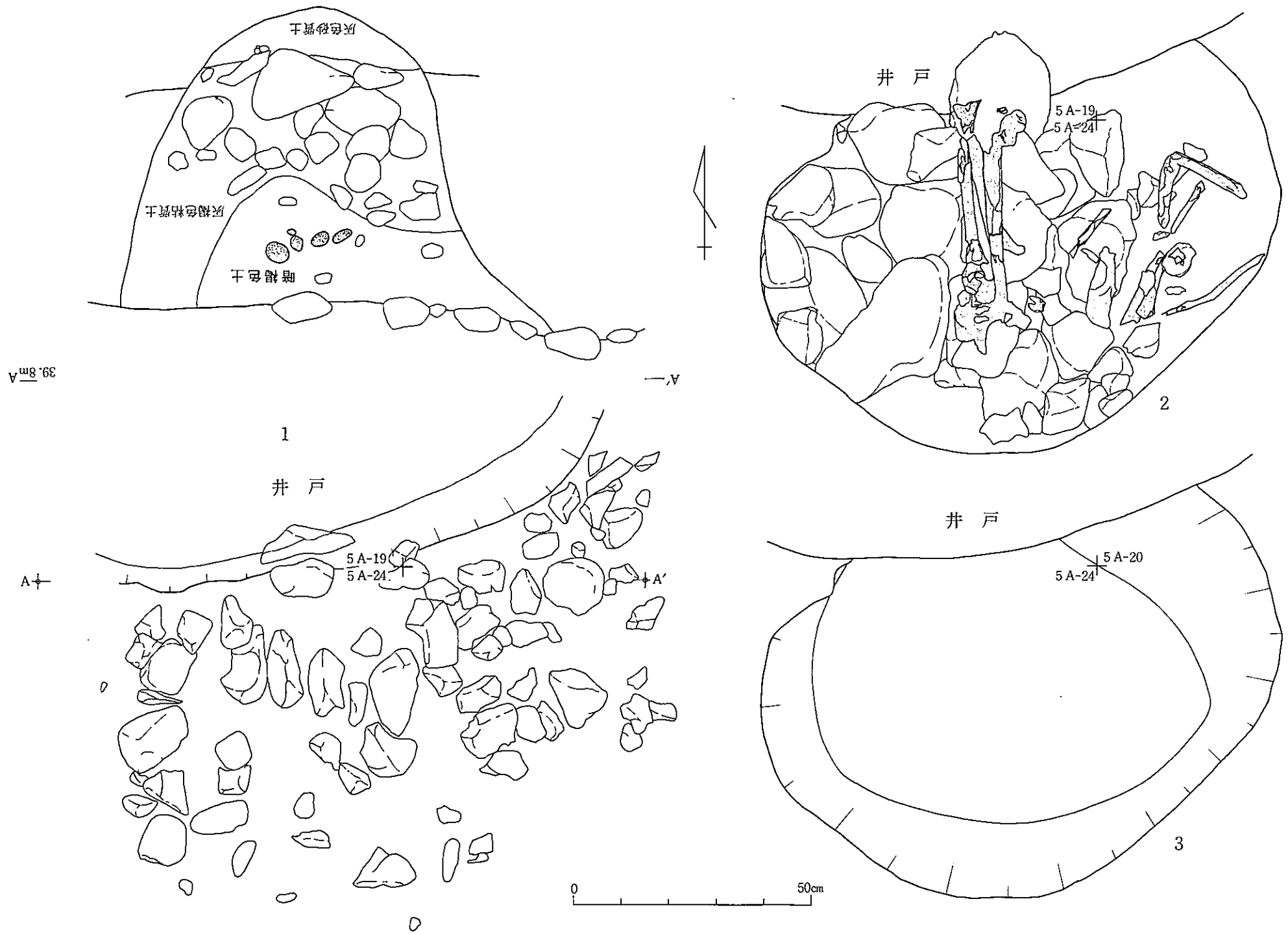
第三は集石のみ発見され、他に何等の遺構をも伴わないものである。この中には、墓塚は未確認であるが人骨が集石下から発見されているものも含んでいる。S X 118・119・322が人骨を伴うものである。

S X 322は、径1mの範囲に20点の礫が散っており、ようやく集石として認定しうるものである(第13図、図版第34—上)。礫の一部には骨片の付着も認められ、集石墓塚の可能性が強かったが、他の例に違わずやはり墓塚の確認はできなかった。集石下の人骨は残りが悪く、頭骨、上・下肢骨の一部のみが検出された。六文銭が副葬されていた。本例の集石と

人骨が確実に伴うものと判断されるものであれば、未検出ながら土壌の存在は確実視されるべきものであり、第2の例の範疇で把えるべきかもしれない。



第13図 SX322 集石墓 (○:人骨)



第11図 SX19 集石墓 人骨出土状態 1: 墓壇上面集石検出状況及び断面図 2: 墓壇中段人骨・磔出土状況 3: 墓壇完掘状況
 (◎: 人骨)

S X 118は、人骨を伴うとは言え集石を構成する礫の間に3～5cm位の断片が10点余混入している状態である。従って、集石下から人骨がまとまって出土するような通常の状態とは異なっており、むしろ再堆積を示唆するものである。集石の礫も広範囲に散在し、上下のレベル差も大きく、人骨に認められる傾向と符合する。

他のS X 13・14・16・20・21・22・35・49・174・337・338・389では、いずれも集石のみが発見されている。

この中で、S X 174のみは径20cmからそれ以上の礫で構成されており、また集石下が直ちに地山に接しているという点で、他と性格を異にする。広がりには、他と同様径60～70cm程である。他に類例がないことから判断すると、本来はS X 19と同じ構造であったものの、人骨を含む上半部が取り去られ、人骨下の大きな礫の部分のみ残された可能性もある。副葬品はない。

S X 337・338も若干他と様相を異にする。

S X 337は、集石中最大規模で、約150×50cmの中に100点以上の礫が密集している。集石上面が、他に較べ強く上方に突出した曲面を程しており、下面は直ちに地山と接している。すなわち、礫は盛り上がった地山の上に乗っているだけで、下部構造の存在には全く否定的な在り方を示している。

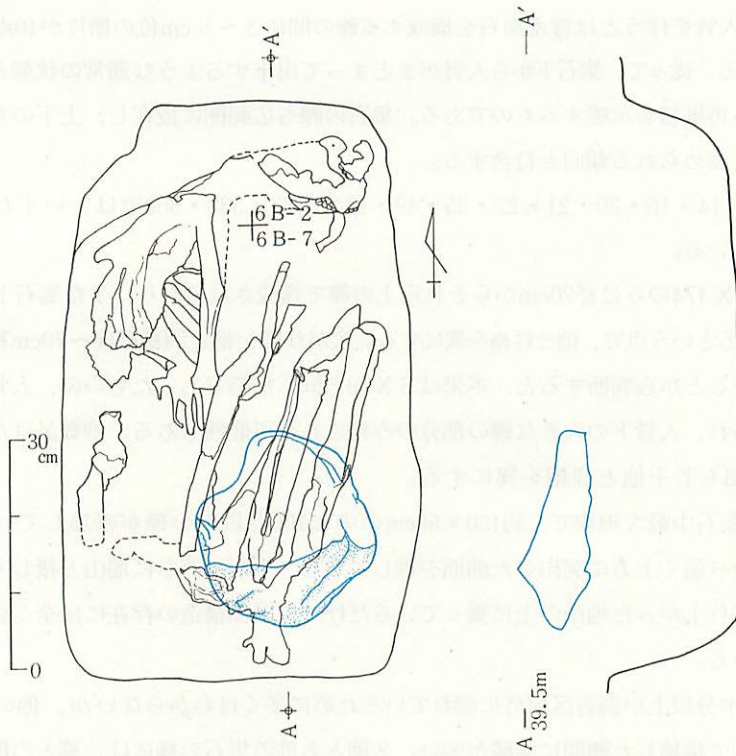
S X 338は、半分以上が調査区域外に隠れているために多くはわからないが、他の集石に較べ著しく重層的で集積した礫間に空隙が多い。2例とも他の集石の様には、墓との関連を想起し得ないものである。

残る9例の集石は、S X 14を除くと概して礫の密集度は低い。墓墳はおろか副葬品と思われる伴出遺物も皆無で、本来ならば墓としての確認そのものにも一考を要するものである。ここでは、人骨の出土範囲と集石の分布域がほぼ重なる事と、数例とは言え集石と人骨が伴出と判断される状態で認められた事から、拡大解釈して、集石のみの例についても一応墓の一形態として取り扱った。

2) 土 墳 墓

集石を伴わず、原位置を保って出土したと思われる人骨は全てこれに含めた。総数41体以上だが、S X 54・80・82・90・131・183・311・312・319・321・387の11例では墓墳が検出されている。墓墳を検出し得なかった例でも、埋葬行為の存在から判断して墓墳を穿ったことは確実視される。度重なる埋葬による土層攪乱の結果、墓墳覆土と周囲の土質が均質になり両者の識別が困難になったと考えられる。以下、墓墳が検出された墓全てと、未検出のものでも特徴的な例について、出土状態を詳述する。

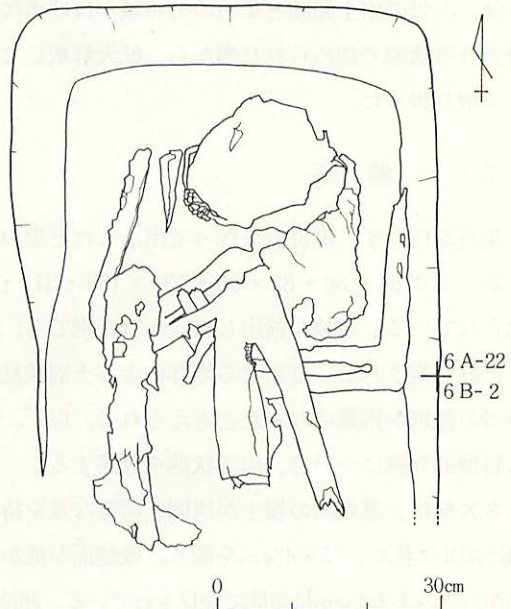
S X 54は、墓墳内の覆土が周囲と明瞭な差を持つ唯一の例である(第14図、図版第35)。墓墳は南北に長く、75×45cmを測る。確認面が低かったために、深さはわからない。人骨は、底面からその上方45cm位の間で発見されている。頭位を北にし、体を東に向けた横臥屈葬である。抱くように折り曲げた右大腿骨の直上から、人骨に接して径25cm、厚さ10cm位で部分的に欠損



第14図 SX54 土壇墓人骨及び抱石

した砂岩の大きな円礫が発見されている。出土状態から、埋葬行程に関連する意図的な行為の一環とも考えられるが、他に類例を見ない。墓には石を伴うものも多く、本来墓壇上面にあった石が墓壇内に落ちた状態で発掘される例も多い事を考慮すると、本例もこうした墓壇と一連のものと考えた方が妥当かとも思われる。副葬品の伴出はない。

SX80は、80×50cm程の南北に長い墓壇を持つ(第15図、図版第36一上)。他と同様、人骨が検出された後に墓壇が判明したため、深さはわからない。頭骨の位置と下肢骨の状態から、体を西へ向けた横臥屈葬と考えられるが、左上肢骨が脊椎骨の左に位置する点と、不明瞭ながら脊椎骨が北東から南西方向に延びているようにも認められる点から、座棺と同じように座った状態で埋葬されたものが、上からの土圧で変形した可能性も否定しきれない。副葬品は出



第15図 SX80 土壇墓

土していない。

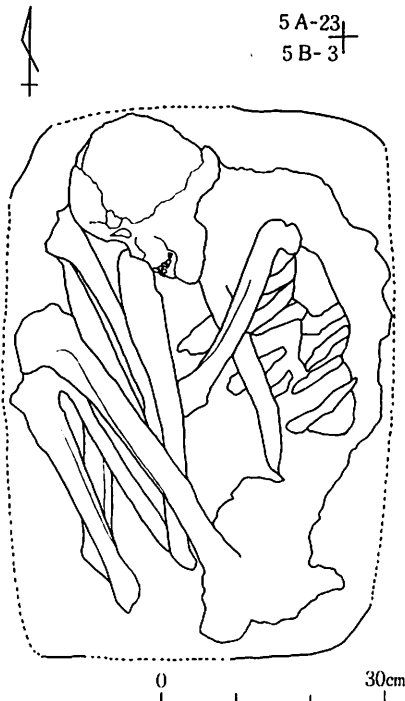
S X 82は、今回の調査で出土した人骨中、最も完全な形を留めていたものの一つである(第16図, 図版第36一上)。南北に長い, 75×50cmの墓塚を持つ。頭位を北に, 体を西に向けた横臥屈葬である。副葬品の出土はない。本人骨は, 葬法の具体例を示すものとして, 現地から切りとり, 平安博物館において保管している。

S X 90は, 上層の集石墓S X 13を半割して墓塚の有無を調べる際に出土したものである(第17図, 図版第37一上)。このため, 他の土塚墓に較べ, 早くから存在が知られており, 墓塚の深さも少なくとも50cm以上あることがわかっている。平面形は80×55cmと南北に長い。遺体は, 墓塚のやや西寄りに, 頭を北に体を西に向けて横臥屈葬されていた。墓塚の東縁, 中央底面近くからは, 径10cm程の砂岩円礫が3個発見されている。丁度, 人骨と墓塚東壁の遺物空白部に位置したことから考えて, 埋葬当時から意図的に置かれた石と考えたい。

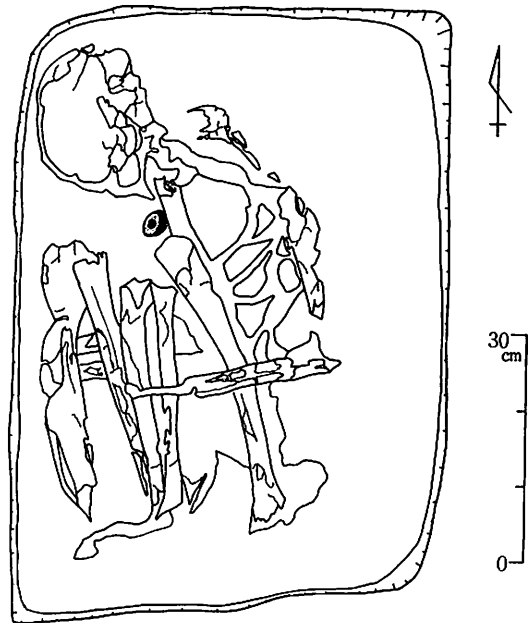
副葬品としては, 六文銭が頸骨のそばから出土しているのみである(第58図)。埋葬時には, 紐を通して首に掛けられていたものと推察できる。6枚とも北宋銭である。

S X 131は, 井戸の断面観察で発見されたもので, この墓塚も50cm以上の深さを持つ。平面形は80×60cmと南北に長い。頭位を北に体を西に向けた横臥屈葬である。井戸に切られているのは, 後頭部から頸骨・脊椎骨の一部にかけてである。

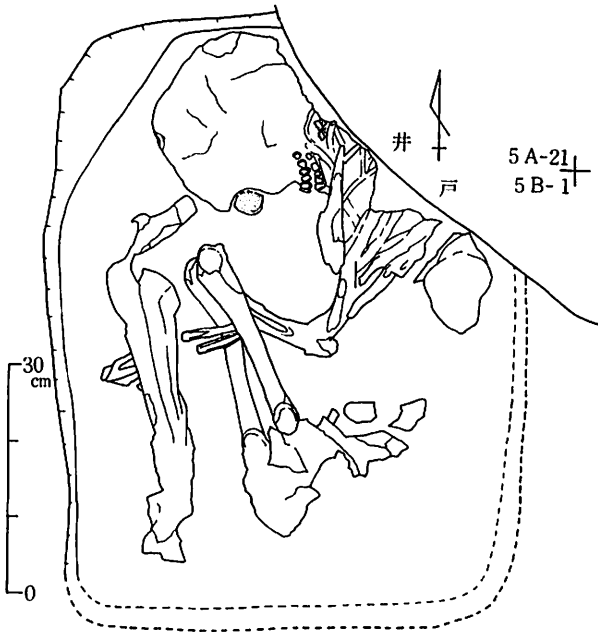
副葬品としては, 六文銭と漆椀が出土している。出土位置は, 丁度眼窩の窪みと一致するが, やはり首に掛けられていたものと考えて矛盾しない。銭の名称がわかるのは, 2点のみである。



第16図 S X 82 土塚墓

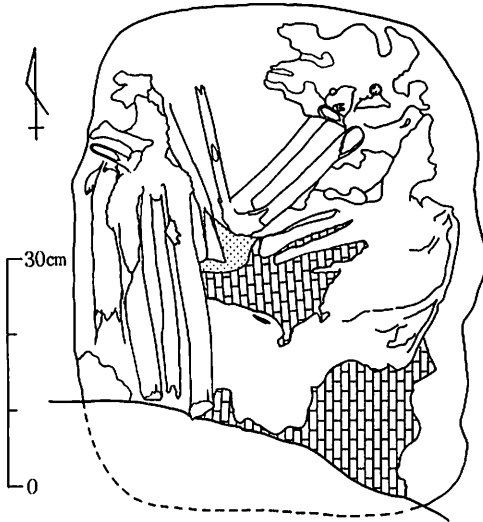


第17図 S X 90 土塚墓 (●: 六文銭)



第18図 S X 131 土墳墓 (○:六文銭)

で、T字形に穿孔され3つの穴が口を開けている。3つの穴を比較すると、房の垂下する穴に較べ相対する2つの穴の口縁部に、より損耗が顕著である。珠数玉は頸骨の上から発見されており、近年の珠数を手首に掛ける葬法から推定できる遺存位置とは異なるようである。腕は胸



第19図 S X 183 土墳墓
(⊙:腕 ⊕:玉 HH:敷物)

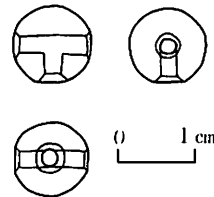
2枚の初銚年には100年程の開きがある(第18図, 第58図, 図版第38—上)。

S X 183は、南北に長い70×50cmの墓塚を持つ(第19図, 図版第39)。深さはわからない。頭位を北にし体を西に向けた横臥屈葬である。頭骨と腰骨・下肢骨下端を欠く。腰骨と下肢骨下端は、井戸掘りの際に取り去られたものである。

副葬品としては、珠数玉と腕が出土している。珠数そのものはわからないが、三ツ穴の止め玉が1点出土している(第20図, 図版第54—3)。X線回折の結果ガラス玉であることが判明した¹⁾。玉は径9.5mmの球形

と折り曲げた膝の間から出土している。黒漆と赤漆が共伴するが、木質部は既に朽ち果てており、漆腕の製作技術・文様等については不明である。

本墓塚底からは、さらに遺体の下に敷いたと思われる敷物が発見されている。分布範囲は胸部から腰・下肢の部分に限られる。素材の分析はしていないが、後述するS X 399の例から考えて竹である可能性が高い。



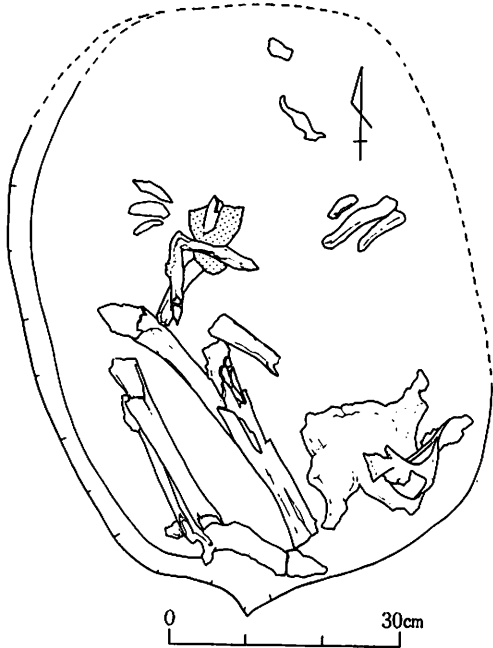
第20図 S X 183 出土珠数玉実測図

縦材と横材を交互に編み込んでいる。洛南の鳥羽離宮跡で、16世紀のものと思われる竹籠に遺体を入れて埋葬した墓塚が報告されている。図で比較する限り本遺跡のものと似ており、敷物と考えた編み物が籠であった可能性もある。

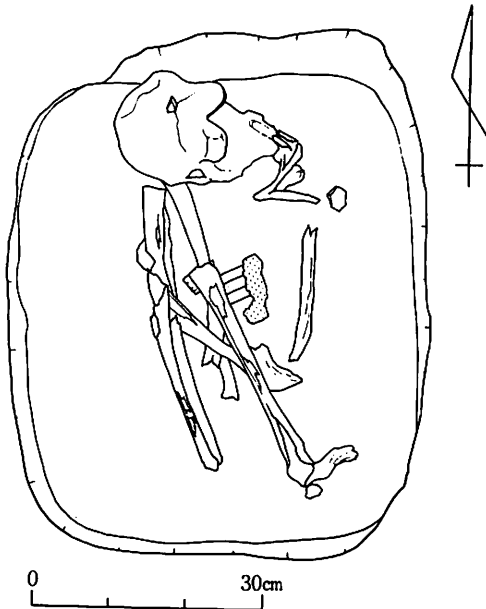
S X 311は、80×60cm程の墓塚を持つ（第21図、図版第40一下）。頭骨は機械による削平作業中に取られたと思われる。地山に掘られた墓塚であったために、平面形は比較的明瞭であったが、墓塚底近くまで削られていたために人骨の残りは必ずしも良くなかった。腰骨と下肢骨の位置から考えて、他と同様に頭位を北にした西向きの横臥屈葬と思われる。

副葬品としては漆碗と六文銭が出土している。

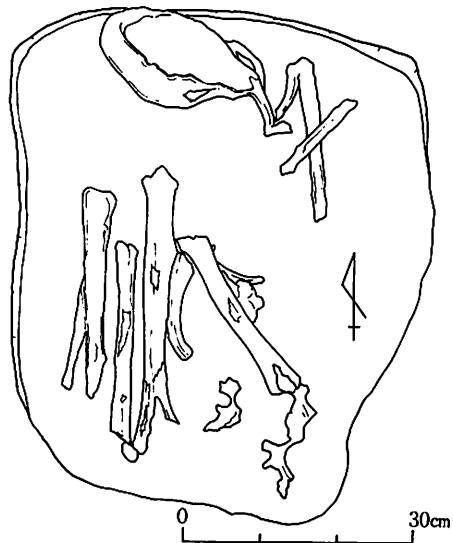
S X 312・319はともに65×55cm程の南北に長い墓塚を持つ（等22・23図、図版第41一上、42一上）。深さは、発見時で少なくとも20cm以上である。S X 312では、東・西の両側にやや広いゆとりがある。ともに



第21図 S X 311 土塚墓 (○:碗)



第22図 S X 312 土塚墓 (○:碗)

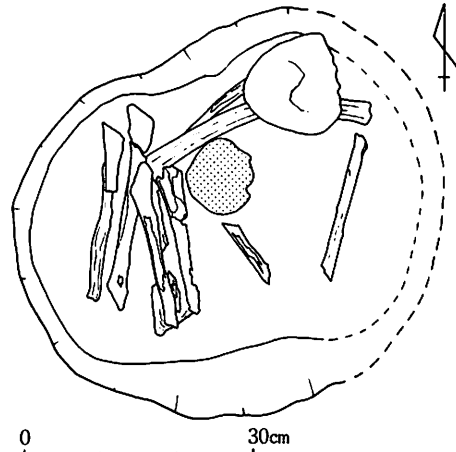


第23図 S X 319 土塚墓

頭位を北にした西向きの横臥屈葬である。S X 312では、漆椀が墓壇の丁度中央、胸と膝の間から出土している。

S X 321・387では他と違いほぼ円形の墓壇が認められた。

S X 321は、径50cm程の墓壇を持つ(第24図、図版第42一)。墓壇と骨の位置関係を見ると、頭骨は北縁に、折り曲げた下肢骨は西縁に、上腕骨は東縁にあり中央部は空白である。脊椎骨は、北東—南西方向に延びていたと思われる。この骨の分布から推察すると、当初円形と考えた墓壇も、主軸を45°程東へ振った長方形のものである可能性もある。墓壇中央には漆椀が副葬されている。

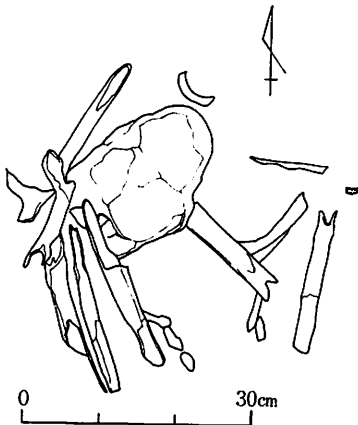


第24図 S X 321 土壇墓 (○:椀)

S X 387は、座った状態で埋葬されたと考えてほぼ間違いのない例である(第25図、図版第49一上)。墓壇底面は、径約50cmのほぼ円形を呈する。墓壇は、14世紀前半のものだと判断されるS K 381の覆土に穿たれている。S K 381東半の覆土中層部には、径10cm程の礫が一面に分布するが、丁度墓壇の範囲だけはこれが取り去られている。木質が未発見であるため座棺の使用については定かでない。

人骨の出土状態を見ると、多くの骨が立って発見されている。特に墓壇西縁部に分布する膝を曲げた状態の下肢骨は、膝頭の部分が最も高く腰骨との比高は20~25cmを測る。まさに埋葬されたままの出土状態を示していると言える。本来はこの上部にあったと思われる頭骨は、下肢骨の東に落下し顔面を下に向けた状態で発見されている。上肢骨の一部が墓壇東縁で出土している。

副葬品として、東端から六文銭が出土している。4枚しか発見されていないが、いずれも北宋銭である。最も古い皇宋通宝の初鑄が1039年、新しい熙寧元宝が1068年である(第71図、図版第70)。



第25図 S X 387 集石墓

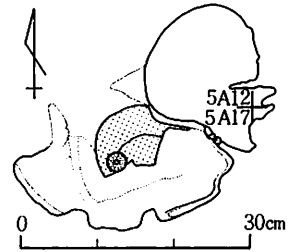
(○:六文銭)

以上の他に墓壇は不分明ながら、人骨がまとめて出土しているものは合計30体に上る。このうち六文銭が伴出したのは10体、漆椀は3体である。六文銭は、全てが6枚揃っている訳ではなく、むしろ6枚以下の場合が多い。出土人骨にも後世の攪乱や新しい墓壇の掘削等により欠損したものが多くある。以下、S X 140・324・326・332・356・399の6例について詳述する。

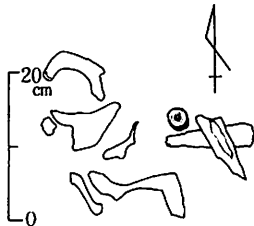
S X 140・324は、いずれも残存骨の華奢なことから

小児骨と考えられたものである。

S X 140は頭骨以外には、かすかに骨の痕跡を留めるのみである(第26図, 図版第40—上)。それでも、頭骨と歯の出土位置から判断すると、西向きの横臥屈葬であったと考えられる。六文銭と漆碗が副葬されていた。六文銭は5枚で、全て北宋銭である。最も古い天聖元宝(初鑄1023年)が3枚まとまって出土している(第59図, 図版第60)。碗には、黒漆に赤漆の斑点文様が入っていた。碗を六文銭にかぶせたような状態で出土している。



第26図 S X 140 土墳墓
(◎: 六文銭 ○: 碗)

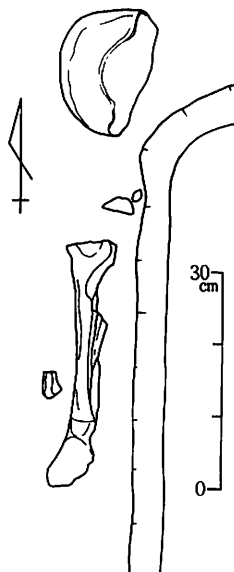


第27図 S X 324 土墳墓
(○: 六文銭)

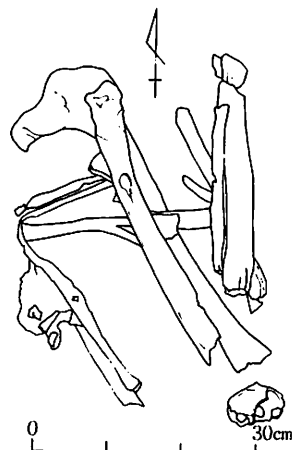
S X 324も非常に残りが悪く、20×30cm位の範囲に骨片が分布すると言う出土状態である(第27図, 図版第43—下)。副葬品として六文銭が出土している。6枚とも異なる貨幣で、最古の開元通宝(初鑄621年)から最新の永楽通宝(初鑄1408年)まで初鑄年代に787年の開きがある(第64図, 図版第70)。永楽通宝は今回の調査で発見された最も新しい貨幣で、この墓地の下限を考える一つの指標となる。

S X 326は、江戸時代の遺構であるS K 343によって、体半分が削り取られている(第28図, 図版第45—上)。他の人骨から類推すると、頭骨下半から頸椎・脊椎・骨盤・大腿骨・上肢骨が取り去られたと考えられる。少なくとも江戸時代になると、当地が墓所として意識されなくなっていることをよく示している。

S X 332は、今回の調査で出土した人骨のうち、唯一頭位を南にして発見されている例である(第29図, 図版第45—下)。しかし本例では、左右の下肢と骨盤が東西に別れて分布し、上腕も東西に開いた状態で発見されている。こうした出土状態から推察すると、頭位を南にした横臥屈葬とするよりも、むしろ本来は坐位で埋葬されたものが南に倒れ込んだ状態で発見されたと考えた方が妥当のようにも考えられる。副葬品はない。

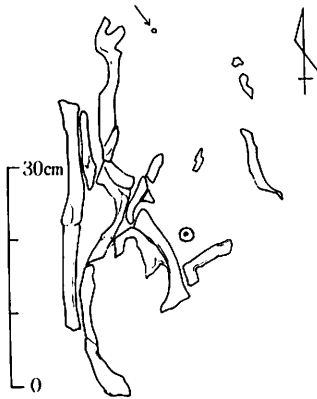


第28図 S X 326 土墳墓

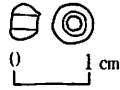


第29図 S X 332 土墳墓

S X 356は、非常に残りの悪い人骨である(第30図, 図版第46—上)。上・下肢骨の一部が残っていると考えられる。本人骨の直上



第30図 S X 356 土墳墓
(○:六文銭 ↘:ビーズ玉)



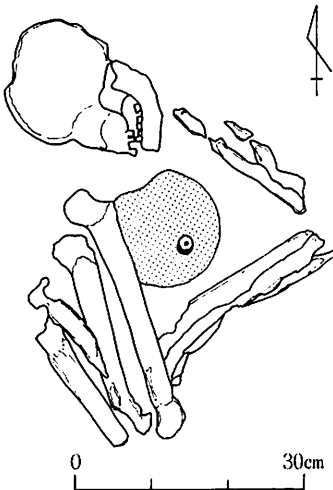
第31図 S X 356
出土ビーズ玉
実測図

には江戸時代の室が，東方に接してビルの基礎が打たれており，それらによって攪乱を受けたと思われる。ここからはビーズ玉1個と六文銭が伴出している。ビーズ玉は，径5mm・厚さ3.5mmで，中央に径1.8mm程の真直な穴が穿たれている(第31図，図版第54—4)。側面図でわかるように，穴の上端が歪んでおり十分な整形は為されていない。この歪みは，穴の周囲を取り巻くように残っており，これを積極的に評価すると，玉を作った段階にはすでに穴も穿たれてい

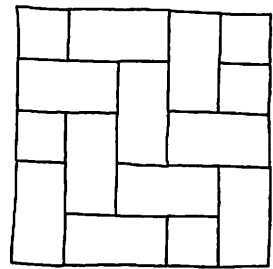
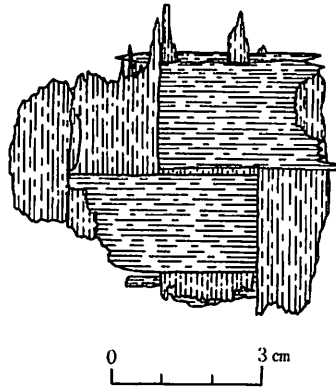
たと考えることができる。青緑色のガラス製と考えられる。六文銭は5枚出土している。最古の祥符通宝(初鑄1009年)と最新の淳熙元宝(初鑄1174年)との間には165年の開きがある。いずれも北宋銭である(第67図，図版第70)。

S X 399も，他の人骨同様，椎骨を除くと比較的よく残っている(第32図，図版第49—下)。頭位を北にした西向きの横臥屈葬である。胸と膝の間に漆碗と六文銭が副葬されている。碗には黒と赤の漆が利用されており，木質部も一部残っている。他と同様，六文銭にかぶせるような出土状況を示している。六文銭には開元通宝(初鑄621年)が3枚含まれるが，他はいずれも北宋銭である(第72図)。

六文銭の下，20cm程の範囲から竹で編んだ敷物が出土している(第33図，図版第54—1・2)。剥がす時にバリバリと音がする程に残りが良いが，六文銭から周囲に離れるに従って急速に腐朽消滅する。これは六文銭についた緑青の持つ殺菌力に由来する現象と思われる。使用



第32図 S X 399 土墳墓
(○:碗 ○:六文銭)



模式図

第33図 S X 399 土墳墓出土竹製敷物実測図・模式図

している竹材は、巾18~20mm、厚さ0.1~0.3mm位に削り込んだものである。一部には竹の表皮を留めており、最も硬い部分を利用していることがよくわかる。この竹材を1段ずつずらしながら、2段跳びで表裏に編み込んでいる。

3) 火 葬 墓

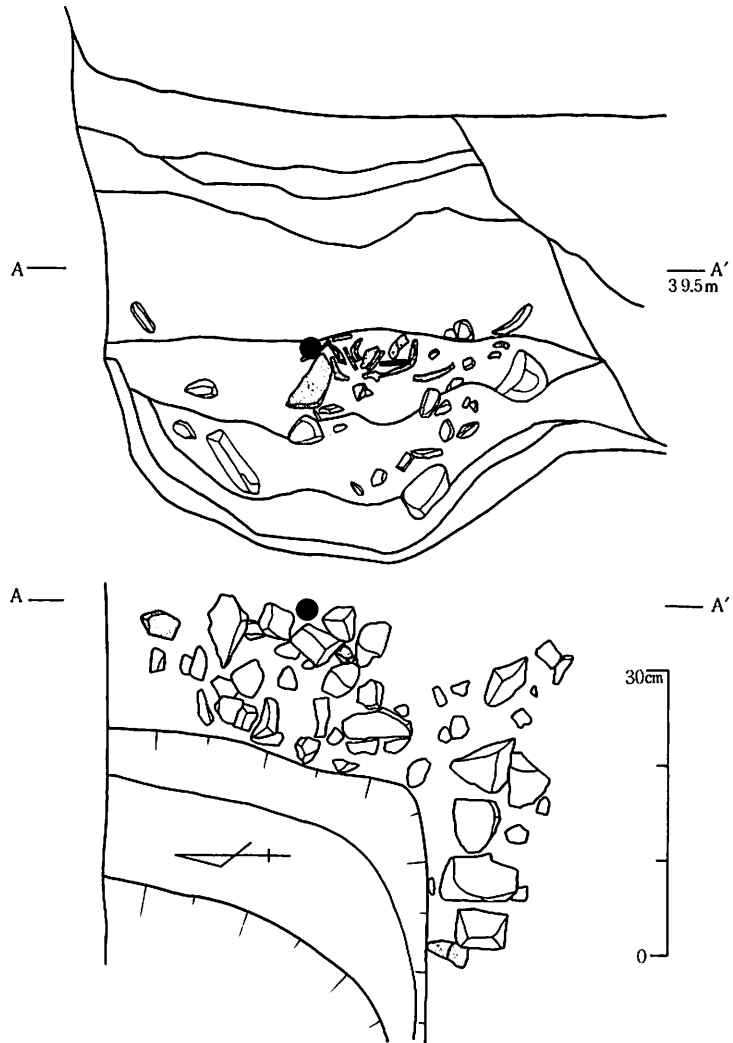
焼骨の出土が確認されたのはS X 372のみである(第34図、図版第50—上)。親指の頭位、約3×2cmの小片であるため、部位その他詳細はわからない。

墓の構造は、土葬墓とは大きく異なるようである。掘り込み面は攪乱により定かでないが、少なくとも断面図の海拔39.3mライン以深は未攪乱である。この土層断面から判断すると、掘り窪めた墓壇の底にまず粘性の強い漆黒色の土を敷く。次いで、径2~5cmの小礫を多く含む砂質土を詰め、径10cm以上の礫を集石状に重ねる。その上に接して、羽釜を蔵骨器として利用し、焼骨を安置したようである。羽釜を含む埋土も、砂をかなり含んでいる。

羽釜と人骨の関係については、ここでも確実に焼骨が羽釜に埋納された状態で出土した訳ではない。しかし、破損した羽釜に接して焼骨が出土している点と、京都周辺の墓と思われる羽釜の出土状態を勘案すると、本来は焼骨は羽釜に納められていたと考えて大過ないように思われる。

4) 再堆積の人骨

度々述べたように、本遺跡に限らず京域は



第34図 S X 372 火葬墓 (○:土器 ●:焼骨)

継続的な人間の居住のために、後世の攪乱行為の非常に激しい所である。重複して墓を営む場合はもとより、当地が墓所としての機能を失った後には、より攪乱の機会が多くなる。江戸時代にはかつての墓地は完全に忘れられ、全く無頓着に芥溜・井戸を穿ち、室を建築している。

これらのために遊離した人骨が、38ヶ所から発見されている。S K 349は芥溜であるが、ここからは流れ込んだ人骨が、10点以上出土している。またS D 45の溝やS E 374の井戸表層からは、頭骨が単独で発見されている(図版第50—下)。この他、ほとんどのものが骨格のわずかな部分のみで構成されている。そのような中であっても、S X 81・313・320・336の4体からは副葬品と思われる六文銭が出土している。S X 81は、径30cm位の範囲に団塊状に骨が集積して検出された。S X 313は近世の敷石の間に挟まれて出土しており、上肢骨の一部のみである。S X 320・336はいずれも近世の芥溜に大部分が切り取られており、残りがあまりに不完全であるために原位置を保つか否かの判定が難しいものである。副葬品の出土という点では、人骨が原位置を保つと考えた方が妥当のようであるが、あまりに人骨の出土部位が限定されるために、ここでは攪乱されたものとして取り扱った。ほぼ全身骨格を残す墓に比べ、再堆積とした人骨の分布が広がることから、これを攪乱とすることが首肯される。再堆積とした人骨の多くが前項までに述べた墓と分布域が重なってはいるが、一部は確実に南方に広がっているのである。

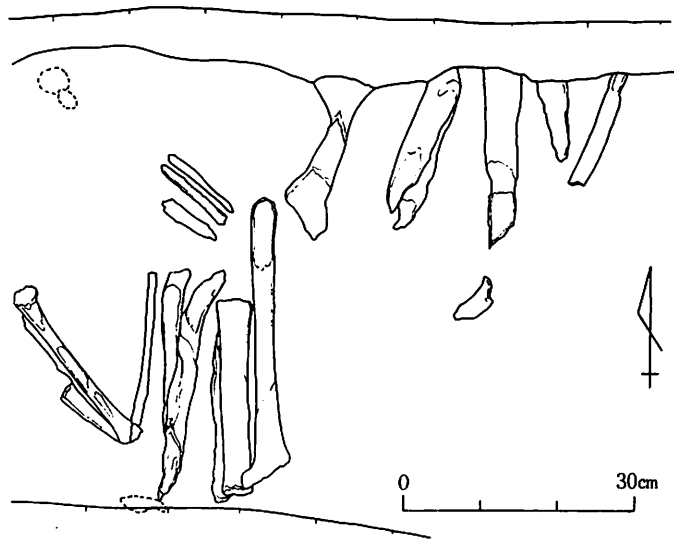
5) 墓 域

今回の発掘調査範囲から、最終的には合計98単位の人骨・集石が出土した。既に述べたように、人骨にはほぼ全身骨格を留めるものから、断片が発見されたに止まるものまでである。また、集石の様に直接的に埋葬との関係を問うことが難しい材料についても、出土状況から墓の一形態と判断した。次に、これらの分布範囲と関連遺構の検討から、墓所の範囲を考えてみたい。

集石はA区に13基と多く、C区からは4基発見されたのみである。礫の密集するS X 14・15・19・20は、A区北半にまとまって分布する。礫の密集度が低いS X 13・16・21・22・35・49・174・322・389も、A区からC区の北半に分布する。A区では、集石の有無という点から見れば、調査区中央部を東西に走るS D 45を南限にしている。概してS D 45に近い集石は密集度が低い。東・西・北方へは調査区の壁に近づくと、集石は分布しなくなる。C区ではA区より若干北寄りに分布するが、数が少ないために一定の傾向は見出せない。A区で南方に隔れて分布するS X 118と、C区の南半に分布するS X 337・338が、他の集石と異質な属性を備えている点は前述した通りである。結果として、S X 118は集石・人骨とも再堆積したもの、S X 337・338は成因はわからないが墓としての集石とは分離して考えたい。

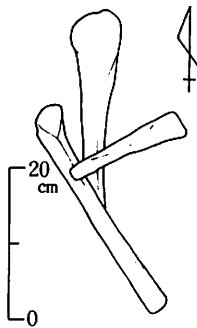
土墳墓の分布も集石と似るが、やや北に片寄るようである。最も南に位置するのがS X 54で、6 B - 6・7グリッドにかけて分布する。集石の分布の南限を画するかに見えたS D 45から、2 m余り北に寄っている。全体としては、グリッドA・B列境から南に2 m程寄ったラインから北と見ることが出来る。東はやはりS X 54が限界となっている。北は調査区北壁の中にまで

人骨が入っており、さらに墓域は拡がると思われる。西方はC区に続くが、A・C区境で分布が大幅に減少する。これは近世の芥溜であるS K 327・343に大きく削り取られているためである。この攪乱にもかかわらず、巾50~100cm程に残された土手上からS X 320や372が検出されているということは、逆にそれだけ多くの人骨がかつては埋もれていたことを示唆すると



第36図 S X 386・370 出土人骨

考えられる。C区でも調査区北壁に滅込んで発見された人骨が数体(第36図)あり、墓域の北方への拡がりを彷彿とさせる。西方への広がりには、3 A 17・22区を限界とする。しかし、3 A 16・21区以西は、近世以降の攪乱が広く入っており、土墳墓の欠除がどの程度墓域の広がりに対応するか判断が難しい。南方へは、グリッドA・B列の境界がほぼ分布の限界となっている。南限がA区に比べ2 m程北に寄っている。



第37図 S X 344
二次堆積の人骨

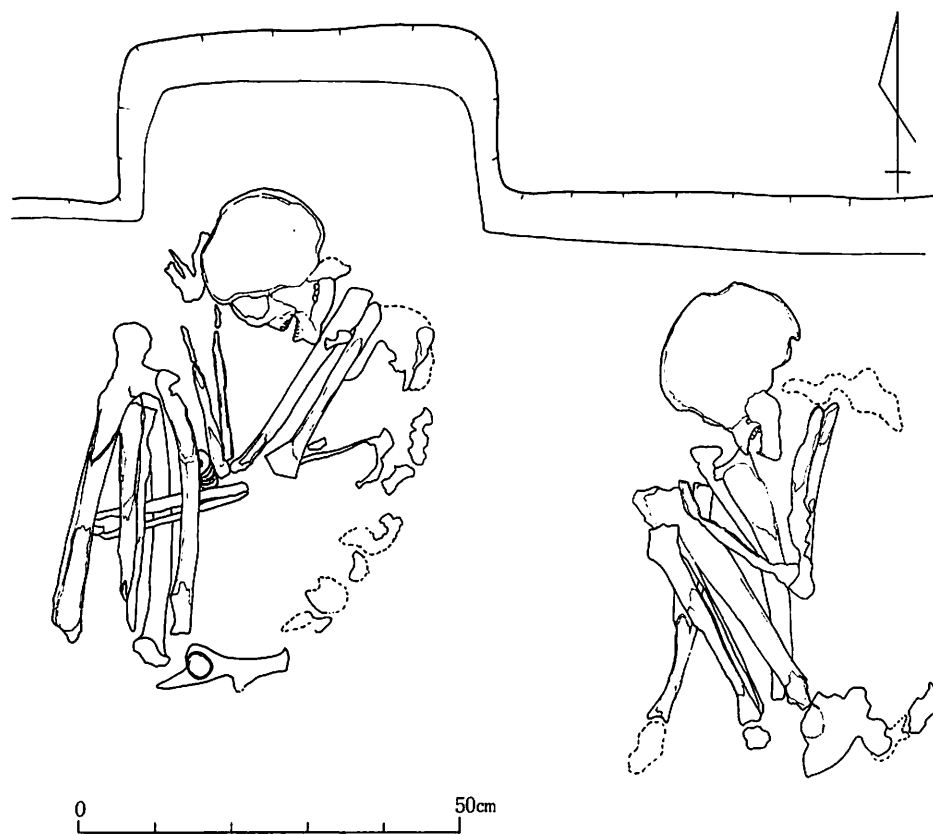
再堆積と考えた人骨は、土墳墓に比べ分布範囲が格段に広がる。多くの例で土墳墓と分布域が重なるが、遠く遊離するものが数例ある。A区ではS D 45の頭骨とS X 118の人骨片がそれである。S X 118は、土墳墓分布域の南縁からさらに12m以上南に離れている。C区では、S X 300・334(第37図)・348等が土墳墓群と遠く離れており、5~10m余りを測る。またS K 349中から発見された10点以上の骨は、土俵中への流れ込みを示す好例である。

以上、墓の形態別分布と人骨の分布域を個別に見て来た。これらを総合するに当たって、特に問題となるのは、A区における集石墓と土墳墓の分布のずれであろう。両者の整合しない所に分布する集石が、他に比べ礫の密集度が低い点も留意される。しかしずれにしても、確かな集石墓か単なる礫の集中かの決定的要素には欠けている。そこで、より厳密に墓域を推定しようとする立場から、ここでは土墳墓の分布域外に出るS X 35・49集石を除いて考えてみたい。

すると墓域の東縁は6 A 22, 6 B 2・7グリッドになる。このすぐ東側には調査区の北東壁が迫っているが、S X 54人骨と壁の間約3mに攪乱は少ない。もしその間にも他と同じ密度で埋葬が行なわれたとすれば、何等かの手かかりが残されているはずである。西縁は、前述した

如く不確定要素を含みながらも、3 A 17・22グリッドと考えると大過ないであろう。南縁は6 B 7と3 A 22グリッドを結んだ線とほぼ符合すると思われる。北方へは調査区外に延びていることが確実である。以上から、当地がかつて東西30m余りの幅を持った墓地であったことが推定されるのである。

この墓地が何等かの構築物で周囲から隔絶した状態にあったのかどうかはわからない。しかし少なくとも、ここを墓地として利用しようとする人々にとっては、墓域はかなり限定されたものとして意識されていたようである。これは何組かの重複したり非常に近接して出土した人骨(第38図、図版第44下、47下)の、一つの解釈である。もちろん、ここがおそらく100年以上にわたって墓地として利用されていたであろう事や、大多数が副葬品をほとんど持たない庶民の墓と考えられる事とも関連する可能性がある。



第38図 S X 315(西)・325(東) 土壇墓 (○:六文銭)

6) 埋葬形態

墓の形態については、構造的特徴に従って集石墓・土壇墓・火葬墓に分類記載したので、ここでは遺体の処し方、副葬品についてのまとめをしておく。

埋葬姿勢は、圧倒的多数が頭位を北にし、体を西に向けた横臥屈葬である。これらの人骨では、ほとんどが両腕で膝を抱える様になっている。確実にこの枠から外れるのは、S X 332と87の2例のみである。S X 332は、通常と異なり坐位で埋葬された可能性が高い。S X 387は素掘りの穴に座った状態で埋葬されている。座棺を利用した埋葬から棺を取り去った状態を想像すれば良い。

埋葬に当たっての器とでも言うべき棺は、全く見つかっていない。墓域全体からは、10本に余る釘の出土が認められるが、いずれも墓壇、人骨と密接な係わりを持った状態で発見されていない。このため、現段階では棺の使用については否定的である。

棺に代わる可能性のあるものとして、S X 183・399の二ヶ所から竹で編んだ敷物が出土している。S X 183で600cm²、S X 399で20cm²程と非常に限られた検出状態であるため多くはわからないが、いずれの場合も少なくとも人骨の下から出土したと判断される。類例は鳥羽離宮跡にあり3例発見されている。鳥羽離宮跡の例では、竹製編物の残りは良いが、逆に人骨はほとんど発見されていない。それによると、竹製編物は一部折り重なって発見されており、何かを包み込む様に埋められていた可能性が高い。従って敷物と考えるよりも、むしろ一種の籠の可能性を考えた方が妥当である。この類推が当を得たものであるとすれば、本遺跡での人骨の出土状態との検討から、一部では棺の様に竹籠で亡骸を包んで埋葬したことも考えられよう。

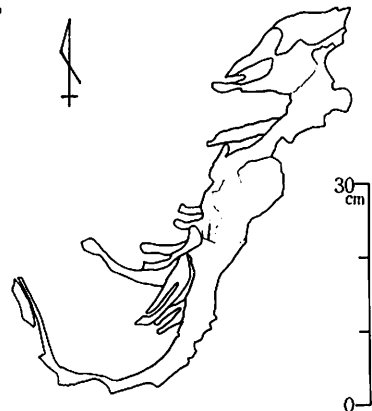
副葬品では六文銭と漆椀が一般的である。六文銭は19ヶ所、漆椀は8ヶ所から出土している。S X 140の六文銭には、一部に布の痕跡が残っており、布袋に入れられて埋納された可能性がある。六文銭・漆椀の両者が共伴するのは4ヶ所である。共伴例のうち、S X 140・311・399の3ヶ所では、六文銭の上に漆椀を被せた状態で出土している。埋葬位置は、共伴例・六文銭・漆椀を問わず、胸と膝の間がほとんどを占める。六文銭には、時として首や頭骨のそばに位置するものがある。遊離したものを除けば、六文銭は例外なく複数枚が重なって出土しており、S X 140の様に袋に入れるか穴に紐を通して納められたと考えられる。また、頭骨や首のそばから、出土する例については、紐で首に掛けていた可能性も考えられよう。

これらの他には珠数玉とビーズ玉が各1点出土している。

7) その他・犬

A区5B3・4グリッドから、犬の骨が一体発見されている(第35図、図版第52一下)。頭を北にして、脊椎骨は北東―南西の方向に延びている。体は西を向けている。S K 188土壇の東壁に貼り付いたように、壁の傾斜に添って東を高く西を低くして出土している。

S K 188は13世紀のもので、この上層には後世の墓域が広がっているが、人間のための墓所に犬を埋葬する可能性は乏しかろう。またS K 188の覆土にも、犬を埋め



第35図 S X 188 犬の骨

96	頭蓋骨，寛骨，四肢長骨	男	壯	年	散乱	北	六文錢	○	
97	椎骨，肋骨，右上腕骨，尺骨，左右寛骨	女	成	人	左下側臥屈位	北	六文錢・腕	○	
131	全身骨格	男	若	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
138	ほぼ全身骨格	男	壯	年	右下側臥屈位	北	六文錢・腕	○	布片出土
139	頭蓋の大部分と下肢長骨なし	男	壯	年	坐位	南	六文錢・腕	○	珠敷玉・竹製随物出土
140	頭蓋，脊椎，肋骨，大腿骨，脛骨	男	1~2才	才	右下側臥屈位	東	六文錢	○	
183	ほぼ全身骨格	男	壯	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
311	頭蓋・脛骨を除く全身骨格	男	成	人	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
312	ほぼ全身骨格	男?	老	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
314	左右下肢骨	女?	成	人	右下側臥屈位	北?	六文錢	○	
315	全身骨格	女	熟	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
318	脳頭蓋，左上腕骨，左右下肢骨	女?	成	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	赤漆出土，腕か?
319	頭蓋，四肢長骨	女?	熟	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
321	頭蓋，四肢長骨	男?	熟	年	右下側臥屈位?	北	六文錢	○	
324	上腕骨破片	男?	熟	年	右下側臥屈位?	北	六文錢	○	
325	脛骨を除くほぼ全身骨格	女	壯	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
326	脳頭蓋右半分，胸椎，右下脛骨	女?	熟	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
332	頭蓋，左上肢骨，左右下肢骨	男?	壯	年	坐位?	北	六文錢	○	
350	肋骨，寛骨，四肢長骨	男?	成	人	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
351	頭蓋，右上肢骨，左右下肢骨	女?	壯	年	右下側臥屈位?	北	六文錢	○	
356	脊椎，右上肢長骨，左下肢長骨	女?	小	児	仰臥屈位	北	六文錢	○	
359	ほぼ全身骨格	男?	成	人	右下側臥屈位?	北?	六文錢	○	ビーズ玉出土
360	頭蓋，上腕骨，下肢骨	男?	成	人	右下側臥屈位?	北?	六文錢	○	
362	下肢骨	男	成	人	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
369	頭蓋，胸椎，肋骨，肩甲骨，左右上肢骨	男	壯	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
370	左上肢長骨，左腕骨，左右下肢長骨	女	成	人	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
376	ほぼ全身骨格	男?	熟	年	右下側臥屈位	北	六文錢	○	
384	頭蓋，肋骨，四肢長骨	男?	壯	年	仰臥屈位	北東	六文錢	○	
386	左右下肢骨	男	成	人	仰臥屈位	北	六文錢	○	
387	ほぼ全身骨格	男	熟	年	坐位	西	六文錢	○	
390	全身骨格	男	壯	年	右下側臥屈位	西	六文錢	○	

土

墳

墓

埋葬様式	No	人			骨			埋			備考
		残存部位	性	年齢 ²⁾	姿勢	頭位	副葬品	墓域 ³⁾			
土壙墓	399	ほぼ全身骨格	女?	年	右下側臥屈位	北	六文銭・腕		竹製歌物出土		
	400	頭蓋, 四肢長骨	男?	年	右下側臥屈位	北					
火葬墓	S X 372	骨片									
再堆積の人骨	S D 45	頭蓋骨破片と齒 4 本	男	成人			六文銭				
	S X 81	頭蓋骨, 胸椎, 肋骨, 左上腕骨	男	成人							
	87	大腿骨破片		成人							
	89	頭蓋骨破片		幼年							
	93			幼年							
	95	頭蓋骨, 齒, 長骨		幼年							
	132	大腿骨破片		成人							
	185										
	190	肋骨, 鎖骨, 左上腕骨, 左脛骨			散乱						
	191										
	197										
	300	頭蓋片, 左大腿骨	女?	成人							
	301	上腕骨, 左右大腿骨		成人							
	302	骨粉									
	303										
	310										
	313	上肢長骨破片		成人			六文銭	右を下			
316	右側頭骨, 上顎骨, 下顎骨	男?	成人								
317											
320											
323	上腕骨, 下肢長骨		成人			六文銭	右を下				
333	頭蓋右半分		成人								
334	大腿骨		成人								
335	右頭頂骨破片		成人								
336	左上腕骨, 右大腿骨破片		成人			六文銭	右を下				

34 第3節 その他の遺構・遺物

るための特別の掘り込みは検出されていない。さらに人骨群に較べ犬は一段深い位置から発見されている。これら発見された時の骨の位置や、周囲の状況を勘案すると、この犬は土壌に落ちて死んだか、屍を土壌に捨てられたか、いずれにしても人為的に埋葬されたものではないと判断される。

註

1) 分析は、上田健夫氏(花園大学教授)に依頼し、京都大学工学部資源工学教室のNorelco X-ray diffractometer を利用させていただいた。

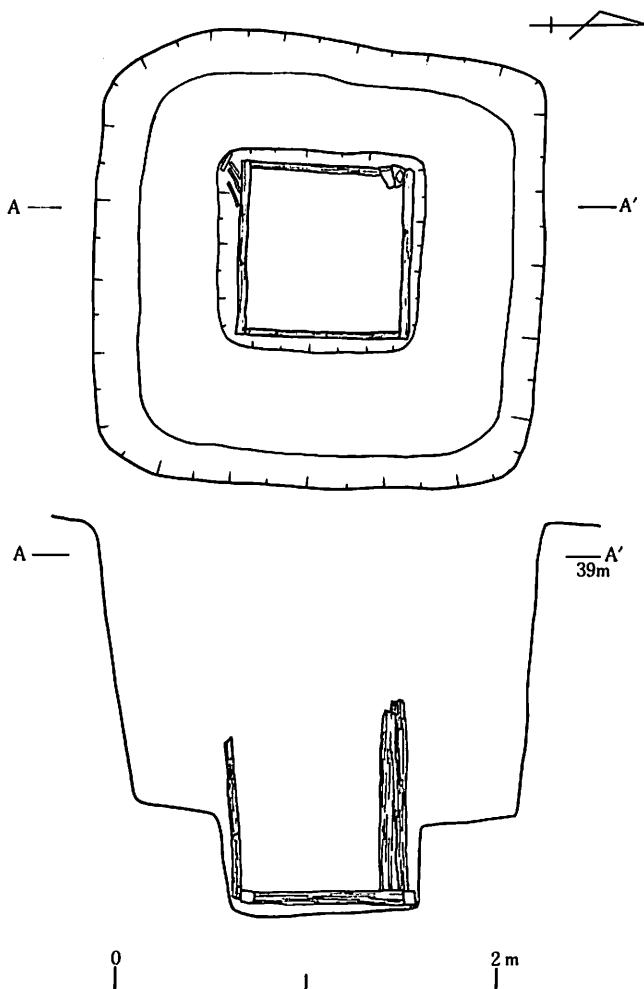
第3節 その他の遺構・遺物

1) 井戸

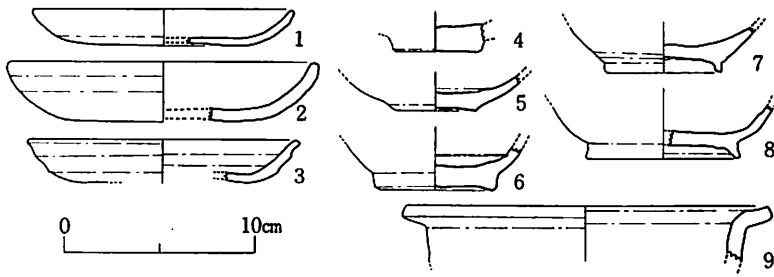
S E 196(第39図, 図版第7一上) A区の北部で検出された。掘り方は隅丸の方形で、検出した面での規模は南北2.4m, 東西2.3mであった。木材を用いているか、残存状況は極めて悪く、栈木はわずかに最下段を残すのみであった。横栈木の長さは周辺とも90cmで幅6cm, 厚さ4~5cm程度であった。縦板は東北と東南の隅の部分に残存していただけで、最も長く残っていたもので1.1mであった。

出土遺物には土師皿, 青磁, 土鍋等があり土師器の形態からこの井戸の埋没年代を12世紀代に求めることが出来る(第40図)。

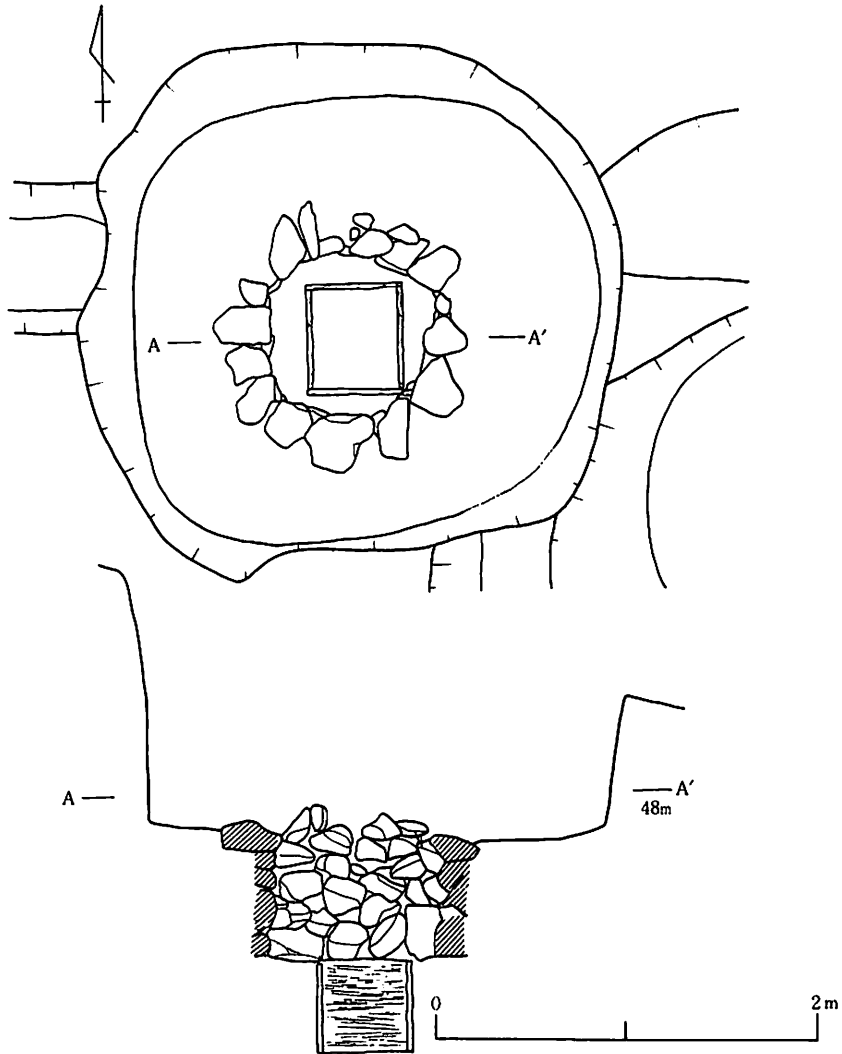
S E 374(第41図, 図版第27) C区の東側で検出された。掘り方はほぼ円形を



第39図 S E 196 井戸



第40図 S E 196 出土遺物実測図

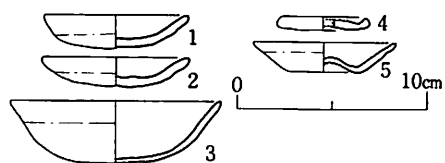


第41図 S E 374 井戸

呈し直径約2.7mであった。掘り方の検出面からほぼ1.5m下方からは、井筒の石組が残存していた。石組に用いた石材は20～25cm角ほどの比較的大きな石が多く、これをほぼ円形に数段野積みした状況が確認されている。井戸の最下部は、1枚板を4枚、横位に四方に廻らせたもので、

深さは約50cmであった。この板の組み合わせには、特別な加工は施されていない。

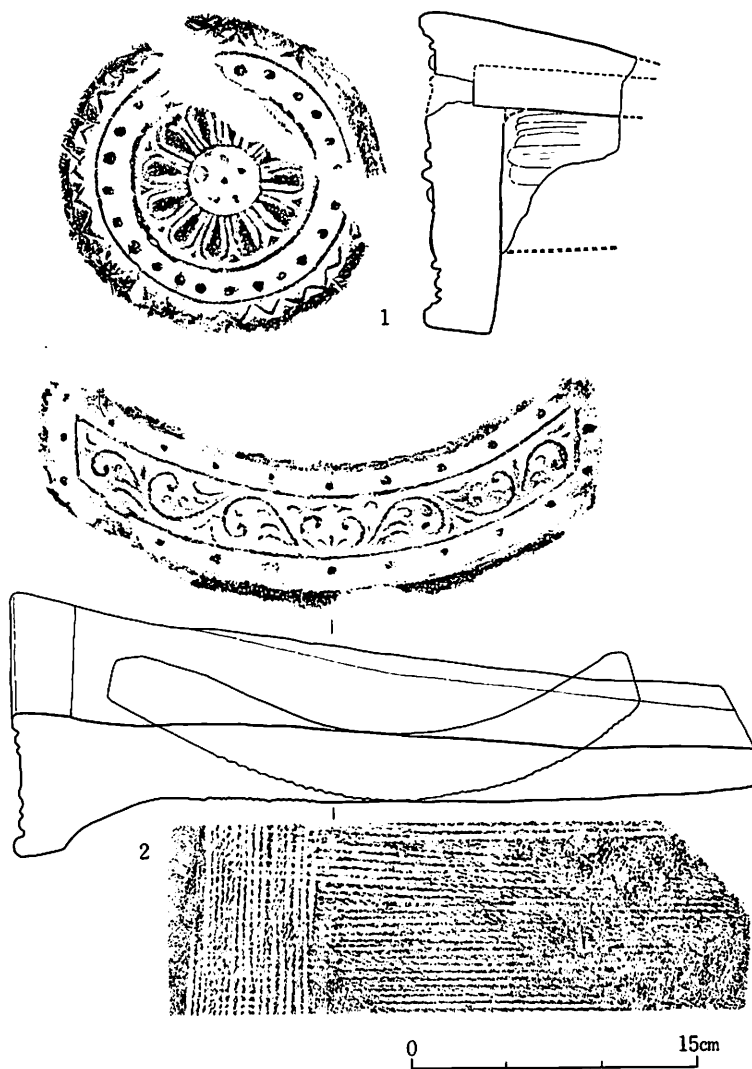
出土した遺物は極めて少ないが、白色系の土師皿、ヘソ皿、小皿、コースター型の皿などがあり、14世紀中葉～後半の年代を考えることが出来る(第42図)。



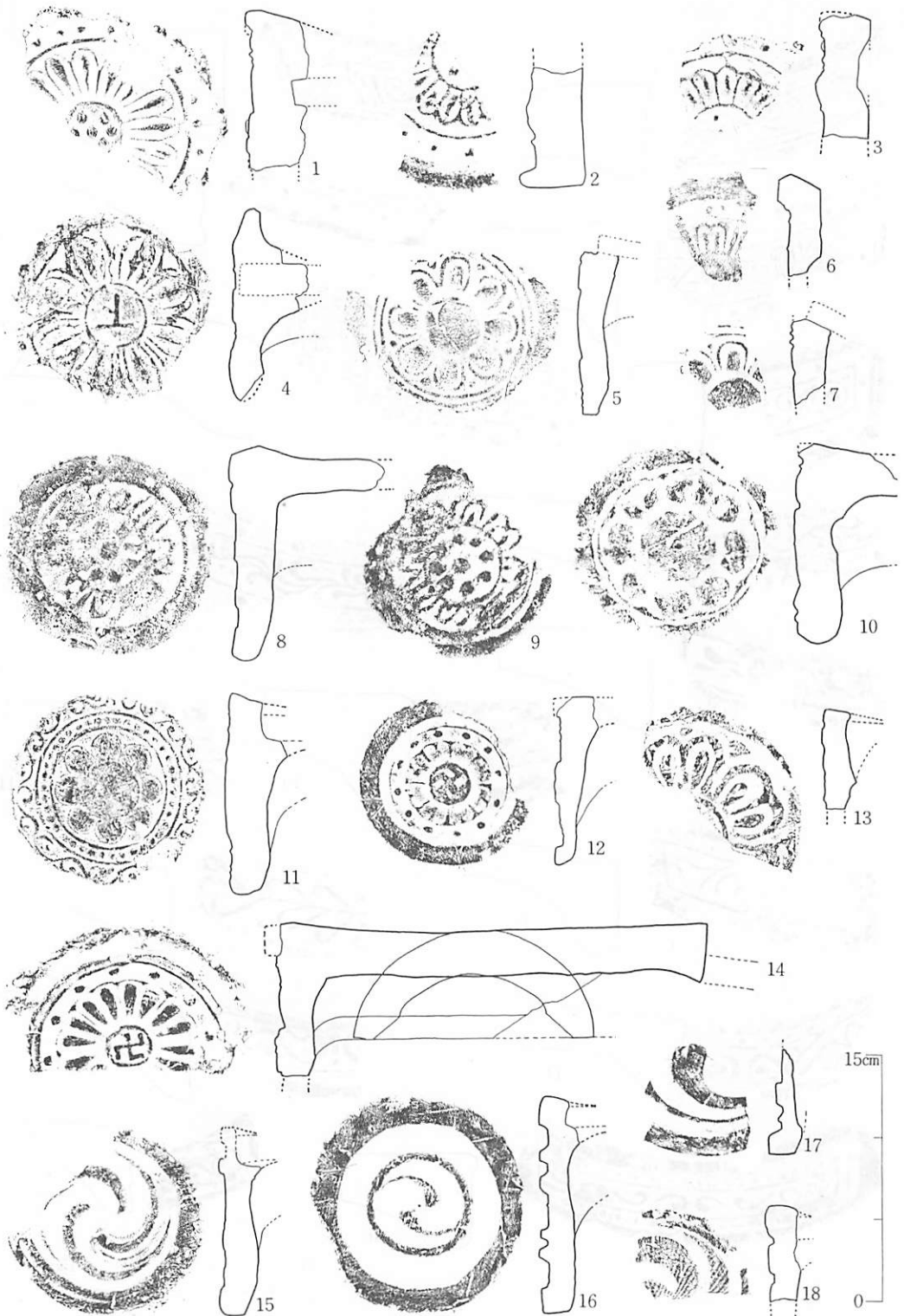
第42図 S E 374 出土遺物実測図

2) 瓦 類

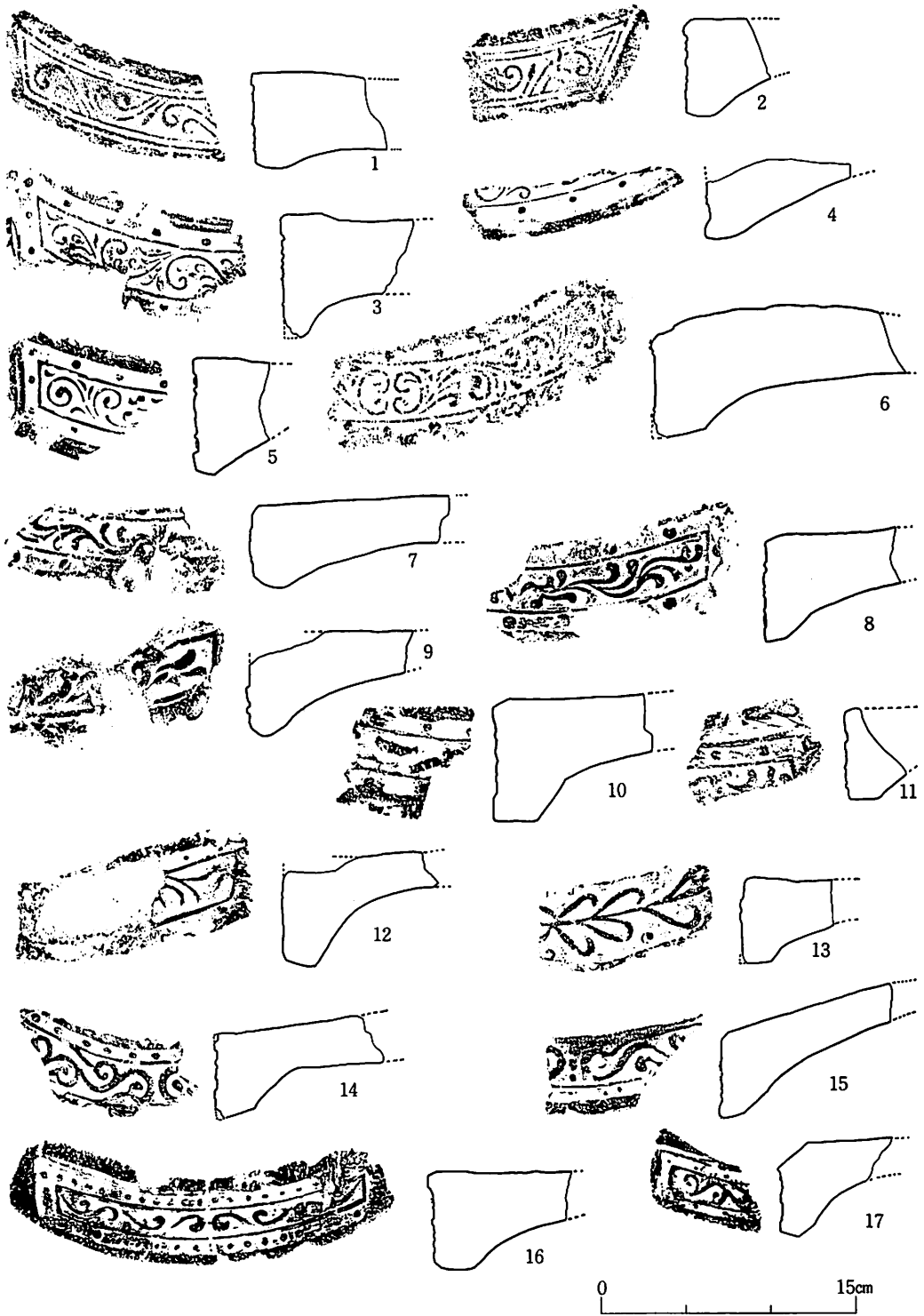
S K 85からは奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦のセットが、他の若干の平瓦片と共に出土した(第



第43図 S K 85 出土軒丸瓦実測図・拓影

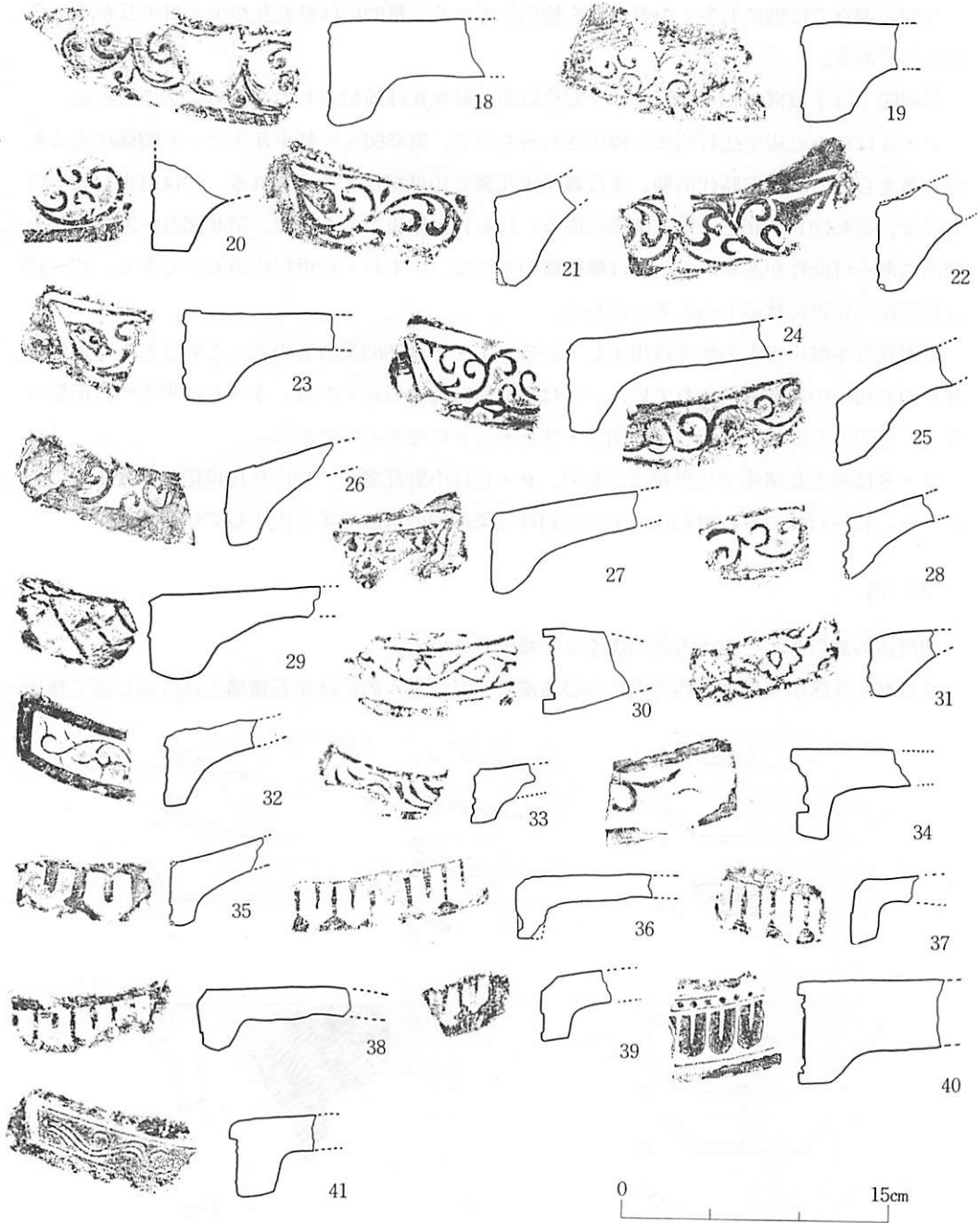


第44図 出土軒丸瓦実測図・拓影



第45図 出土軒平瓦実測図・拓影(1)

43図，図版第65一下)。この土塼は直径50cmほどの円形を呈し，埋めていた土もきわめて緻密なものであった。軒平瓦が水平に，そのすぐ横に軒丸瓦が瓦当面を下向きに垂直に埋まっており，あるいは礎盤的な性格をもつものかとも考えられる。軒丸瓦は外縁に線鋸歯文を配する単弁蓮花文で，同范瓦が奈良県の法華寺阿弥陀浄土院(天平宝宮三年，光明皇后発願)所用瓦を



第46図 出土軒平瓦実測図・拓影(2)

焼いたと考えられる京都府音如ヶ谷瓦窯で発見されている。軒平瓦は東大寺式のもので、檜前寺、法隆寺で出土している(軒丸瓦・平城宮6138B型式, 軒平瓦・平城宮6732型式)。

他にも、瓦を含み、同様に緻密な埋土を持つ土壌をいくつか検出しているが、必ずしも柱列状に並ぶものでなく、性格は推定できなかった。

今回の調査では他にも多くの軒瓦類を検出している。量的には軒丸瓦が少く軒平瓦がやや多いようである。

第44図1は平城宮6113系の瓦で、平安京以前の軒丸瓦は前記のものを含めて2点になる。

2・3はこの近辺で比較的多く検出されるもので、第45図5の軒平瓦とセット関係にあるものと考えられる。平安時代前期。4は森ヶ東瓦窯で10世紀代と考えられる。10は11世紀後半のもので、第45図14~16とセット関係にある。11も11世紀後半のもので、第46図21~23とセット関係にある可能性がある。5~7は幡枝産のもので、いずれも12世紀代のものである。13~18は12世紀~13世紀代のものと考えられる。

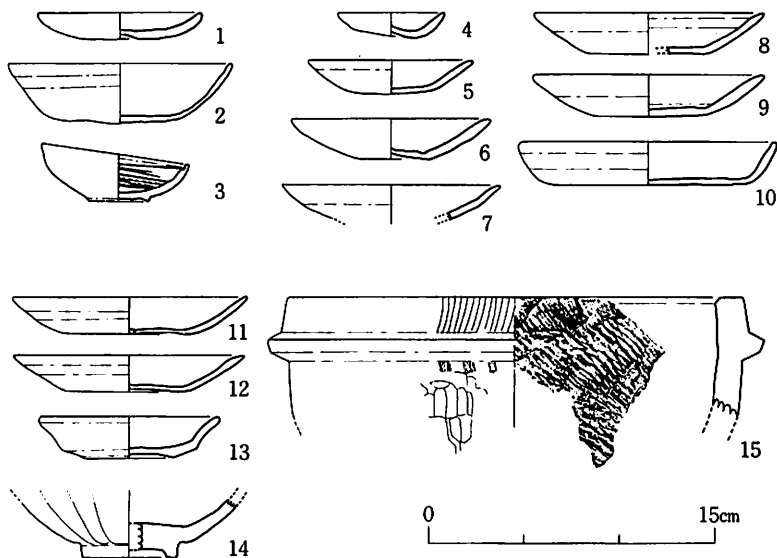
軒平瓦は平城京のものが3点出土している。1・2は6663系のもので、このうち1は近世の井戸の石組の中に組み込まれていた。3は平城宮6732系の瓦である。4~6は平安時代前期の瓦で、このうち5は軒丸瓦の第44図2・3とセットになるものである。

7・8は河上瓦窯産で10世紀代のもの、9・10は小野瓦窯系でやはり10世紀代に入るものであろう。13~17は11~12世紀代のもので14は三条西殿の溝跡で多く出土している。

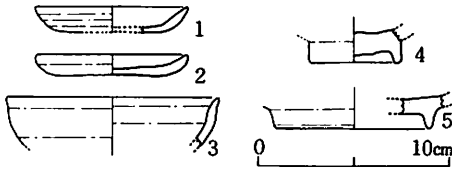
3) 溝

門周辺の溝以外に、東西方向の溝を2本検出している。

S D 46 A区中央部に東西方向にのびる溝で、レベル的には集石遺構とほぼ同じ面で検出



第48図 S D 45 出土遺物実測図



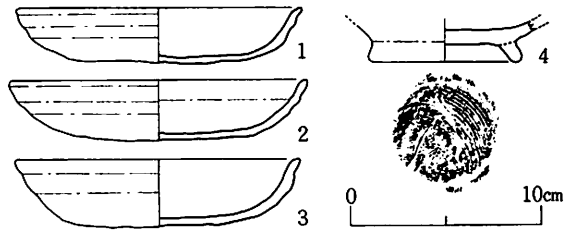
第47図 S D 395 出土遺物実測図

している(付図1・2, 第48図, 図版第30一下)。検出面での幅は1mほどであった。掘り方は比較的シャープで壁の立ち上りは急であるが壁の一部は倒壊していた。この溝は2度にわたって掘られたらしく、中央部で若干のくい違いを見せていた。この溝はC区東側まで続き全長約20mほどが確認された。門周辺の溝との切合関係は、丁度交点に相当する部分に近世の井戸が掘り込まれていたため不明である。遺物から見て16世紀代に用いられた溝と考えられる。

S D 382・395 やはり東西にのびる溝で、検出面での幅が90cm～1mである。S D 382から395にかけては段が付き、395がやや深くなっている。この溝の埋土の上に墓墳が作られており墓墳が形成される以前の溝であったことがわかる(付図4, 図版第23一下, 第47図)。出土した遺物は少量であるが鎌倉期のものと考えられる。

4) 土 墳

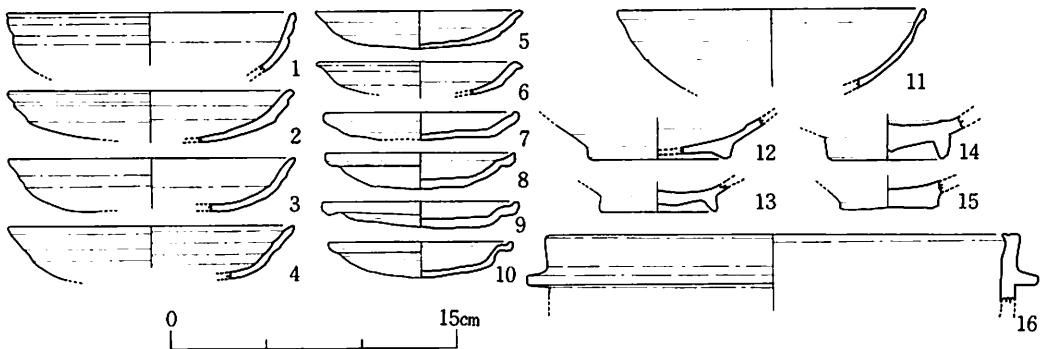
S K 396 S D 382の溝の肩部分に僅かに残った土墳である(第49図, 図版第26一上)。平安時代後期の土師皿が整然とならべたように検出されている。



第49図 S K 396 出土遺物実測図

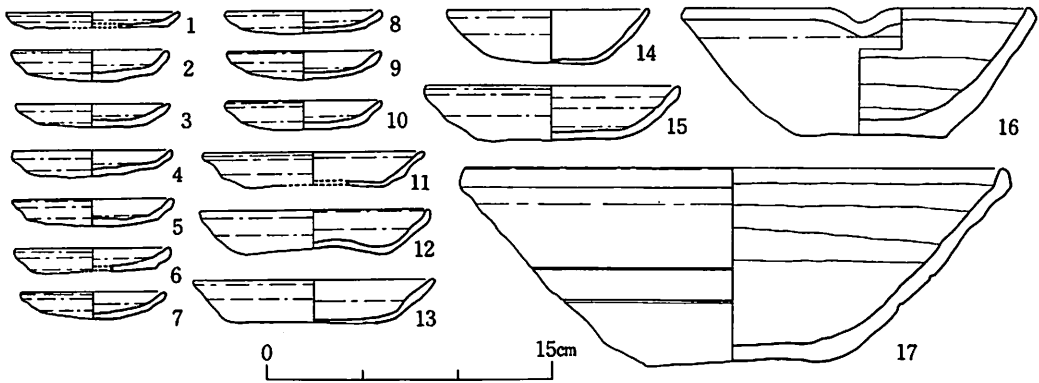
S X 79 A区S D 46の北側に発見された土墳である。平面形は両端のやや尖る楕円形で、大量の土師皿と共に、羽釜・中国陶磁などが検出されている(第50図, 図版第15一上)。いわゆる「て」字状口縁を持つ皿も多く11世紀代の土墳と考えられる。

S X 70 A区中央南寄りで発見された隅丸方形の土墳である。東西約1.5m, 南北約70cmであった。13世紀後半の土師器皿と共に、東播系の播鉢が、大小セットで発見された(第51図, 図版



第50図 S K 79 出土遺物実測図

第16)。



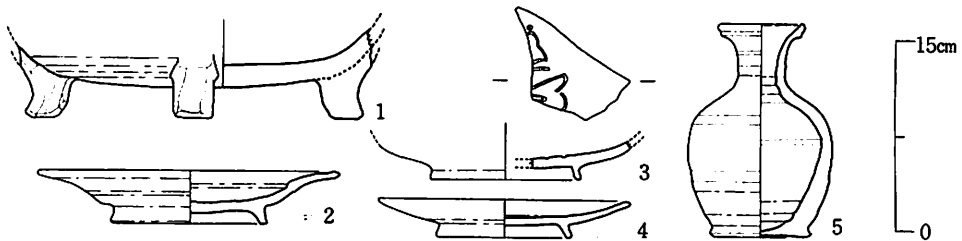
第51図 S K 70 出土遺物実測図

5) その他の遺物

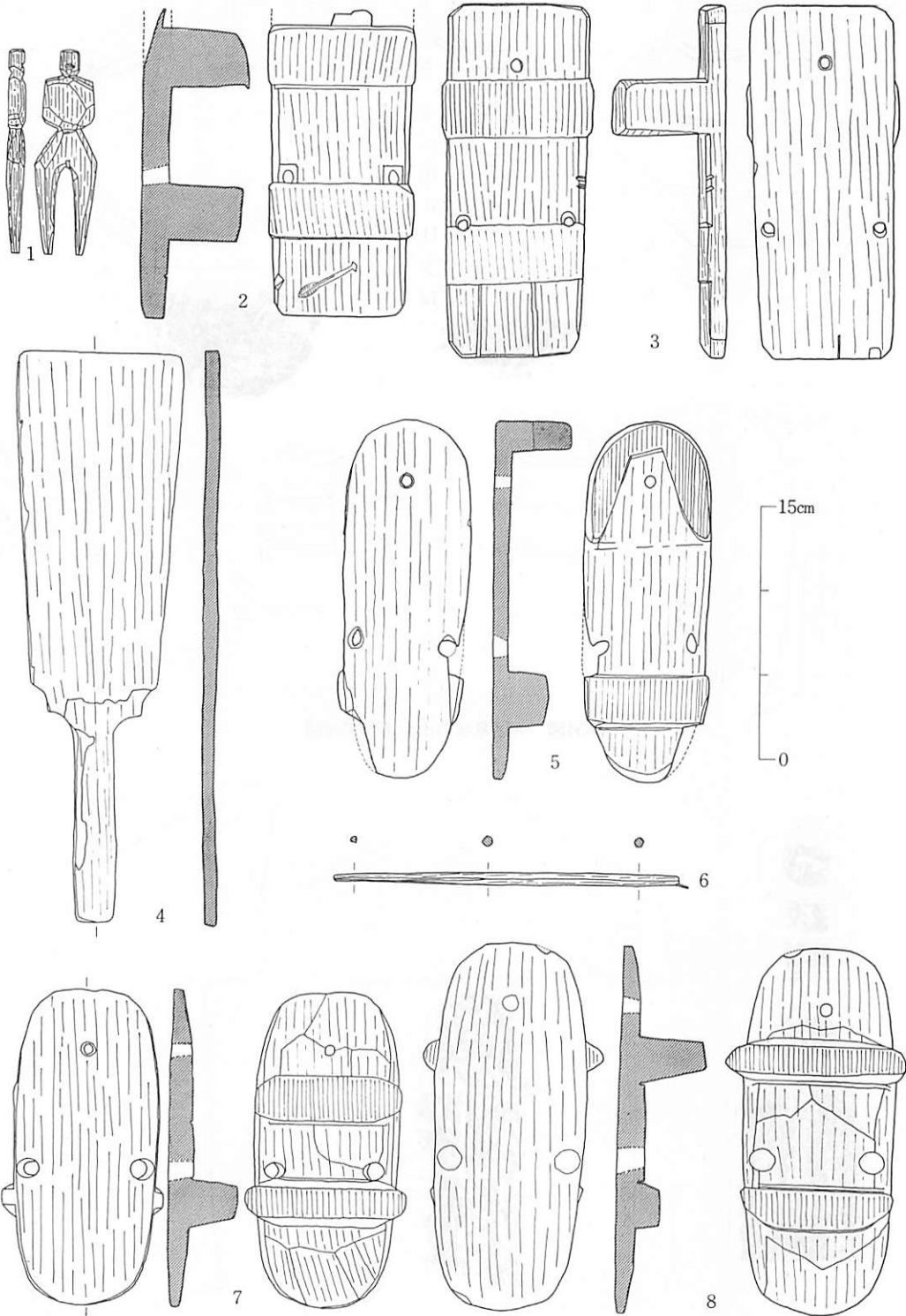
S K 327・S E 374出土の木製品 S E 374からは第42図に示した土器以外に何点かの木製品が出土している(第52図6～8)。またS K 327からは桃山期の陶器類と共に多数の木製品が出土した(第52図1～5)。下駄が多いが、人形や羽子板も出土しているのが注目される。

人形は長さ12.2cm, 最大幅3.5cm, 厚さ1cmで、顔の部分には口を削り込んで表現している。両手は作られていないようである。羽子板は現在用いられているものとはほぼ同形で全長は約33cm, 最大幅約10cm, 厚さ約1cmであった。

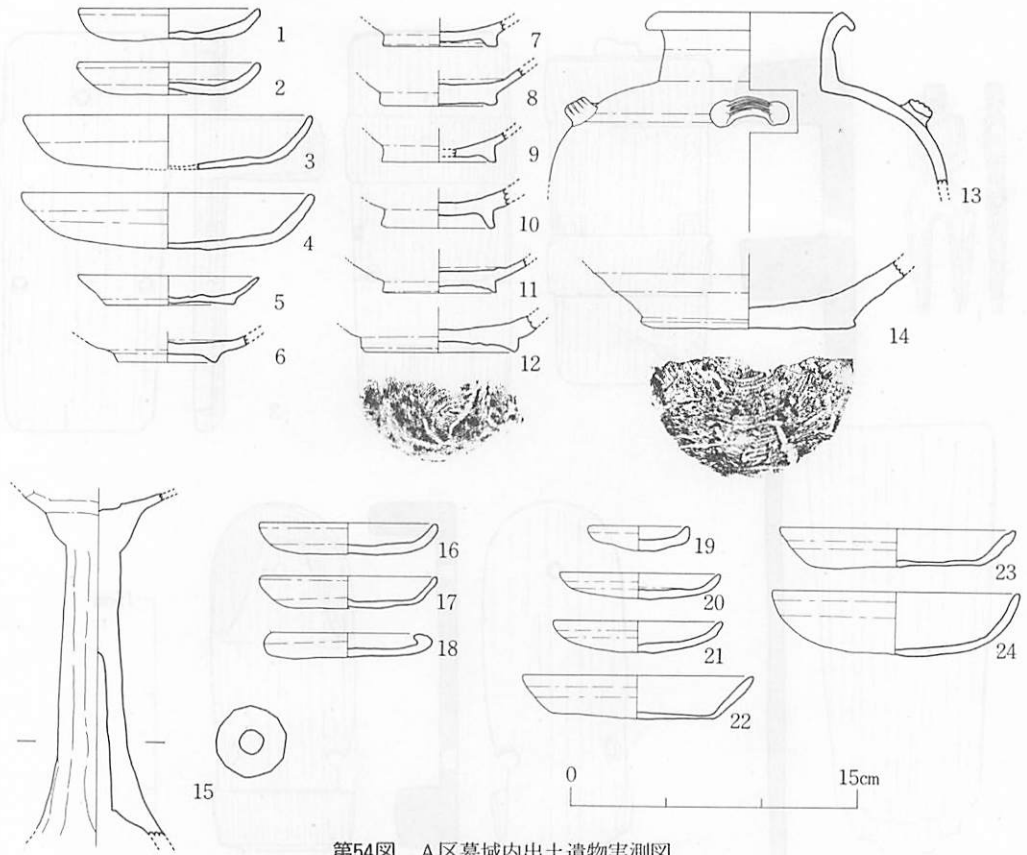
その他の主要な遺物としては緑釉の四足盤(第53図1)や、白磁の四耳壺(第54図13)などが出土している。



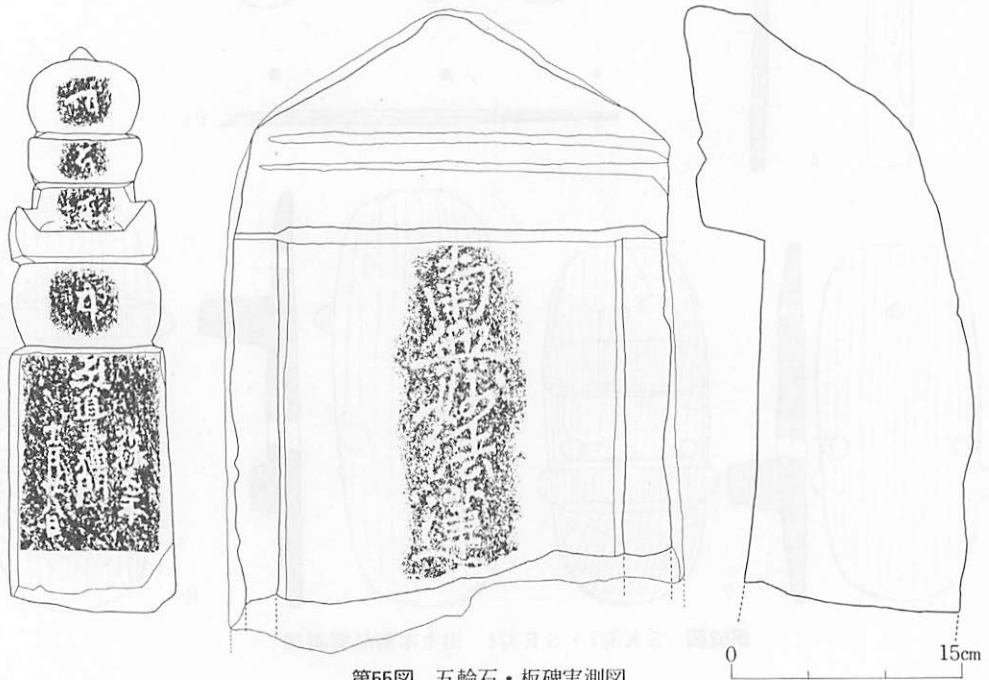
第53図 その他の平安時代の遺物実測図



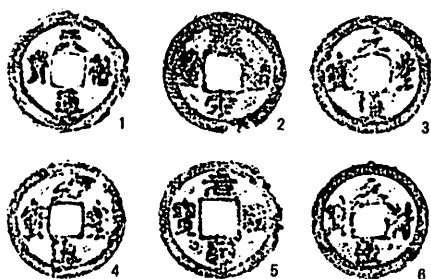
第52図 S K 327・S E 374 出土木製品実測図



第54図 A区墓域内出土遺物実測図

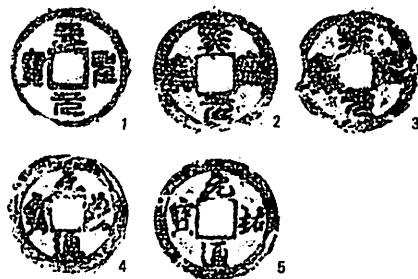


第55図 五輪石・板碑実測図



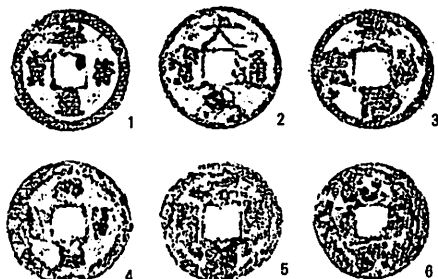
	名称	初 鑄	(西曆)
1	天禧通宝	天禧年	間 (1017)
2	皇宋通宝	宝元2年	(1039)
3	元豐通宝	元豐元年	(1078)
4	元豐通宝	元豐元年	(1078)
5	元祐通宝	天祐元年	(1086)
6	元符通宝	元符元年	(1098)

第56圖 S X 90 出土六文錢



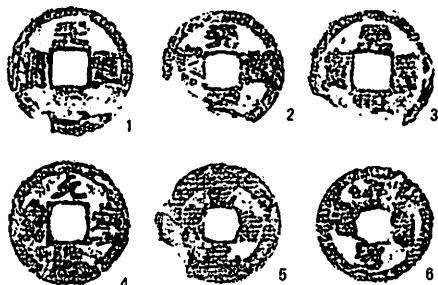
	名称	初 鑄	(西曆)
1	天聖元宝	天聖元年	(1023)
2	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)
3	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)
4	元豐通宝	元豐元年	(1078)
5	元祐通宝	元祐元年	(1086)

第57圖 S X 97 出土六文錢



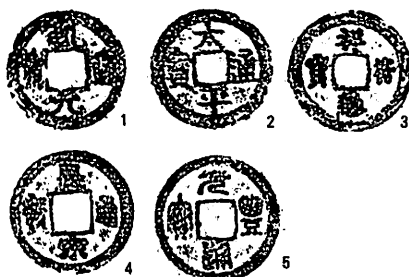
	名称	初 鑄	(西曆)
1	祥符通宝	大中祥符2年	(1009)
2	景祐元宝	景祐元年	(1034)
3	大觀通宝	大觀元年	(1107)
4	?	?	
5	?	?	
6	?	?	

第58圖 S X 131 出土六文錢



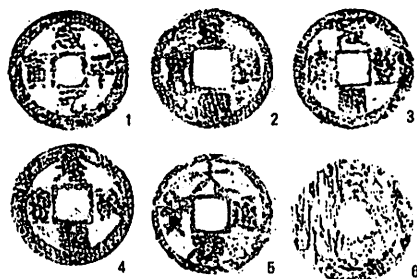
	名称	初 鑄	(西曆)
1	天聖元宝	天聖元年	(1023)
2	天聖元宝	天聖元年	(1023)
3	天聖元宝	天聖元年	(1023)
4	元豐通宝	元豐元年	(1078)
5	紹聖元宝	紹聖元年	(1094)
6	?	?	

第59圖 S X 140 出土六文錢



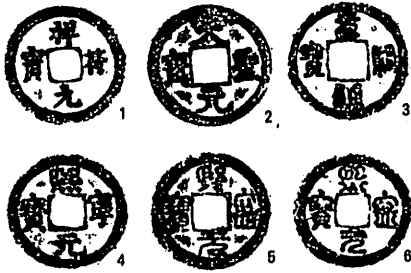
	名称	初 鑄	(西曆)
1	乾元重宝	乾元2年	(759)
2	太平通宝	太平興国元年	(976)
3	祥符通宝	大中祥符2年	(1009)
4	皇宋通宝	宝元2年	(1039)
5	元豐通宝	元豐元年	(1078)

第60圖 S X 311 出土六文錢



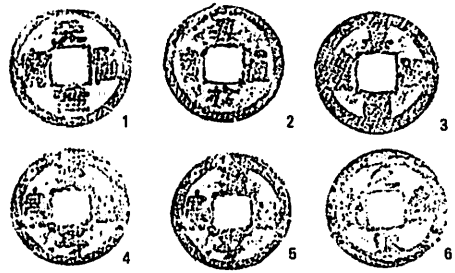
	名称	初 鑄	(西曆)
1	咸平通宝	咸平元年	(998)
2	皇宋通宝	宝元2年	(1039)
3	元豐通宝	元豐元年	(1078)
4	元祐通宝	元祐元年	(1086)
5	大觀通宝	大觀元年	(1107)
6	?	?	

第61圖 S X 313 出土六文錢



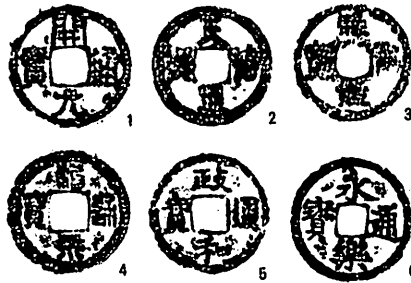
	名称	初 铸	(西曆)
1	祥符元宝	大中祥符元年	(1008)
2	天聖元宝	天聖元年	(1023)
3	嘉祐通宝	嘉祐元年	(1056)
4	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)
5	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)
6	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)

第62図 S X 315 出土六文銭



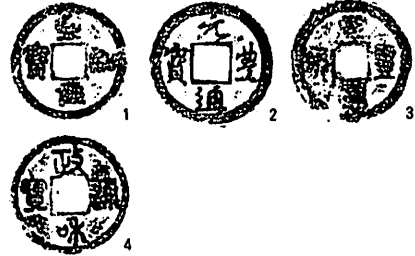
	名称	初 铸	(西曆)
1	天聖元宝	天聖元年	(1023)
2	嘉祐通宝	嘉祐元年	(1056)
3	嘉祐通宝	嘉祐元年	(1056)
4	治平通宝	治平元年	(1064)
5	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)
6	元豊通宝	元豊元年	(1078)

第63図 S X 320 出土六文銭



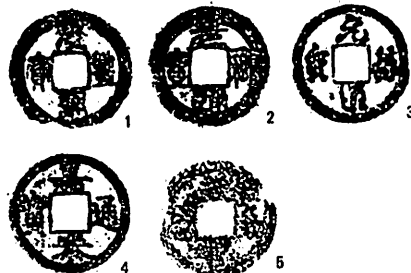
	名称	初 铸	(西曆)
1	開元通宝	武德4年	(621)
2	天禧通宝	天禧年間	(1017~)
3	天聖元宝	天聖元年	(1023)
4	治平通宝	治平元年	(1064)
5	政和通宝	政和元年	(1111)
6	永樂通宝	永樂6年	(1408)

第64図 S X 324 出土六文銭



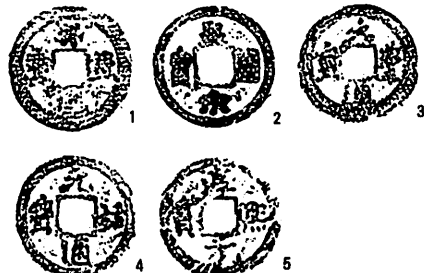
	名称	初 铸	(西曆)
1	至和元宝	至和元年	(1054)
2	元豊通宝	元豊元年	(1078)
3	元豊通宝	元豊元年	(1078)
4	政和通宝	政和元年	(1111)

第65図 S X 327 出土六文銭



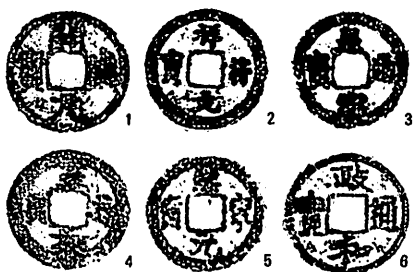
	名称	初 铸	(西曆)
1	元豊通宝	元豊元年	(1078)
2	元祐通宝	元祐元年	(1086)
3	元符通宝	元符元年	(1098)
4	嘉泰通宝	嘉泰元年	~(1201~)
5	?	?	?

第66図 S X 336 出土六文銭



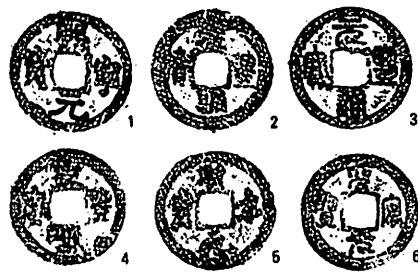
	名称	初 铸	(西曆)
1	祥符通宝	大中祥符2年	(1009)
2	皇宋通宝	宝元2年	(1039)
3	元豊通宝	元豊元年	(1078)
4	元祐通宝	元祐元年	(1086)
5	淳熙元宝	淳熙元年	(1174)

第67図 S X 356 出土六文銭



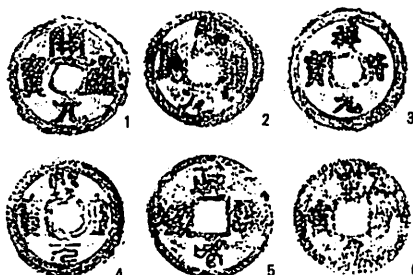
	名称	初 铸 (西曆)
1	開元通宝	武 德 4 年 (621)
2	祥符通宝	大 中 祥 符 元 年 (1008)
3	皇宋通宝	宝 元 2 年 (1039)
4	至和通宝	至 和 元 年 (1054)
5	熙寧元宝	熙 寧 元 年 (1068)
6	政和通宝	政 和 元 年 (1111)

第68图 S X 359 出土六文钱



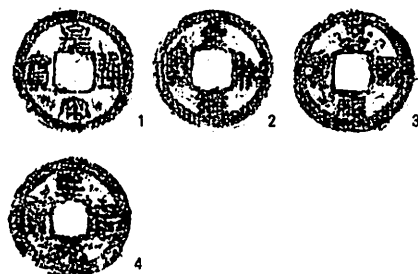
	名称	初 铸 (西曆)
1	熙寧元宝	熙 寧 元 年 (1068)
2	元豐通宝	元 豐 元 年 (1078)
3	元豐通宝	元 豐 元 年 (1078)
4	元豐通宝	元 豐 元 年 (1078)
5	聖宋元宝	建 中 靖 国 元 年 (1101)
6	聖宋元宝	建 中 靖 国 元 年 (1101)

第69图 S X 362 出土六文钱



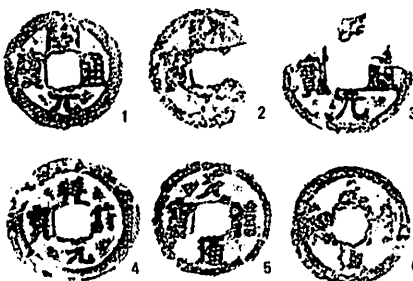
	名称	初 铸 (西曆)
1	開元通宝	武 德 4 年 (621)
2	開元通宝	武 德 4 年 (621)
3	祥符元宝	大 中 祥 符 元 年 (1008)
4	熙寧元宝	熙 寧 元 年 (1068)
5	政和通宝	政 和 元 年 (1111)
6	?	?

第70图 S X 376 出土六文钱



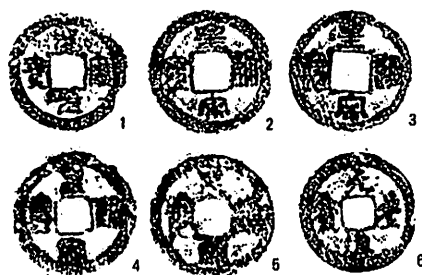
	名称	初 铸 (西曆)
1	皇宋通宝	宝 元 2 年 (1039)
2	至和元宝	至 和 元 年 (1054)
3	嘉祐通宝	嘉 祐 元 年 (1056)
4	熙寧元宝	熙 寧 元 年 (1068)

第71图 S X 387 出土六文钱



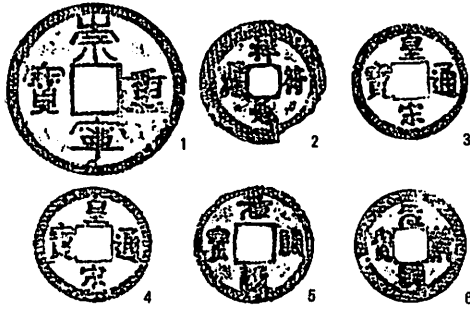
	名称	初 铸 (西曆)
1	開元通宝	武 德 4 年 (621)
2	開元通宝	武 德 4 年 (621)
3	開元通宝	武 德 4 年 (621)
4	祥符元宝	大 中 祥 符 元 年 (1008)
5	天禧通宝	天 禧 年 間 (1017~)
6	元祐通宝	元 祐 元 年 (1086)

第72图 S X 399 出土六文钱



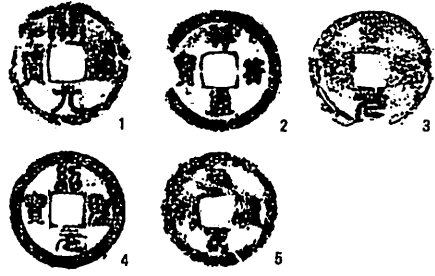
	名称	初 铸 (西曆)
1	聖宋元宝	建 中 靖 国 元 年 (1101)
2	皇宋通宝	宝 元 2 年 (1039)
3	皇宋通宝	宝 元 2 年 (1039)
4	皇宋通宝	宝 元 2 年 (1039)
5	皇宋通宝	宝 元 2 年 (1039)
6	元豐通宝	元 豐 元 年 (1078)

第73图 3 A15区第1検出面出土六文钱



	名称	初 铸	(西曆)
1	崇寧重宝	崇寧元年	年(1102)
2	祥符元宝	大中祥符元年	(1008)
3	皇宋通宝	宝元2年	(1039)
4	皇宋通宝	宝元2年	(1039)
5	元符通宝	元符元年	(1098)
6	元符通宝	元符元年	(1098)

第75図 C区墓域出土のその他の古銭

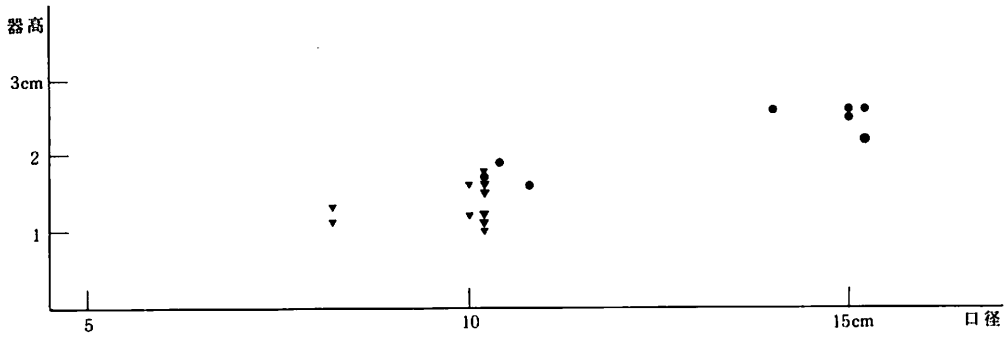


	名称	初 铸	(西曆)
1	開元通宝	武徳4年	(621)
2	祥符通宝	大中祥符2年	(1009)
3	熙寧元宝	熙寧元年	(1068)
4	紹聖元宝	紹聖元年	(1094)
5	?	?	

第74図 A区墓域出土のその他の古銭

名称	初 铸 (西曆)	5	10	15	(枚)
開元通宝	武徳6年(621)	●●●●●	●●●●		
乾元重宝	乾元2年(759)	●			
太平通宝	太平興国元年(976)	●			
咸平元宝	咸平元年(998)	●			
祥符元宝	大中祥符元年(1008)	●●●●●			
祥符通宝	大中祥符2年(1009)	●●●●●●			
天禧通宝	天禧年間(1017~)	●●●●			
天聖元宝	天聖元年(1023)	●●●●●●	●●●●●		
景祐元宝	景祐元年(1034)	●			
皇宋通宝	宝元2年(1039)	●●●●●●	●●●●●●●●	●●	
至和元宝	至和元年(1054)	●●			
至和通宝	至和元年(1054)	●			
嘉祐通宝	嘉祐元年(1056)	●●●●●			
治平通宝	治平元年(1064)	●●			
熙寧元宝	熙寧元年(1068)	●●●●●●	●●●●●●●●	●●	
元豐通宝	元豐元年(1078)	●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●
元祐通宝	元祐元年(1086)	●●●●●●	●●		
紹聖元宝	紹聖元年(1094)	●●			
元符通宝	元符元年(1098)	●●●●●			
聖宋元宝	建中靖国元年(1101)	●●●●			
崇寧重宝	崇寧元年(1102)	●			
大觀通宝	大觀元年(1107)	●●			
政和通宝	政和元年(1111)	●●●●●			
淳熙元宝	淳熙元年(1174)	●			
嘉泰通宝	嘉泰年間(1201~)	●			
嘉定通宝	嘉定元年(1208)	●			
永樂通宝	永樂6年(1408)	●			
不 明		●●●●●●	●●●●●		

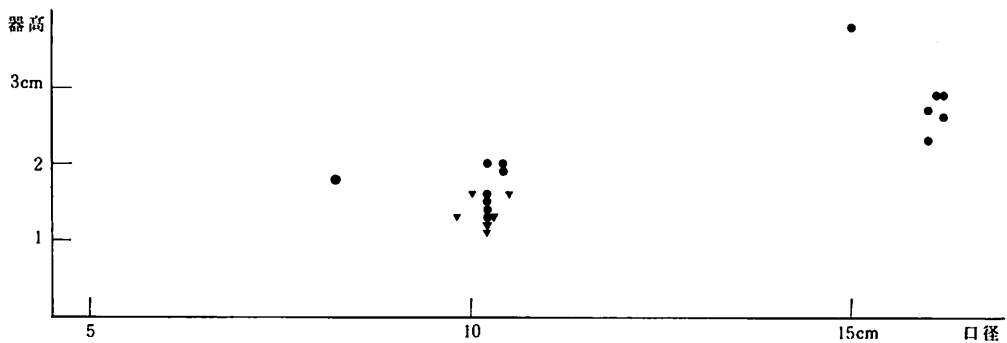
第76図 出土古銭統計図表



第77図 S D83 出土土師器皿法量図表

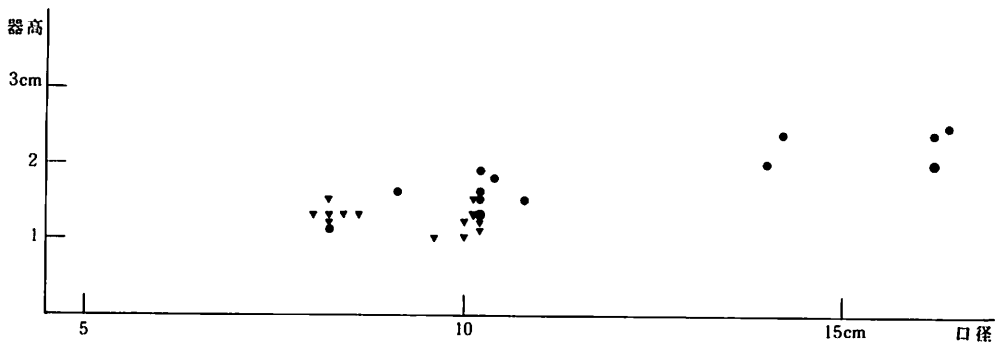
SD83		口径								
種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
褐色系	個体数	0	—	2.4	0.2	—	0.2	0.6	1.1	—
	比率	0%	—	42%	100%	—	100%	100%	100%	—
「て」字状	個体数	0.6	—	3.3	0	—	0	0	0	—
	比率	100%	—	58%	0%	—	0%	0%	0%	—

●：褐色系土師器皿， ▼：「て」字状口縁土師器皿， ■：白色系土師器皿（以下第83図まで同じ）



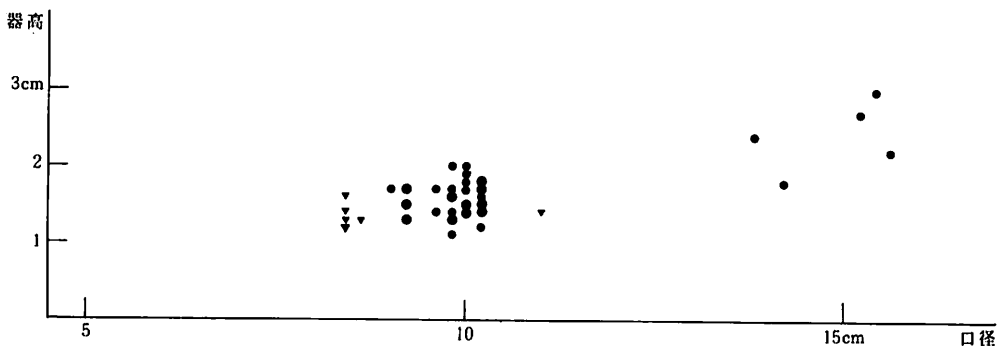
第78図 S D98 出土土師器皿法量図表

SD98		口径								
種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
褐色系	個体数	0.7	—	2.7	0	0.2	—	—	0.8	1.6
	比率	100%	—	52%	0%	100%	—	—	100%	100%
「て」字状	個体数	0	—	2.5	1.0	0	—	—	0	0
	比率	0%	—	48%	100%	0%	—	—	0%	0%



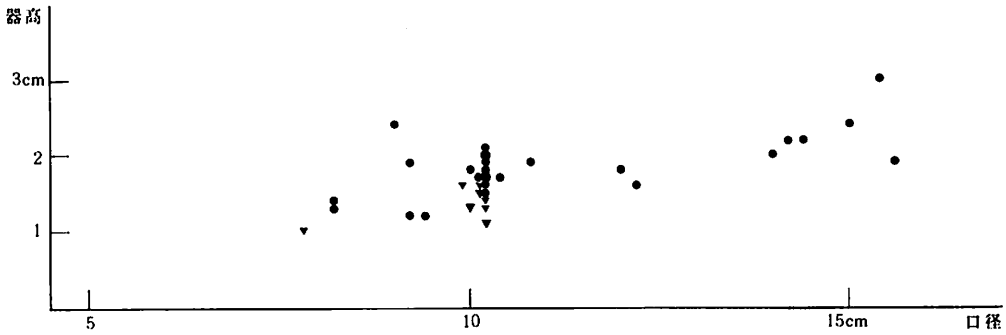
第79図 S D99 出土土師器皿法量図表

SD99		口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
褐色系	個体数		0.3	1.0	1.3	0.3	—	—	1.3	0.2	1.1
	比率		17 %	85 %	42 %	100 %	—	—	100 %	100 %	100 %
「て」字状	個体数		1.3	0.2	1.9	0	—	—	0	0	0
	比率		83 %	15 %	58 %	0 %	—	—	0 %	0 %	0 %



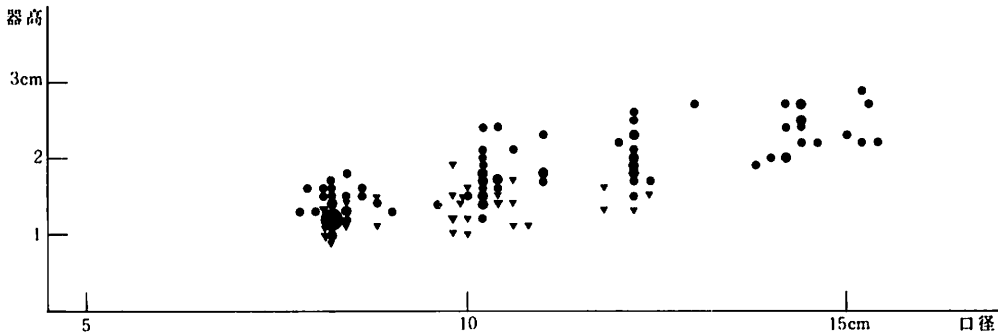
第80図 S K114 出土土師器皿法量図表

SK114		口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
褐色系	個体数		0	2.1	10.1	0	—	—	0.7	0.7	0.2
	比率		0 %	72 %	100 %	0 %	—	—	100 %	100 %	100 %
「て」字状	個体数		1.4	0.8	0	0.6	—	—	0	0	0
	比率		100 %	28 %	0 %	100 %	—	—	0 %	0 %	0 %



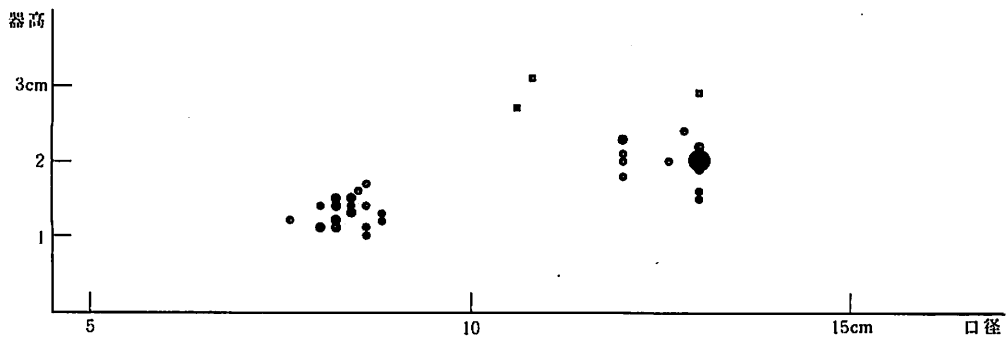
第81図 SK116 出土土師器皿法量図表

SK116		口径									
種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16	
褐色系	個体数	0.4	1.0	3.5	0.2	0.6	—	0.9	0.7	0.8	
	比率	72 %	100 %	59 %	100 %	100 %	—	100 %	100 %	100 %	
「て」字状	個体数	0.2	0	2.5	0	0	—	0	0	0	
	比率	28 %	0 %	41 %	0 %	0 %	—	0 %	0 %	0 %	



第82図 SK79 出土土師器皿法量図表

SX79		口径									
種類	口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16	
褐色系	個体数	14.0	1.3	6.6	1.5	4.3	0.4	3.4	3.3	0.2	
	比率	88 %	74 %	36 %	58 %	83 %	100 %	100 %	100 %	100 %	
「て」字状	個体数	2.0	0.5	11.8	1.1	0.9	0	0	0	0	
	比率	12 %	26 %	64 %	42 %	17 %	0 %	0 %	0 %	0 %	



第83図 S K70 出土土師器皿法量図表

SK70		口径	8 cm	9	10	11	12	13	14	15	16
褐色系	個体数		7.7	1.8	—	0	2.6	4.5	0.2	—	—
	比率		100%	100%	—	0%	100%	93%	100%	—	—
白色系	個体数		0	0	—	1.8	0	0.3	0	—	—
	比率		0%	0%	—	100%	0%	7%	0%	—	—

第3章 文献的考察

発掘地は、左京三条三坊十一町に当り、東側は烏丸小路に面し、南北の真中は、ほぼ北の三条坊門小路と南の姉小路の中央に当る。遺構検出状態でも中央部から南北二つに分けられる。桃山時代以降、町屋として統一されるまで、即ち室町時代までを考察してゆく。

第1節 高階邸の位置

まず、北側の地点を明確にしえるのは、『山槐記』応保元年(1161)7月8日条である。

丑終刻許有火、内裏^{東三}近々之由下人來告、仍着直衣馳參、三条坊門南、烏丸西備中守為清宅云々、仰藏人尋直官人并所衆瀧口等見參、無風火消、禁裏無怖畏、仍退出。

この焼亡記事によると「備中守為清宅」とある。備中守として高階為清の邸宅が十一町内に領有する敷地は如何なる面積を領有していたであろうか。

平安京造営における宅地の班給についての史料は伝えられていないが、『日本紀略』延暦12年(793)9月2日条に

遺菅野真道・藤原葛野麿等、班給新京宅地。

とある。新京宅地を班給するにあたり、何らかの規準がもうけられていたと思われる。遷都以降、200年以後の史料であるが、『日本紀略』長元3年(1030)4月23日条に、

仗議、諸国吏居処不可過四分一宅、近来多造営一町家、不濟公事、又六位以下築垣并椽皮葺宅可停止者。

とあり、諸国吏(多くは正六位以下の相当官)は四分の一町を限度とするとある。三位以上は一町以下、五位以上半町以下、六位下四分の一町以下とする難波京に倣ったものという¹⁾。

『小右記』²⁾はこの陣座の後に、関連した事件を伝えている。それは同日記の長元3年6月23日条で、

廿三日、乙巳^{(差カ)(高階)}着為時并隨身信式等^{(身人部)(武カ)}令施行東山^(源)、相高宅從去夜聞之壞之間、未明使官人等馳向彼宅令破却、

とある。檢非違使高階為時が東山にあった源相高宅を破壊した理由として、

從五位下源相高宅新制官符新出之後、構高大屋、^(葺カ)椽檜皮、檢非違使等破却件屋、須令法官勘申相高罪名者。

とあり、邸宅破棄は新制官符にのっとったものであった。その新制は5月28日³⁾に發布され、同日記は全文を伝えている⁴⁾。

太政官 符彈正・左右京職・檢非違使^{別府}、

応禁制非參議四位以下造作壹町舍宅事

右、檢案内、式云、大路建門屋三位以上及參議職之者、式条所存、門屋依人乃識、舍宅須有等着、而近年以來人忌品秩、好宮舍墟桓、式籠滿町棟守、或構大廈、故雖位貴者無一錢則步三經、雖品賤者富浮雲則開高門、俗之濫吹、因之馱弊、職此之由、理不將然、右大臣宣、奉勅、宜仰彼職嚴令禁制、若不憚制止猶致違犯之輩、其有官者、解却見任、永不數用、其無官者、科違勅罷、將以決斷、但無居宅猶可當作者、古四分之一以下之地先申請官、待其裁報、又出木致功、既雖結構、未及造了、早從^{〔圖〕}却、當作業了、不可必制、春職且承知、依宣行之、符致奉行、

同年6月28日⁵⁾の明法博士令宗道成勘文によると、この法令によって源相高は散位であっても見任解却に准じて贖銅を徴すべし、とある。不法造宅之制により実際に打ち壊されたわけである。この時、源相高は従五位下であった。

下ってこの造宅規制が平安末期まで有効性があったか確証はないが、やはり何らかの束縛があったと思われるため、高階為清邸が十一町全体を領していたとは考えにくい。

為清の経歴は、仁平2年(1152)6月27日条『兵範記』に「佐渡守」とみえるのを始めとして、久寿2年(1155)2月25日⁶⁾に2年の延任が認められている。先の焼亡記事の応保元年(1161)に備中守になり、治承3年(1179)12月12日⁷⁾には近江国守に任命されている。為清は佐渡守の時代、法成寺の西塔を造進⁸⁾するほどの財力を有していたが、五位⁹⁾としての地位からして、一町の半分を越えてはいなかったのではなかろうか。そうすると、「三条坊門南烏丸西」の指点標示は、それぞれの小路に面した一町の北部の半分以下を領有していたと考える。烏丸小路に面して門の基礎が出土し、平安期の井戸も検出された。これにより発掘地の北側半分が、為清邸に当ると思われる。

天武天皇—高市親王—長屋王—桑田王—磯部王—峯緒—茂範—師尚—
良臣—敏忠—業遠—成章—為家—為遠—家行—為清—行清—有清

『高階氏系図』(『尊卑分脉』より作製)

上記の系図では、為清から行清、有清へと伝えるが、鎌倉時代全般にわたる国司制度の崩壊にともない、富豪を究めた受領は衰退をみた。為清邸宅は子孫に伝領して行くわけであるが、その史料もなく、そのまま領有していたとは考えられない。鎌倉時代には退転し、南北朝以降は墓域となっていた。

第2節 墓地の規制

埋葬された人骨約80余体を検出した。ほぼ体形として確認出来るものは、多く頭を北向とし、六文銭と漆碗とをともなっている。墓域として室町時代全般、さらに安土期まで利用されていたことが土師器皿等の遺物から判断される。

三条坊門小路には足利將軍家の御所があり、この墓地の前を行粧している。洛中の真中に墓域が公的に許されていたのであろうか。

平安遷都後、朝廷は京の周辺の愛宕・葛野両郡の人々が自宅の近くに埋葬することを禁止¹⁰⁾している。この例からも、平安時代の京内に墓域はなかったと考えられている¹¹⁾。遺制として、ほぼ鎌倉期も踏襲していたと思われる。

室町後期の文献ではあるが、墓地に関係する『室町幕府奉行人連署奉書』¹²⁾が阿弥陀寺に出されている。

阿弥陀寺事、依為無縁所、於境内或立墓、或檀那之輩土葬等儀、為結縁令執行之上者、向後不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、

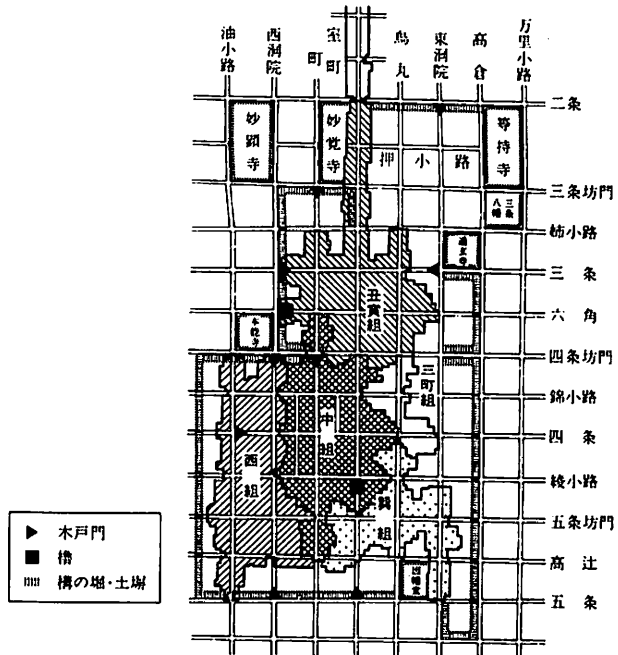
永禄元年十月廿七日 左近大夫将監(花押)

左衛門尉(花押)

当寺住持

この奉書によると境内において立墓と檀那衆の土葬とが認められている。これは洛中において無断で立墓と土葬とが禁止されていたことを物語か、あるいは反対に、土葬等が多くみられたので取り締っていたとも考えられる。これらのことから発掘地の墓域の性格として、2通り検討される。A) ある寺院の領域内にあったこと。B) この地が慣習的な附近の民衆の墓地であったこと。

A) 西側に現在円福寺町と地名のみ残っている寺が室町後期にあった。この寺以外には、墓域に隣接する寺院はみいだせない。円福寺は『京都坊目誌』によると、後深草天皇の勅願より建長3年(1251)に僧立信が深草に建立し、浄土宗深草派の本寺となったが、のち立条坊門猪熊に移り、さらに室町小路に移転し、天正13年(1585)京極四条坊門へ転居したと記述する。中原康富は、日記¹³⁾の中で「予代々墳墓在五条坊門猪熊円福寺」と記す。室町中期頃には五条坊門猪熊にあり、円福寺より埋葬の方が先に存在したことになる。



第84図 戦国期京都都市図

(高橋康夫「京都中世都市史研究」
第30図「戦国期京都都市図」より
下京区の部分を転載。)

さらに、円福寺がいつ室町小路西側の地に移ったか不明である。が、戦国時代の洛中は上京と下京が防禦施設としての土塀・堀で廻ぐらされており、三条坊門と姉小路の間は、室町小路を中にして東西にその領域を分かっていた¹⁴⁾。また「南無妙法蓮華經」を彫る板碑一基が出土している。円福寺は浄土宗でもあり、法華宗系の墓石を如何に考えるべきであろうか。

B) 妙号の板碑・永禄元年(1558)の五輪塔、六文銭・漆椀等の簡素な副葬品、さらに埋葬において重層的に、あるいは密度濃く長期にわたって墓域を使用していることなどから、民衆の共同的に利用していた可能性が強い。特に高橋康夫氏の復元した洛中の図から推量すると、下京の「構」の中にあり、丑寅組の北に位置し、空闲地となっている(第84図)。

これらのことからBの方と考えたい。しかし発掘地の北側断面から人骨が検出されていることから、現在のお池通(旧三条坊門小路)の面まで発掘が行なわれ、どの範囲の墓域であったか、また新しい銘文をとまなう遺物の検出をみるまで、決定を留保したい。

第3節 姉小路との関連

南側の地は墓域ではない。また西側の面は江戸時代の粘土採取により、それ以前の遺構は検出できなかった。さらに東側の南隣りの土地は、当博物館が昭和55年11月26日から翌年1月13日まで発掘を行い、その報告書(『平安京跡研究調査報告第12輯』)が刊行された。この中で記されている論述とはほぼ重り合うため、その論にそって述べて行く。

先に述べたように、平安時代において高階為清邸がこの東側まで延びていなかったと思われる。そうすると、この地が文献上明確にあらわれるのは鎌倉初期からである。

まず建保3年(1215)の文書¹⁵⁾にみえる。

(増寫符)
「進姉小路烏丸地券案 (花押)」

奉女房四条壺禰之新券案如此候、伴券承久乱逆之時紛失之由、息女中納言局被申、以之仍為御所望、件案文進覽之、

寛喜四年三月十四日 (花押)

奉渡 地壺処事

合貳戸主余貳拾陸丈者

東西漆丈 南北拾捌丈

在左京姉小路以北、烏丸以西、姉小路西

右件地、元者卿二位家領也、而被相博大炊御門烏丸地畢、今彼地内貳戸主余貳拾陸丈所奉

(別案川後号四条局)
渡七条院女房治部卿殿御壺禰也、於本券者、有類地之間、不令相副、仍為後日証拠、立新券之状如件、

建保三年十月十八日 在判

上記の文書は承久の乱のとき、建保3年の譲状を紛失したため、小將の姉妹の中納言局が寛喜4年(1232)3月14日に申請して、この地を安堵してもらった紛失状である。

この文書によると、姉小路に面した北側と烏丸小路の西側で示される土地を卿二位家が所有していた。それを建保3年になって、大炊御門烏丸地と相博して、七条院女房治部卿殿御壺禰(のちに四条局と号す)に渡した。さらに翌年3月12日附¹⁶⁾の譲状によると、四条局の子息小将に譲与されている。

弘安9年(1286)7月26日附『敷地放券文』¹⁷⁾によると、同地を明教と性蓮の私領として、直銭175貫文で尼円心に売却している。その際、手継文書10通を相副えてとあるので、この年まで約10件もの所有権の移転がくりかえされたことがわかる。

南北朝期に入ると、次の寄進状¹⁸⁾にみえる。

寄進 日吉十禅師社燈油下地事

合貳戸主余貳拾陸丈

在左京姉少路烏丸以西姉少路面北頬地事

右地者、永舜領掌年尚、而有神物借用之子細之上、為現当悉地成就、相副証文等、永代ト取令奉寄十禅師社、然者納受敬神之誠、満足所願、仍状如件、

貞治六年六月一日 僧永舜(花押)

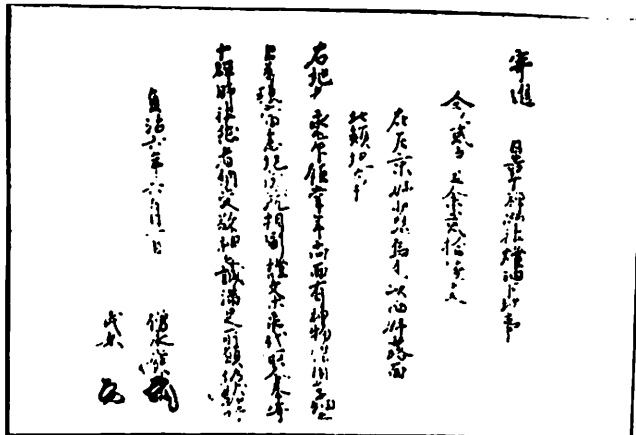
氏女 (花押)

貞治6年(1367)に僧永舜と氏女とが、日吉十禅師社の燈油料地として永代寄進をしたとある。これ以降、室町時代全般にわたって、この文書に記された状態が続いたと思われる。

南隣の出土遺物として特色の一つは、備前焼の大甕一総点数は約20~22前後を数える一が遺物用コンテナ100箱以上に及ぶ膨大なものがある。報告書では「今回出土した大甕が酒屋に使用されたものかどうか断定は

できないが、調査地に酒屋をはじめ大甕を必要とする業種に対してそれを供給する業種の居住者がいたことはあながち無理な推測ではないだろう。」とある。この時期の出土した大甕等から、それを利用する商業を推定している。しかしそれに続く北側、今回の発掘した隣地では、そのような顕著なものは出土していない。

出土遺物から先の発掘地とは違った空間領域を有していた。日吉十禅師社燈油料としてのこの地は、西側の南(B区)におおよそ当ると思われる。東側の南(A区南側)も確実な文献・具体的な遺物がないので、断定はさしひかえるが、ほぼ日吉十禅師社にみえるような土地関係



第85図 「僧永舜・氏女日吉十禅師社燈油下地寄進状」1幅
大日本史料第六編之二十八、P856には
近江国生源寺文書として所収。

があったのではなからうか。

第4節 桃山期以降

桃山期以降になると、天正18年(1590)の豊臣秀吉の洛中改造にともない西側に新しく道が整備され、慶長13年(1608)に銀座が伏見から移転したことにより、両替町通りができ、西に面して龍池町、東の烏丸通りに面して虎屋町となった。戦国期以降の洛中の町屋は、道に面した両側の町屋が一つの町を形成していた。発掘地も、東西真中から道に面して、龍池町と虎屋町に二分される。

龍池町は、通りの名のように金銀朱座関係者が多く住んでいた。また虎屋町には菓子所菊屋¹⁹⁾・両替屋²⁰⁾・御城内用間職人年寄和泉屋宗助²¹⁾などが住んでいた。両町とも町衆の中心的な居住地であった。

明治期以降の発掘地は、虎屋町4軒・龍池町5軒の町屋があった。庶民の町並である。現在は京都市の商業地として発展している。

註

- 1) 秋山國三・仲村研『京都「町」の研究』(東京, 昭和50年)第二章第一節。
- 2) 『大日本古記録』所収本によった。『小右記』も同日に仗議が催されていることを記すが、略本のため詳細な内容は伝えていない。
- 3) 『小右記』長元3年6月28日条。
- 4) 同上, 長元3年5月口4日条。請印の前の官符の本文を収録している。
- 5) 註3)に同じ。
- 6) 『兵範記』同日条。
- 7) 『山槐記』・『玉葉』同日条。
- 8) 『本朝世紀』仁平3年9月8日条。
- 9) 『尊卑分脉』に「正五位下」と注記す。
- 10) 『日本後記』延暦16年正月25日条。
- 11) 『京都の歴史』(京都・昭和45年)第一巻第六章第二節の「送終の礼」に詳述する。
- 12) 『京都浄土宗院文書』(京都, 昭和55年)所収。
- 13) 『康富記』享徳3年7月14日条。
- 14) 高橋康夫『京都中世都市研究』(京都, 昭和58年)第三節参照。
- 15) 『京都大学所蔵文書』(『鎌倉遺文』2188号文書・『大日本史料第四編之十三』, 915頁)。
- 16) 『八坂神社文書』(『鎌倉遺文』22151号文書)。
- 17) 『押小路文書見聞筆記(四十八)』(『鎌倉遺文』15949号文書)。
- 18) 写真図版にした一幅の文書は『弘文荘古文書目録』(東京, 昭和48年)より転載したものである。『大日本史料 第六編之二十八』(東京, 昭和16年)856頁には、『近江国生源寺文書』として、この文書を所収する。
- 19) 『京羽二重』
- 20) 『京羽二重織留』
- 21) 『京羽二重織留大全』
- 22) 明治35年法律第22号等による作製の『旧土地台帳』

第4章 まとめ

今回の調査では、平安時代以降各時期の遺構・遺物が発見されているが、中でもA区東端で検出された門跡とその周辺の溝、そしてA区北部とC区で発見された墓域が最も注目すべき遺構と言えよう。ここではこの2点について若干の考察を加えたい。

第1節 門跡とその周辺の遺構

今回検出した門跡と考えられる一対の礎石は、花崗岩製で、相互の間隔は芯一芯で2.9mほどであった。

これを現存する平安～鎌倉時代の門と比較すると、奈良市新薬師東門(図版第12一上、現状は四脚門であるが元来は棟門で、日本最古の現存棟門という。平安末～鎌倉時代、重要文化財)の約4.5mには及ばないものの、法隆寺西園院上土門(図版第12一下、鎌倉時代、重要文化財)の約2.5mをやや上まわっている。また十輪院四脚門(図版第13一上、鎌倉時代、重要文化財)の3.2m、法隆寺宗源寺四脚門(同下、鎌倉時代、重要文化財)の3.3mをやや下まわる程度である。このことから門の規模としては、寺院と邸宅の門という相異はあるものの、平安時代後期の門として、ほぼ妥当なものと考えることが出来よう。平安京の発掘調査で、この時期の門跡と考えられる遺構が検出された例が無いので、考古資料との比較検討は出来ないが、今後の検出例を待って検討してゆきたい。

また対応関係は確認できなかったものの、S B 65-aの東側に位置する礎石、S B 69, S B 68, S B 68の下部で検出されたS B 186など、門柱の礎石またはその根石と考えられる礎を置く遺構が周辺で発見されており、この位置が平安時代において永く門を置く位置として定着していたことをうかがわせるのである。

このことは、礎石の周辺に穿たれていた溝(S D 98, 99, 130, 66等)がいずれもこの部分で途切れていることから言えるのではあるまいか。

ところで、この門の位置をこれまでの発掘調査例から復元した条坊の位置と比較してみると¹⁾、調査地である左京三条坊条十一町の北側に位置する三条坊門小路と、南側の姉小路の丁度中間からやや(約6m)北に位置することがわかる(付図6参照)。この一町の中に占める位置も、邸宅の東門として妥当なものと考えられるのである。

このように、今回発見された門跡の遺構は、きわめて貴重な史料であると言えるのであるが、反面、これまでの調査例と矛盾する点が2つ存在する。

1つは、遺構の方位の問題である。

これまで平安京内の多くの調査で検出された条坊関係の遺構は、いずれもほぼ真北を基準に

して溝が掘られていたと考えられ、それらの検出例を集成した京都市埋文研の条坊復元モデルでも、大きな矛盾なく全ての検出例を抱括している(実際には15分ほど西にふれているようであるが、ほぼ真北とみてよいであろう。)

ところが、今回発見した礎石の芯一芯は、東に5度振っており、これまでの検出例による方位と大きくくい違いを見せるのである。単に礎石だけでなく、礎石の周辺で発見されている数本の溝についても、いずれも約5度東にふっており、少くともこの門から北側、三条坊門小路に至るまでは、東に5度傾いた条坊復元を考えねばならないことになる。

これまで、このように極端に方位のふれた調査例が無いため、解釈に苦しむ問題である。

もう一点の矛盾は、溝と礎石の位置の問題である。

これまでの周辺(隣接する南側敷地の2ヶ所、十町にあたる三条西殿跡の計3ヶ所で調査が行われ、烏丸小路の側溝と考えられる溝が発見されている。付図6参照)での調査と京都市埋文研による平安京条坊復元によれば左京三条三坊十一町の西側の築地の芯は、ほぼ $y = -21,697$ mを通る。ところが今回検出された門跡の位置は $y = -21,694$ mと3 m東へ突出することになる。通常、門は築地より宅地内に入り込むものとされているが、築地にそのまま真直にとりつくものとしても、前記の復元モデルの許容誤差3 mぎりぎりの位置にあることになる。また、先に述べた南接する2ヶ所の調査例、及び三条西殿の溝を、烏丸小路の西側側溝とすれば、門が道路面に突出していたとしか考えようのない状況である。また、この礎石の更に東側にも溝を検出しており、これを前述の3つの調査例の溝と結ぶとすればこの部分が、ほぼ2.5m道路に突出していたことになる。

一方、S D 98, S D 130の両溝を南に延長するとこれまでに検出した溝とほぼ一直線にならぶ。S D 98・130を、門跡との位置関係から見れば、築地の内側の溝と考えることも出来、その南への延長ラインに乗る溝も、同様に内側の溝と考えることも出来るわけである。

今回検出した門跡とその周辺の遺構は、これまでの調査成果による条坊復元と比較して、位置と方位が大きく異なる。条坊復元が基本的には動かないものとすれば、今回の調査例が三条坊門一烏丸小路付近の特殊な事情によるものと考えられるべきなのであろうか。今後の検討課題として残されたものと言えよう。

第2節 墓 域

墓域については第3章の文献学的考察でも触れているが、若干の私見を述べてみたい。

今回の調査では、再堆積の人骨も含めて約80体分の人骨が発見され、このうち原位置をとどめていたものも多数にのぼっている。通常、平安京域内で明らかに墓と推定される集石墓や木棺墓でも、人骨が残ることは極めて稀で、今回のように、相当腐食が進行し、もろい状態になっているとはいえ、一応全骨格が揃って残った例はきわめて少い。地質的に見ても骨の遺存に良好な土とは考えられず何故この地で、このように大量の遺骨が残ったか不明であるが、墓地と

してきわめて多数の遺体が集中的に埋葬されていたことが、遺存のための条件を形成したものと考えられよう。

墓地の年代については、全ての墓壇、遺骨について、年代の手がかりとなる遺物が皆無であるため、決定的なことは言えないが、副葬されていた六文銭と、C区で発見された五輪石が年代推定の一つの手がかりとなる。

今回の調査で発見された古銭(墓壇内に6枚重なった状態で発見されたものを主とするが、単独出土のものも含む)は27種で、最も古いものが開元通宝(8枚)で、最も新しいものは一枚ではあるが永楽通宝(永楽六年(1408)初鑄)である。この永楽通宝は墓壇(S X 324)内で6枚が重なった状態で発見されたうちの一枚であり、この墓の時期は少なくとも15世紀初頭までは下げなくてはならない。

またC区墓城南側で発見された五輪石には

永禄元年
 キャカラバア 道春禅門
 (梵字) 十二月廿八日

とあり、永禄元年(1558年)には、この地は墓地として機能していたことが理解されるのである。またA区の近世の井戸中で発見された板碑についても、その様式から見て、五輪石とほぼ同時期かやや古い年代を与えることが出来よう。

墓壇内からごく細片でわずかに出土する土師皿片(勿論副葬品ではない)には鎌倉時代～室町時代前半の年代を与えることができるようである。とすればこの墓壇が営まれた大まかな時期としては室町時代、そのうちでも応仁の乱を境として、15世紀後半から16世紀代をあてることが出来るのではないだろうか。もっとも、数多く発見された一般庶民の墓と思える土壇墓と、五輪石が必ずしも同一時期のものとは考えられず、階層も異なるものと考えざるを得ないが、C区の北壁の断面観察によっても、14世紀代の土層を掘り込んで墓壇が作られており、15～16世紀という墓壇の年代はほぼ動かないであろうと考えている。

応仁の乱以降天正年間までの京都の様子を描いたという『中昔京師地図』²⁾によれば、姉小路以北、大炊御門大路以南の一带は、若干の寺域を除いてほぼ荒地となっているようである。この一帯のこれまでの発掘調査でも、この時期の遺構・遺物が比較的少いという³⁾。これらの諸要素を考えあわせれば、応仁の乱以降、上京の間に残された荒地を利用して、半ば自生的に墓壇が形成されたと考えるのもあながち無理とは言えないであろう。

文献学的考察の項でも述べられているように、調査地の西隣は現在も『円福寺町』という地名が残っているように、室町期のある時期に円福寺が存在した。この寺と今回発見した墓地との関係については更に調査研究する必要があると思われるが、本報告では時間的な関係もあり『円福寺』という寺院の存在を指適するにとどめておきたい。

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所の復元モデル№32を使わせていただいた。
- 2) 『大内裏図考証』付図。
- 3) 京都市埋蔵文化財研究所永田信一氏の御教示による。

お わ り に

リクルートセンター・明治生命新築敷地の発掘調査は、昭和58年9月から翌59年2月上旬までほぼ4か月にわたって実施された。調査の結果、平安時代の門跡とその関連遺構、室町時代と考えられる広大な墓域など、大きな成果を得ることが出来た。

この大きな成果を報告するためには本書はあまりにも粗末な内容である。特に、墓域と門跡以外には、ほとんどふれることが出来なかったのは心残りとなるところである。諸般の事情から、整理期間がほぼ2ヶ月という短期間に限られたこともあるが一重に編者の責任に帰すべきことである。ただし、遺物等の実測図については可能なかぎり掲載することに始めた。大方の御寛恕をお願いする次第である。

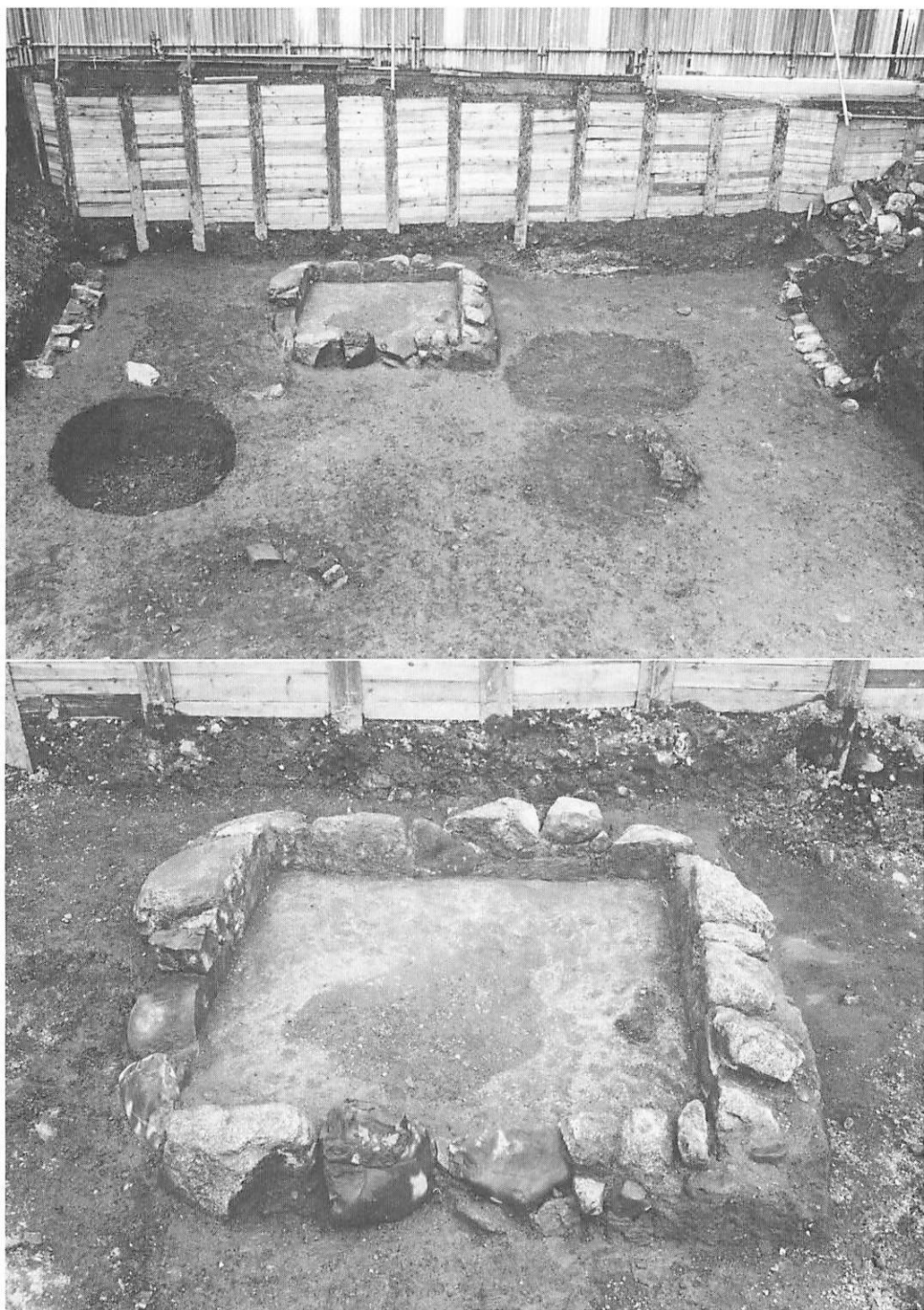
尚、発掘期間中から本書刊行に致るまで多数の方の御教示、協力を得た。特に京都大学理学部池田次郎教授には、御多忙の中、人骨の鑑定を引きうけていただいた。また京都大学名誉教授上田健夫先生には、墓域出土の玉の材質鑑定の労をとっていただいた。ここに厚く謝意を表わすものである。

圖 版

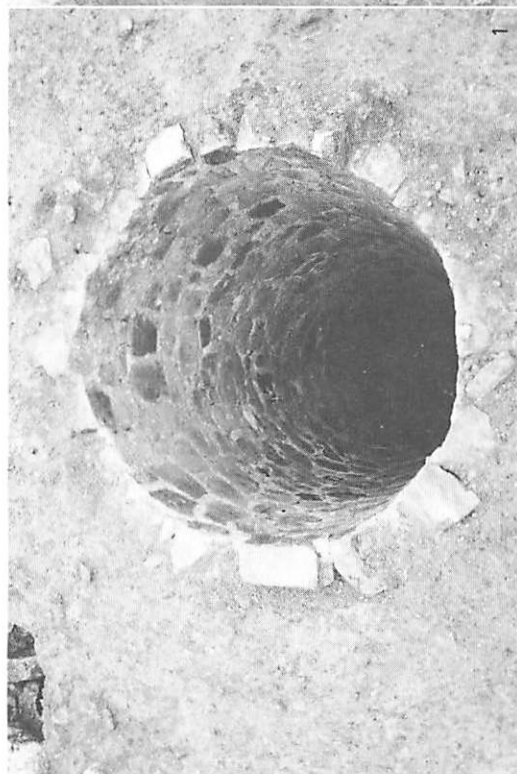
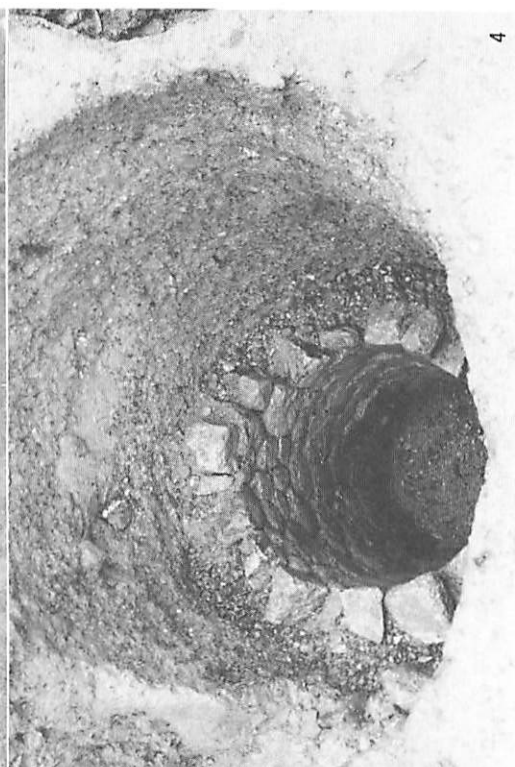
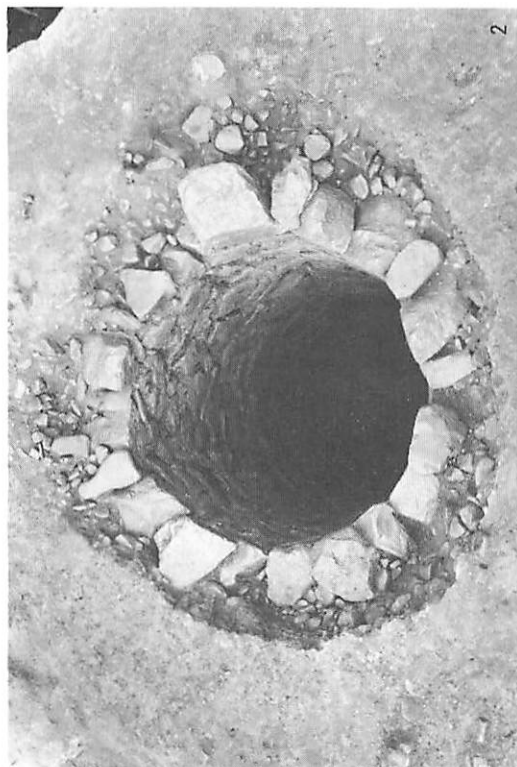


上：調査地遠景(烏丸御池交叉点北東から) 下：A区第1検出面全景

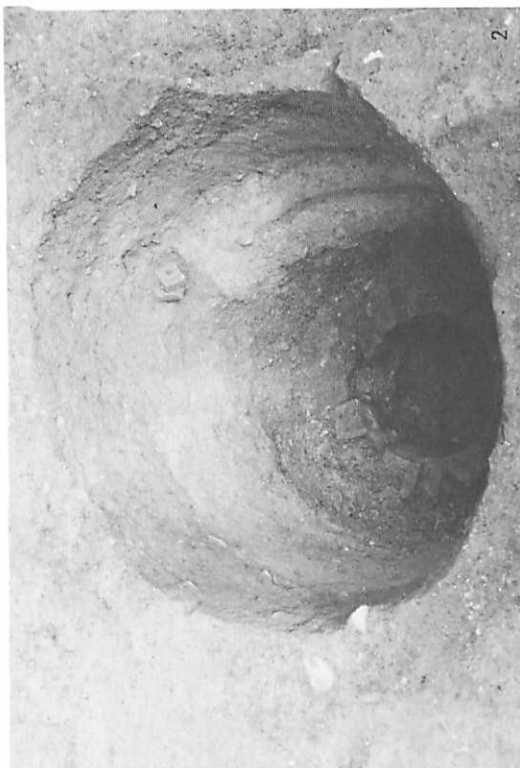
図版第 2



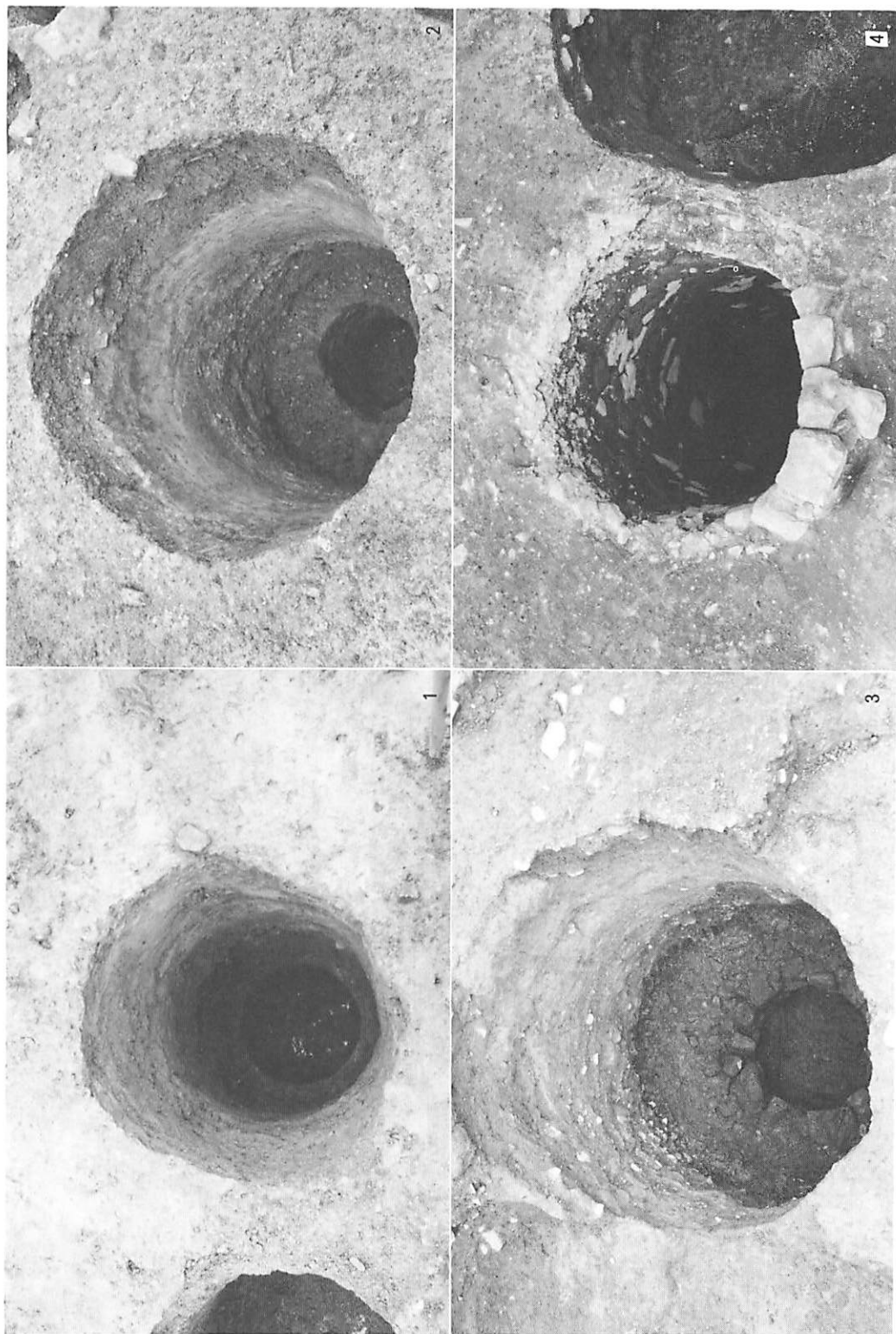
上 : S B26・27・28 下 : S B27



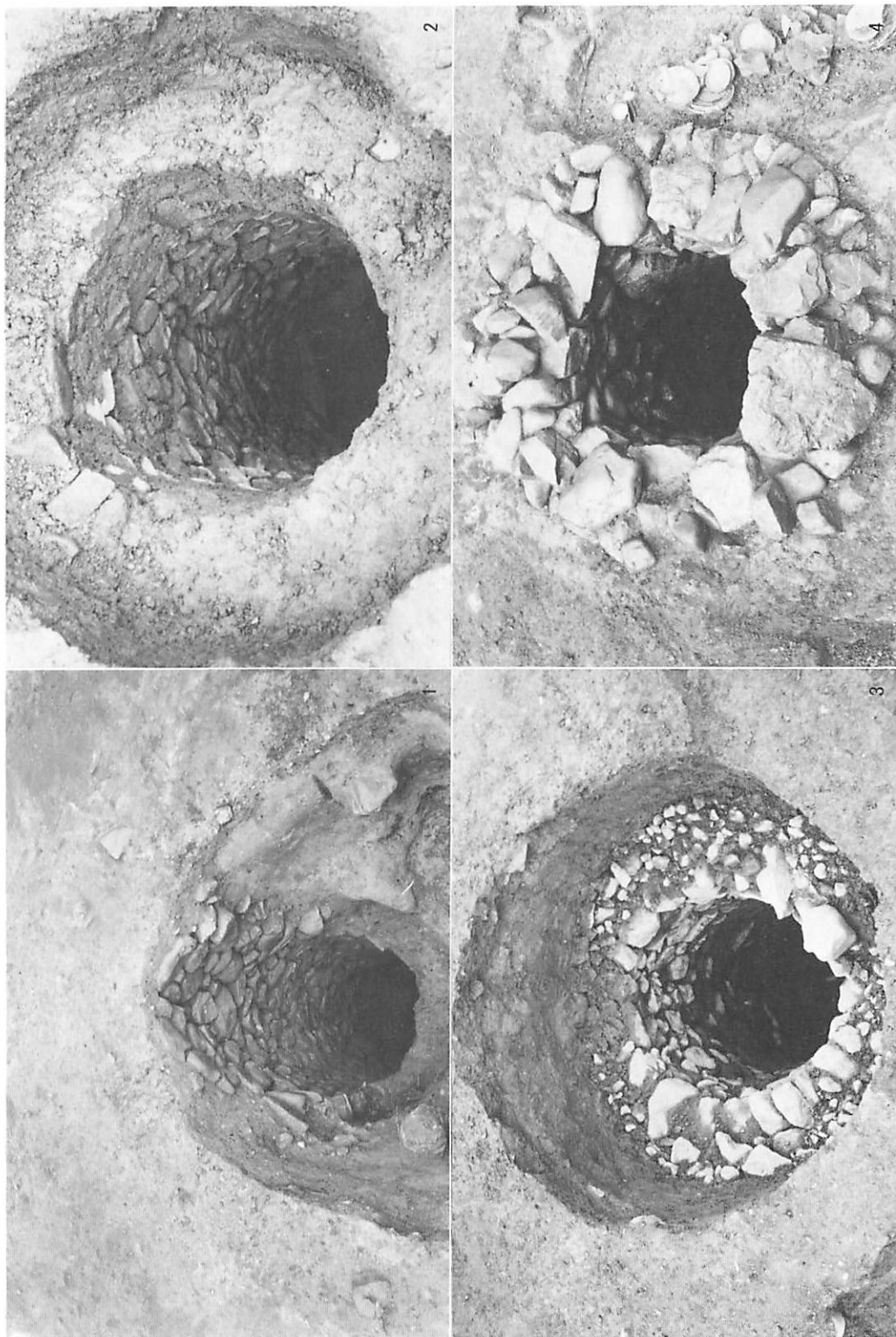
1 : SE1 2 : SE30 3 : SE7 4 : SE3



E 6 2 : S E 36 3 : S E 41 4 : S E 33



1 : SE48 2 : SE24 3 : SE40 4 : SE29



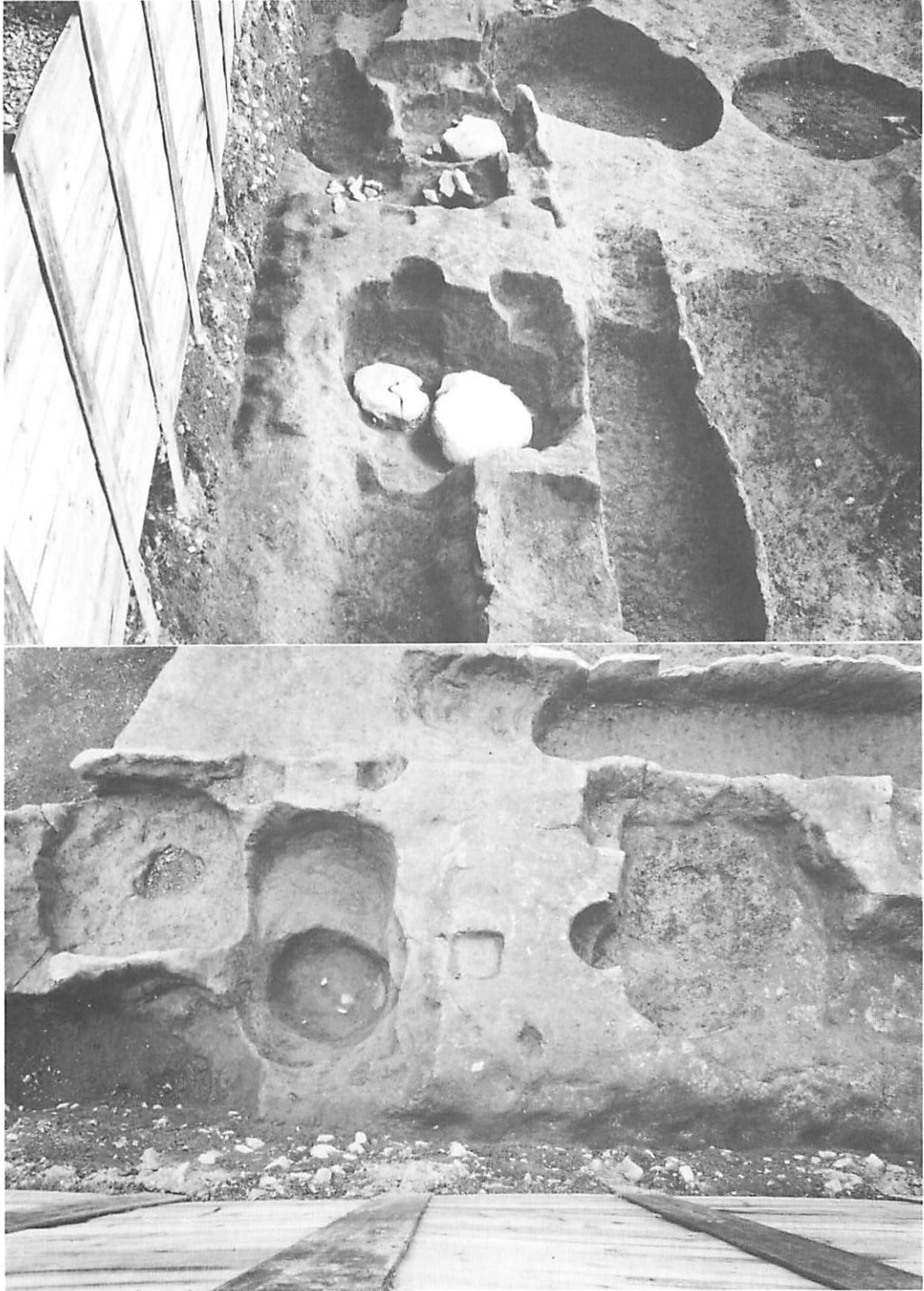
1 : S E 39 2 : S E 47 3 : S E 43 4 : S E 50



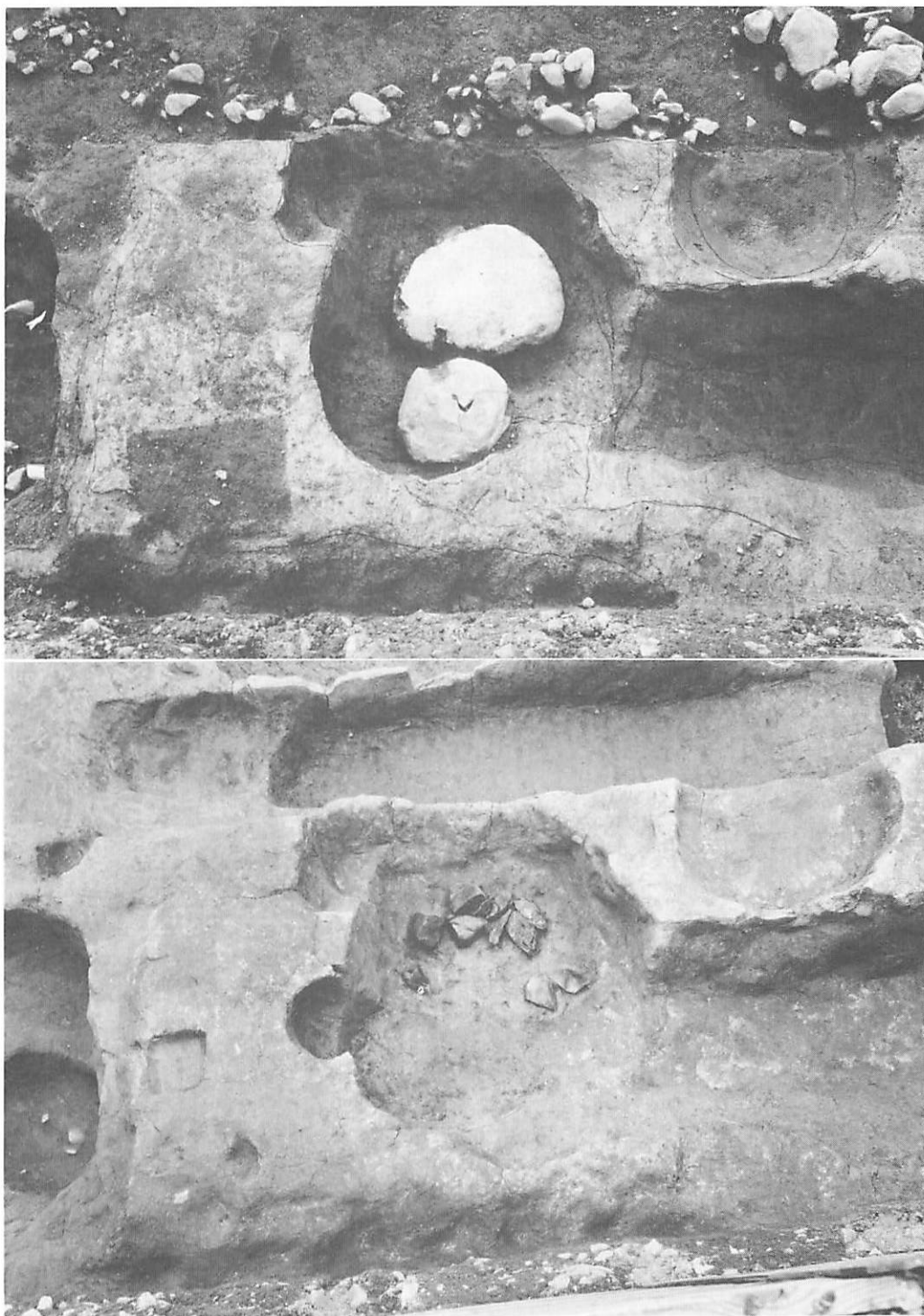
上：A区第2 検出面全景 下：S E 196



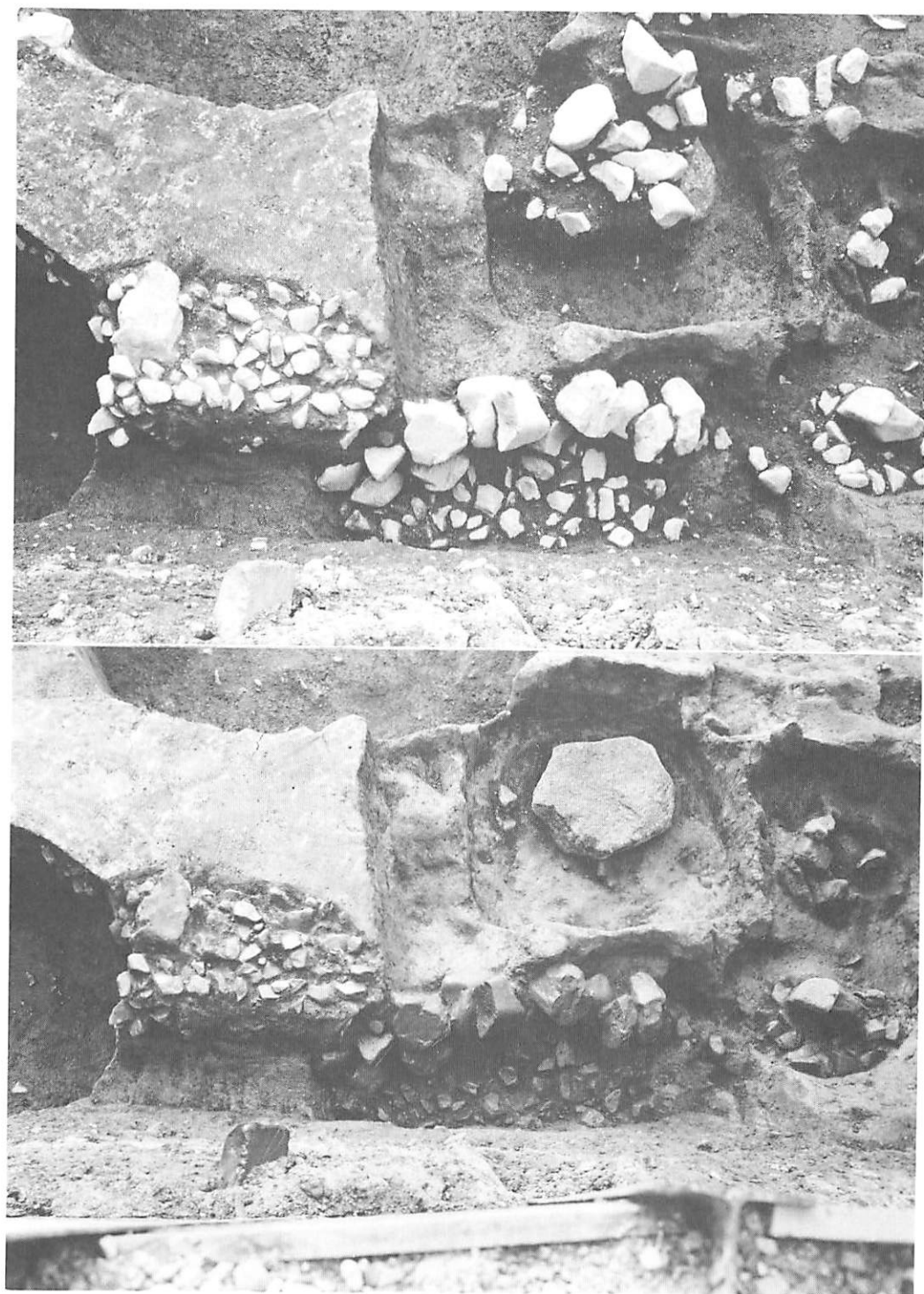
上：門跡検出状態(東から) 下：同 礎石露出状況



上：門跡検出状況(北から) 下：同 礎石取り外し後



上：門跡(S B65-a)礎石検出状態 下：同 根石検出状態



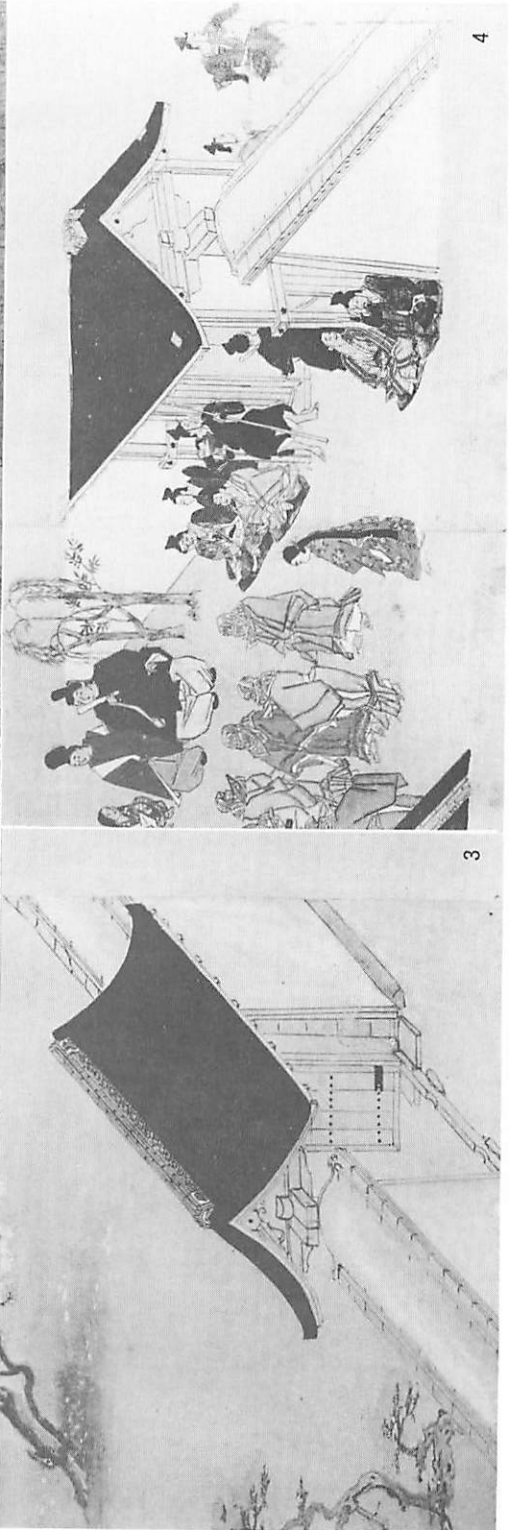
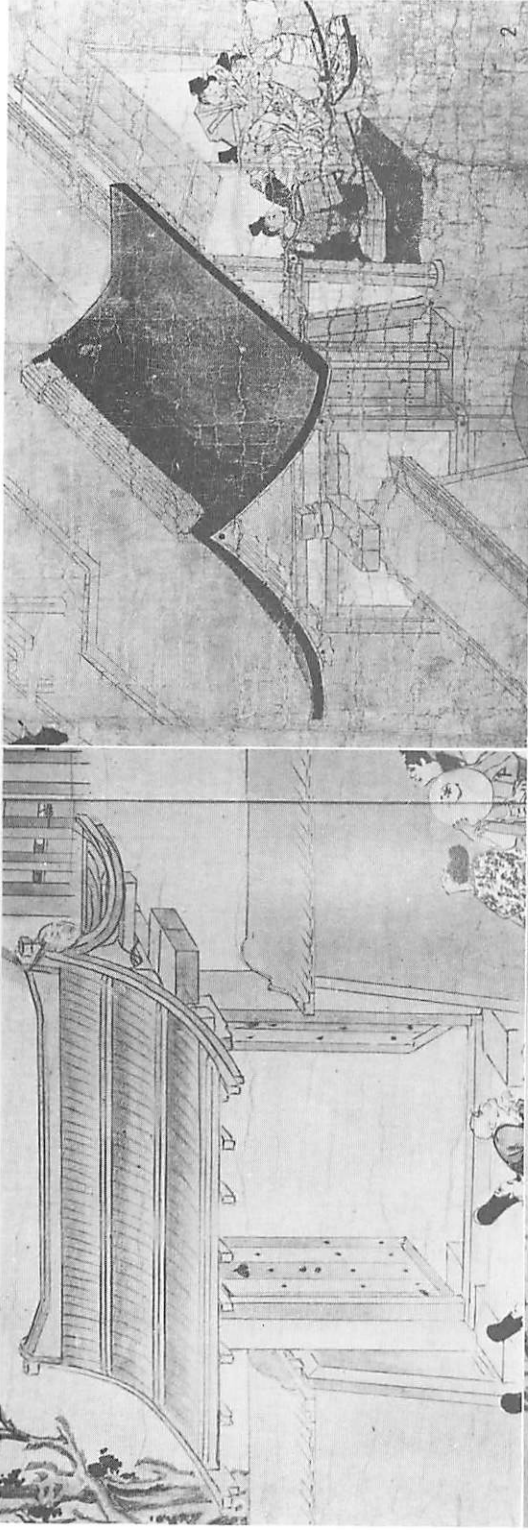
上：門跡(S B65-b)礎石検出状態 下：同 礎石露出状態



上：新薬師寺東門 下：法隆寺西園院上土門



上：十輪院四脚門 下：法隆寺宗源寺四脚門



1. 西獄舎 『平治物語絵詞(信西卷)』静嘉堂蔵・国宝
3. 大宮内府実宗邸 『法然上人絵詞(卷二)』知恩院蔵・国宝
2. 鳥羽殿 『西行物語絵巻』徳川黎明会蔵・重文
4. 押小路御所 『法然上人絵詞(卷九)』知恩院蔵・国宝



上：S K79遺物検出状態 下：S K114遺物検出状態



上：SK70上層遺物検出状態 下：同 下層遺物検出状態



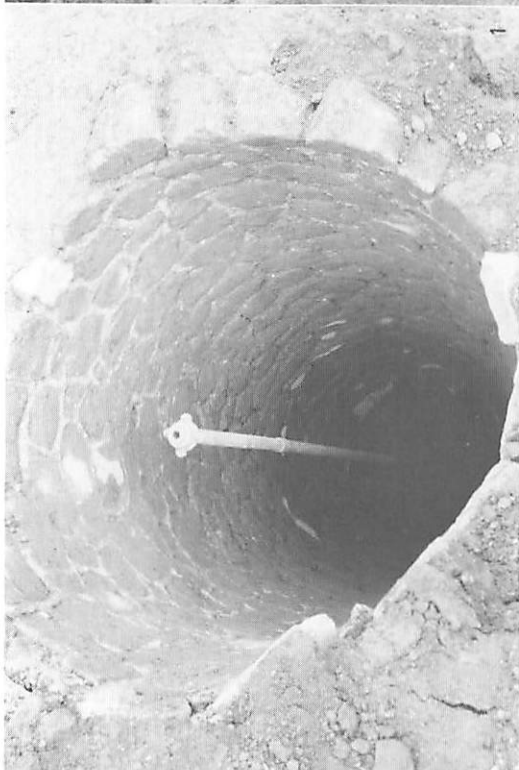
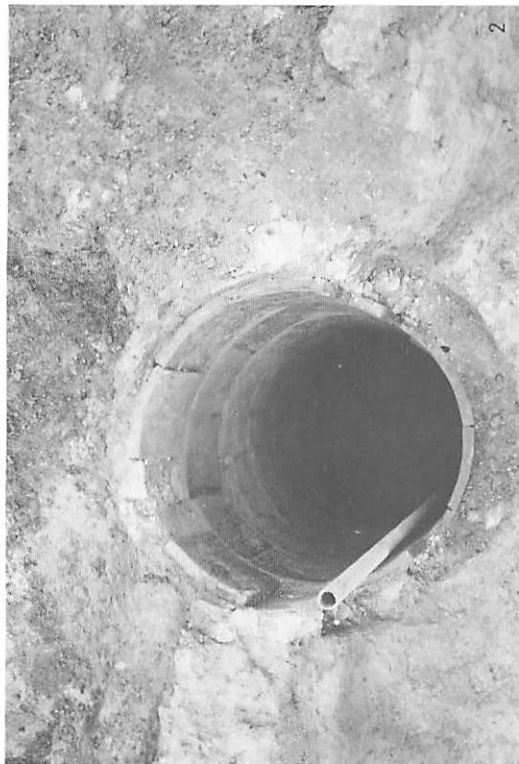
上：S K175遺物検出状態 下：S X118集石検出状態



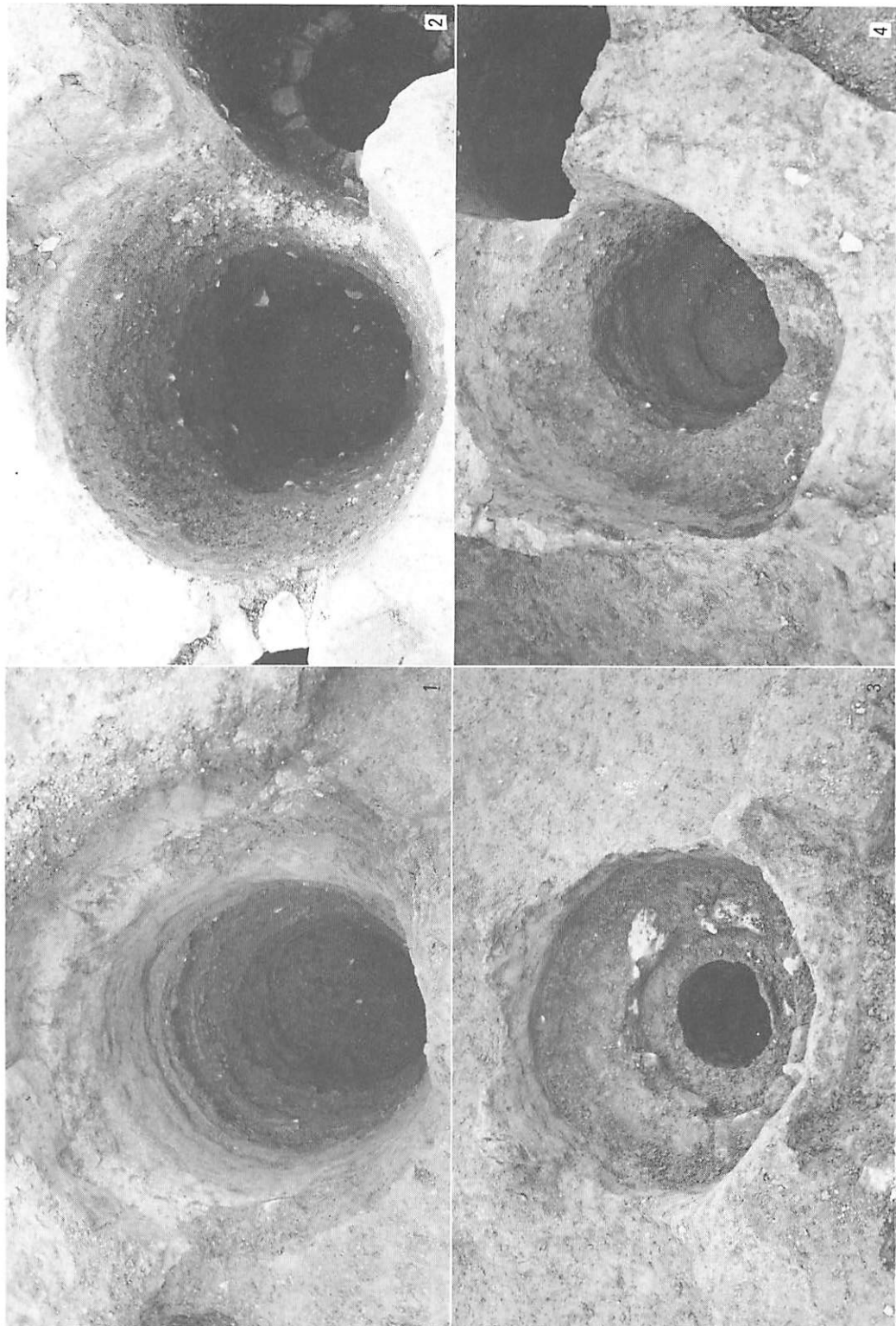
上：B区全景 東から 下：B区全景 西から



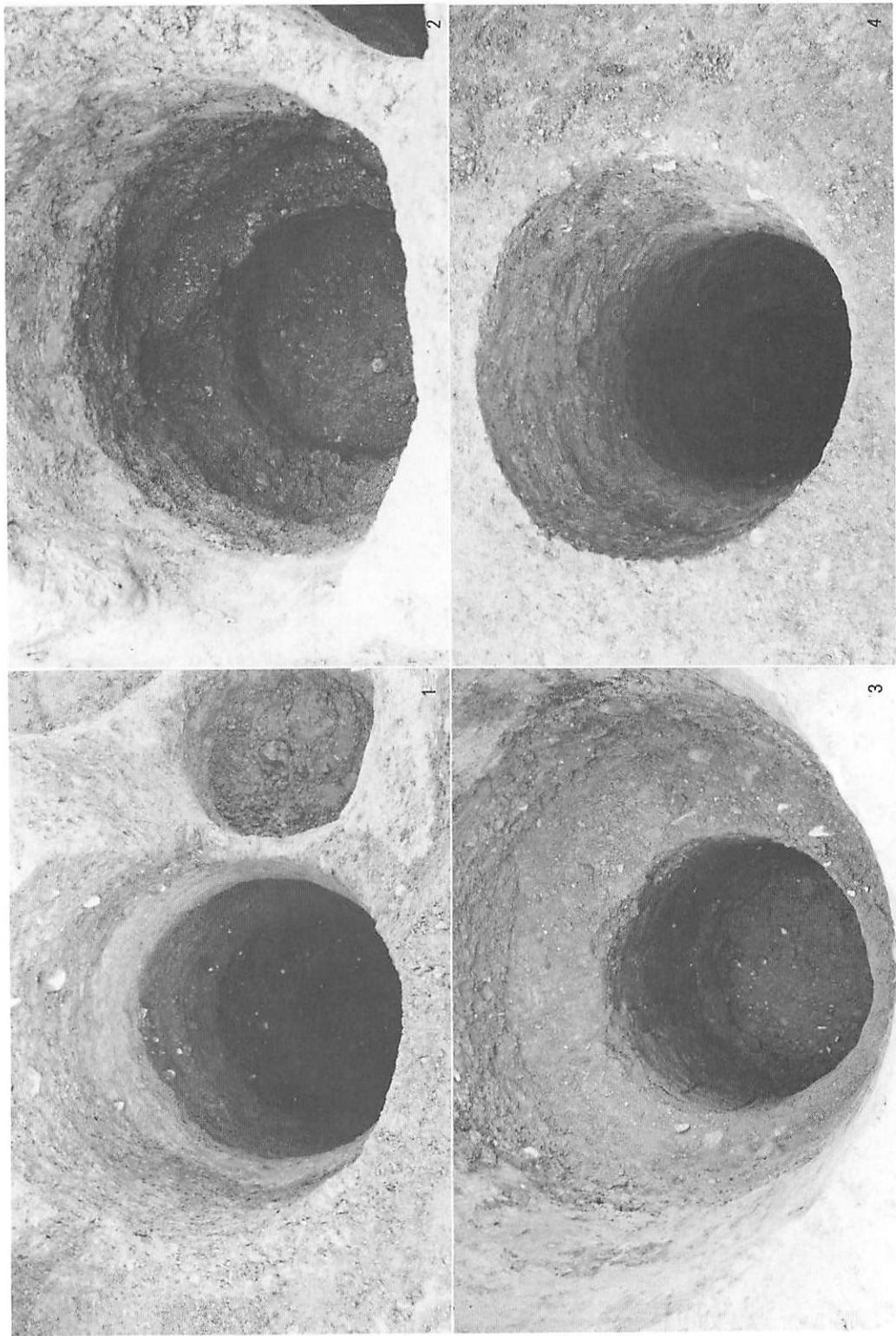
上 : S B 207 下 : S K 256



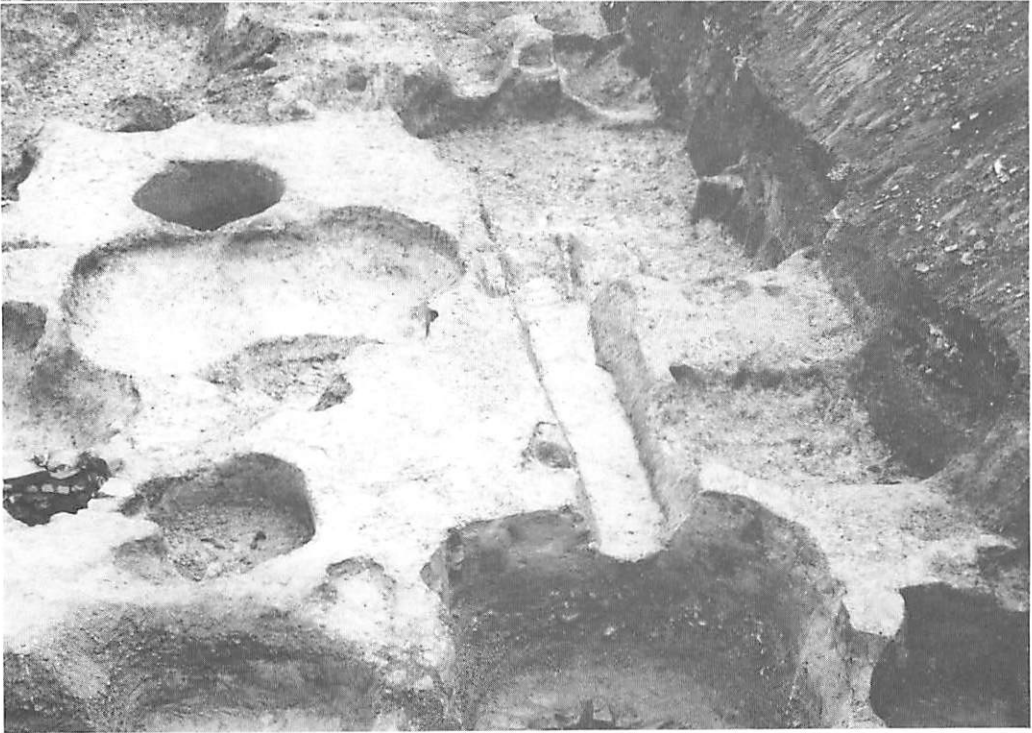
1 : S E 230 2 : S E 204 3 : S E 205 4 : S E 206



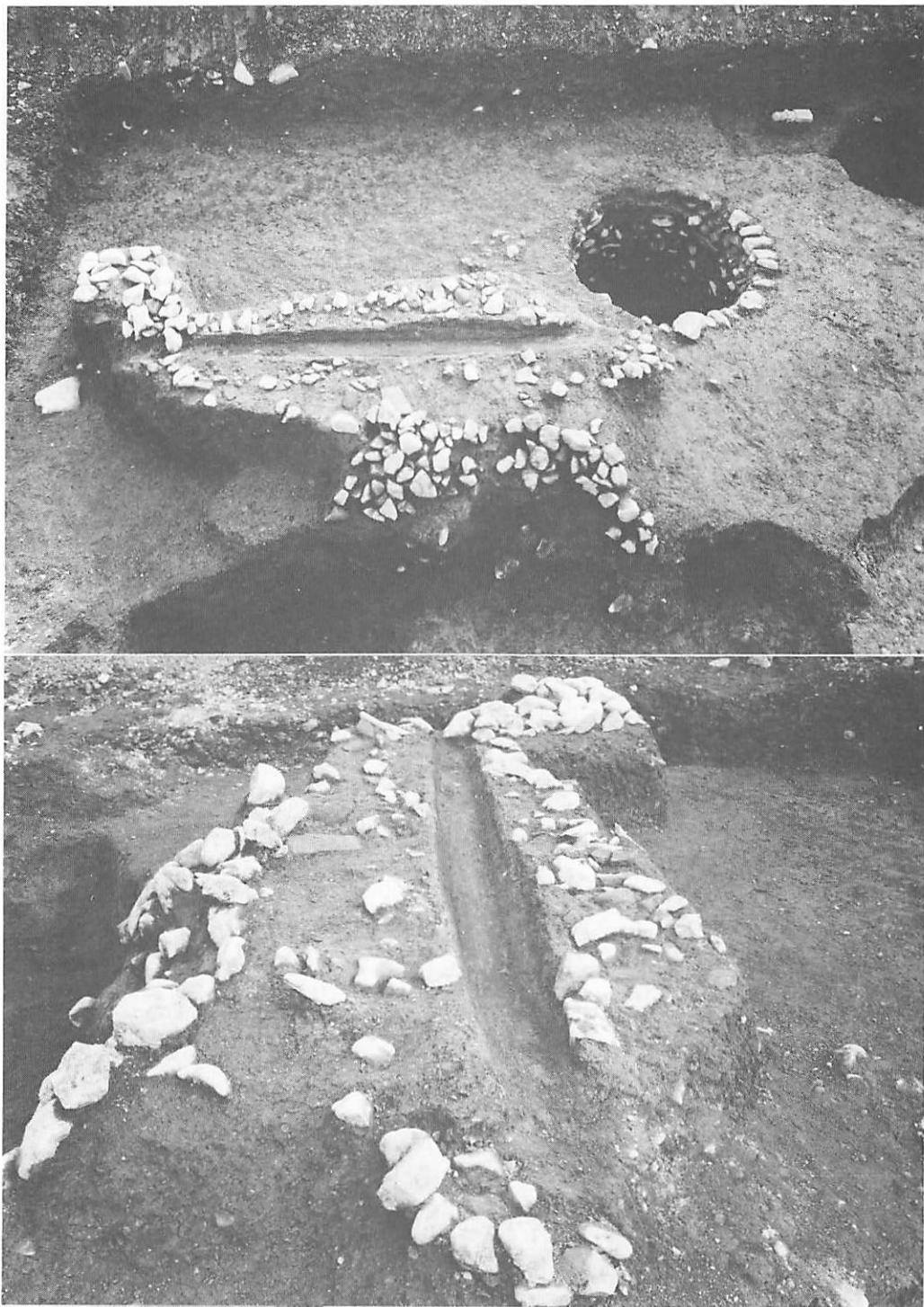
1 : S E 255 2 : S E 203 3 : S E 222 4 : S E 254



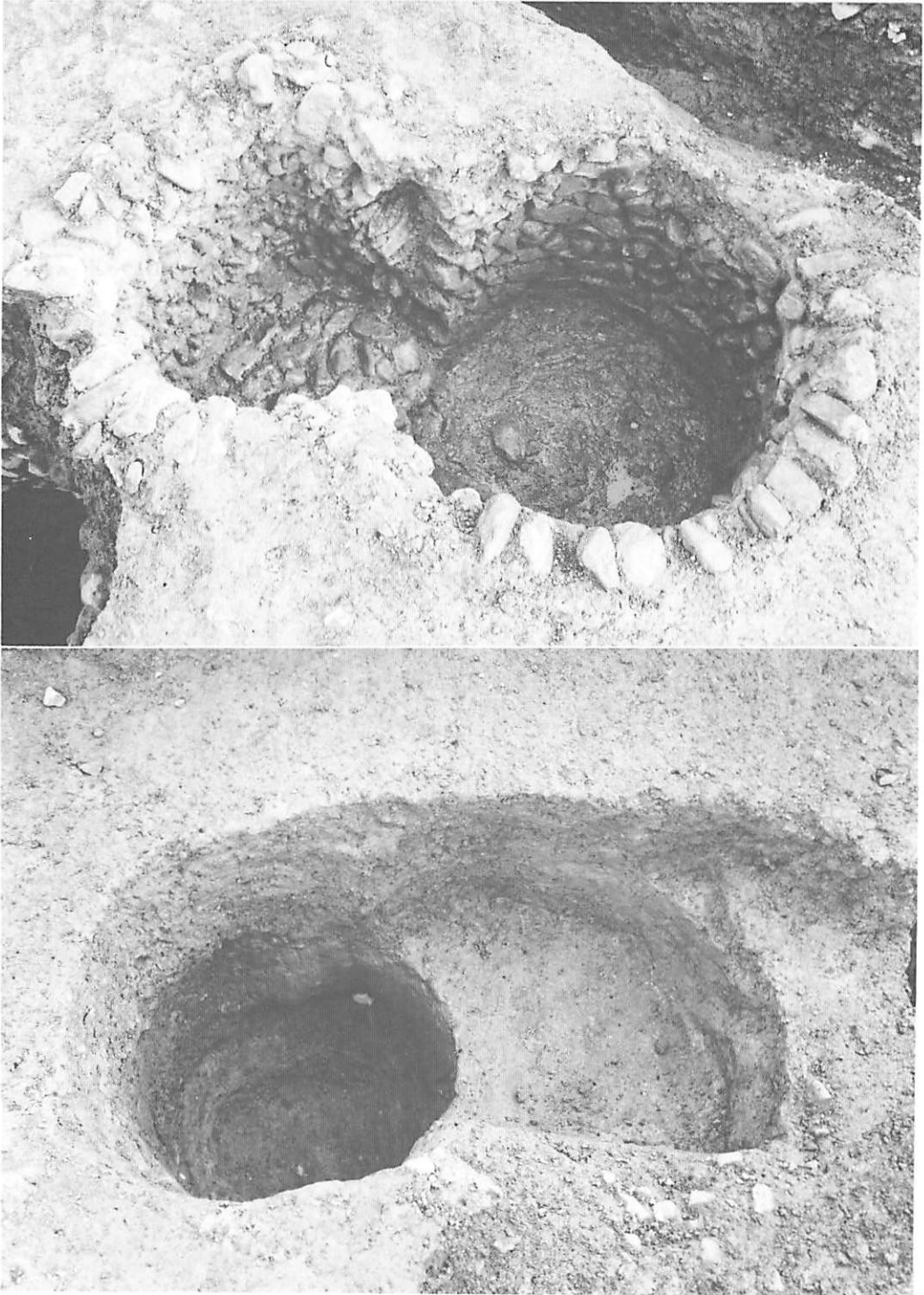
1 : S E 209 2 : S E 214 3 : S E 262 4 : S E 204



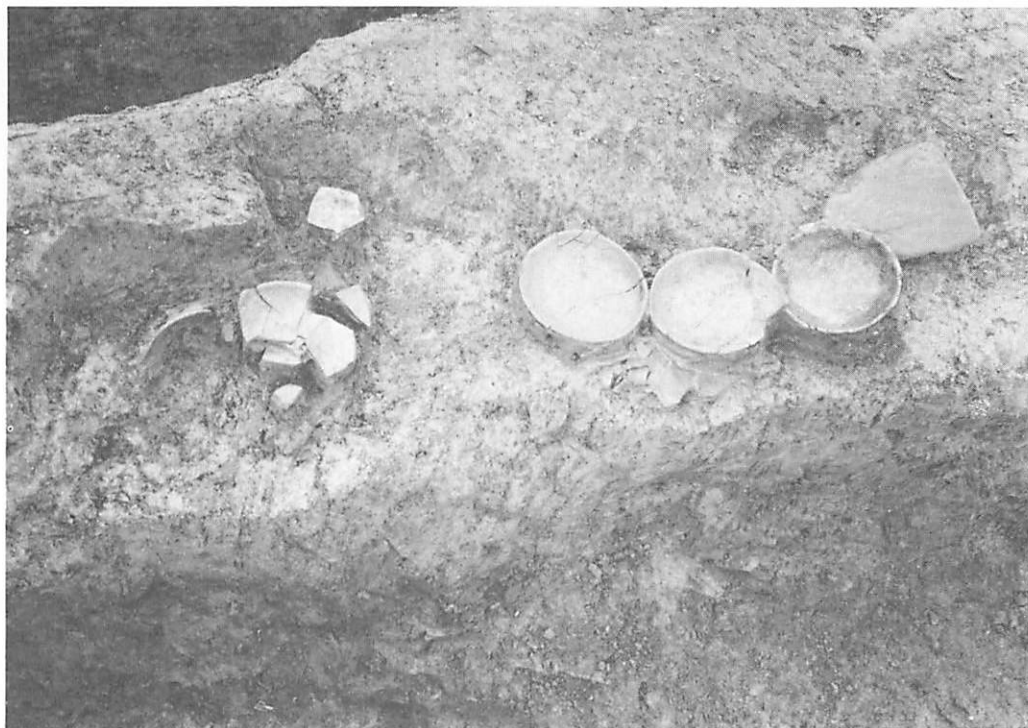
上：C区全景(東から) 下：S D 382(東から)



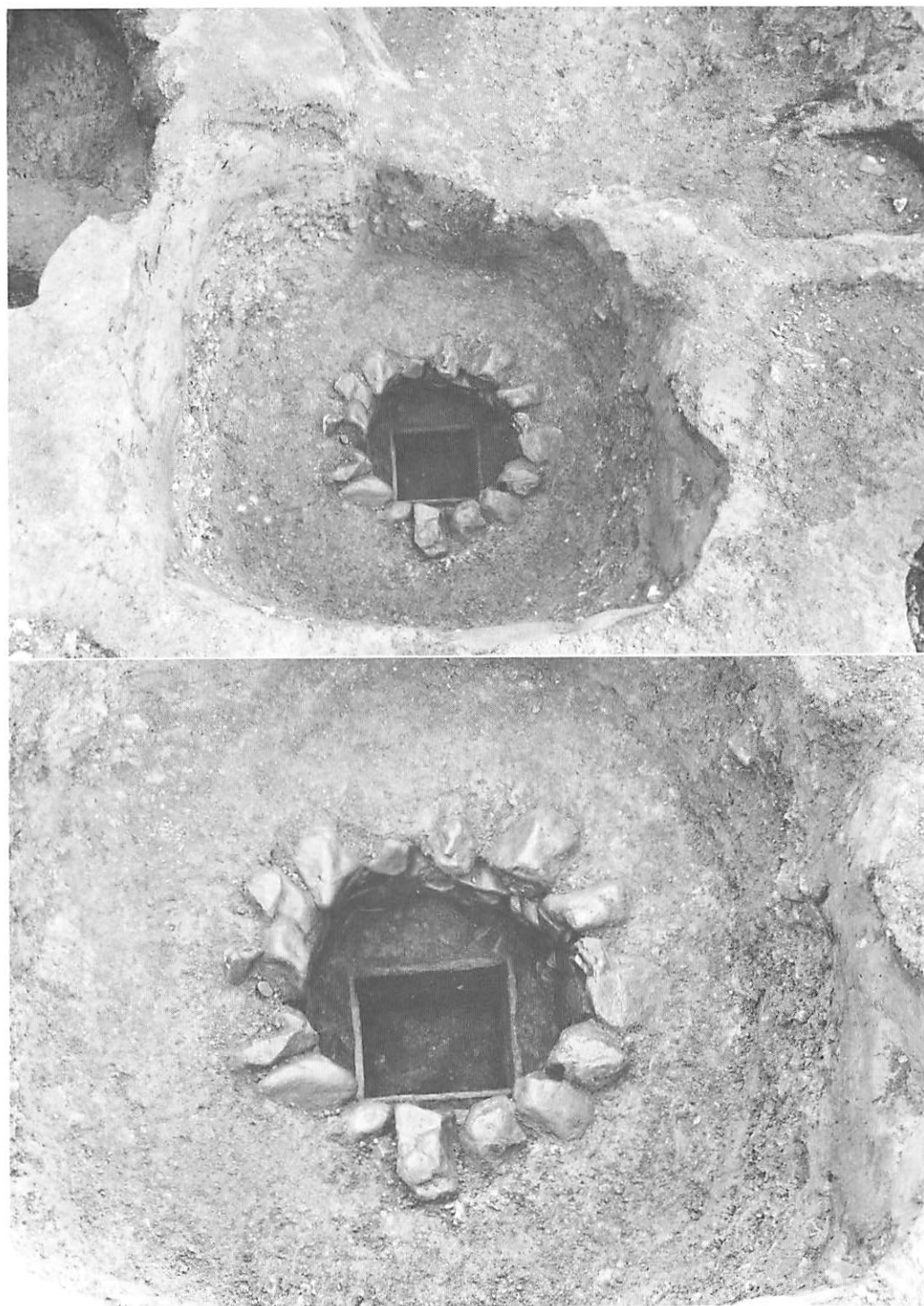
溝状遺構(S X 339)集石



上 : S K 347・364 下 : S K 363



上：S K 396 下：S K 353・354



S E347 上：全景(東から) 下：細部



2



1

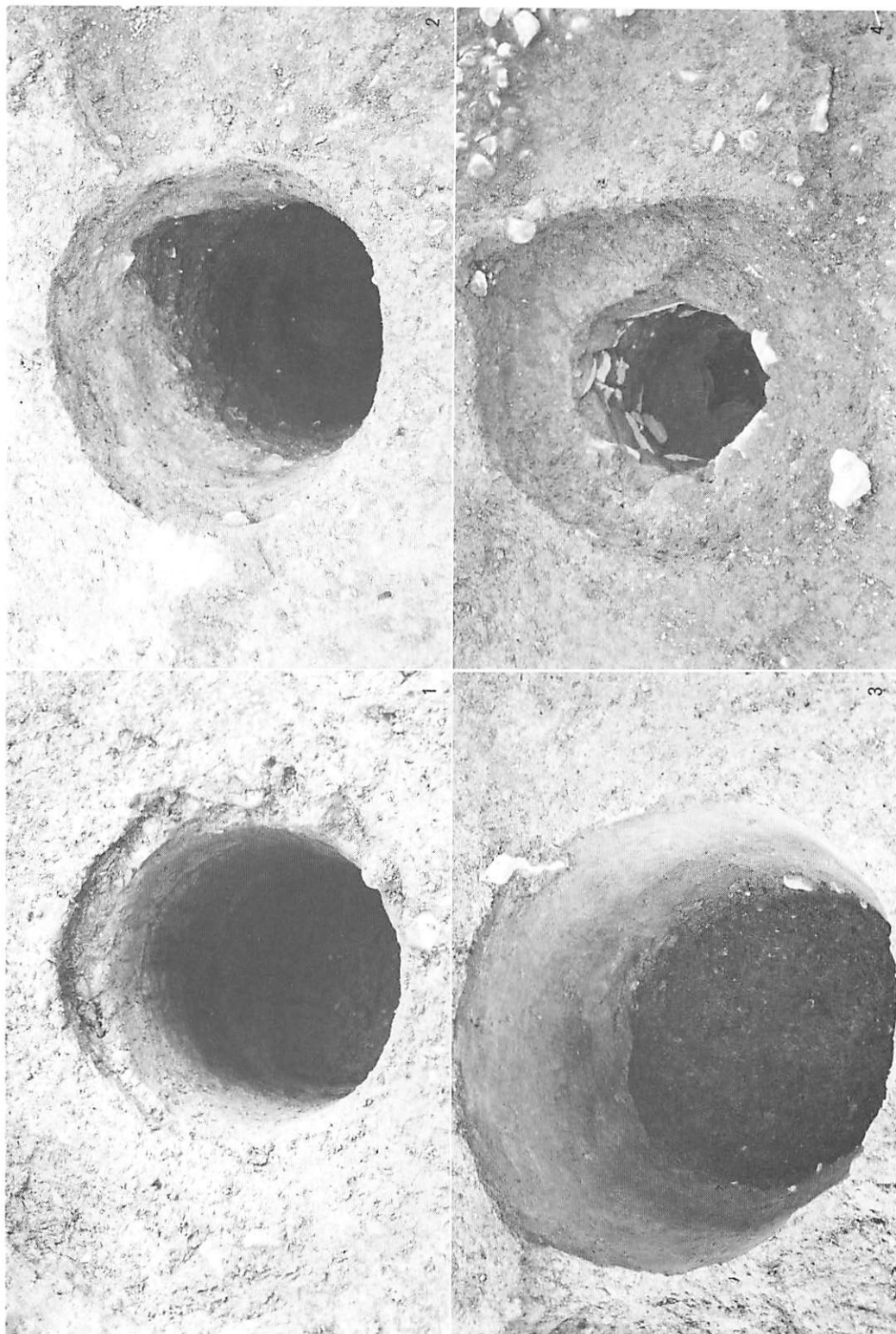


4



3

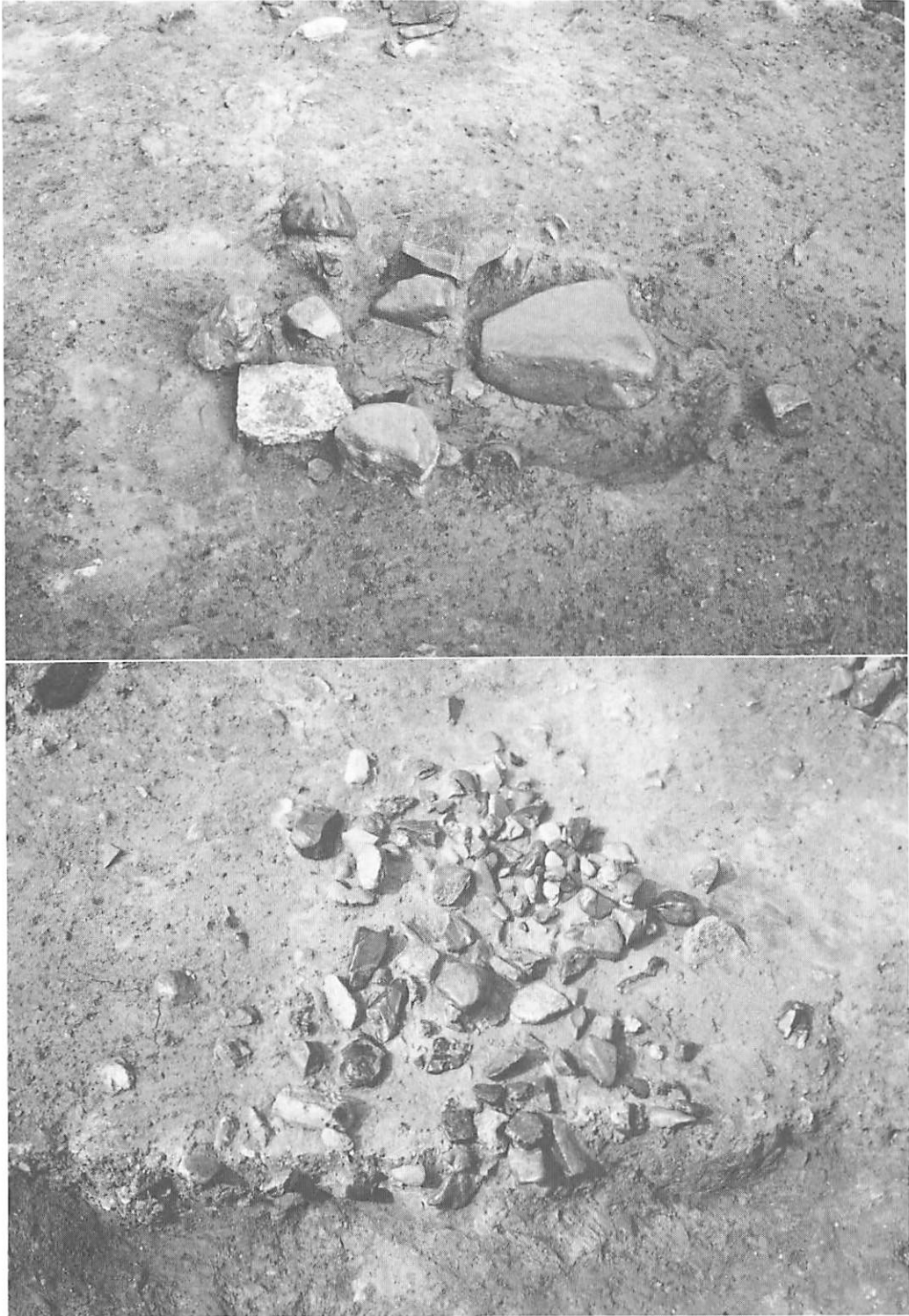
1 : S E 309 2 : S E 365 3 : S E 306 4 : S K 375



1 : S E 401 2 : S E 330 3 : S E 371 4 : S E 305



上：A区墓域全景(西から) 下：S D45溝(西から)



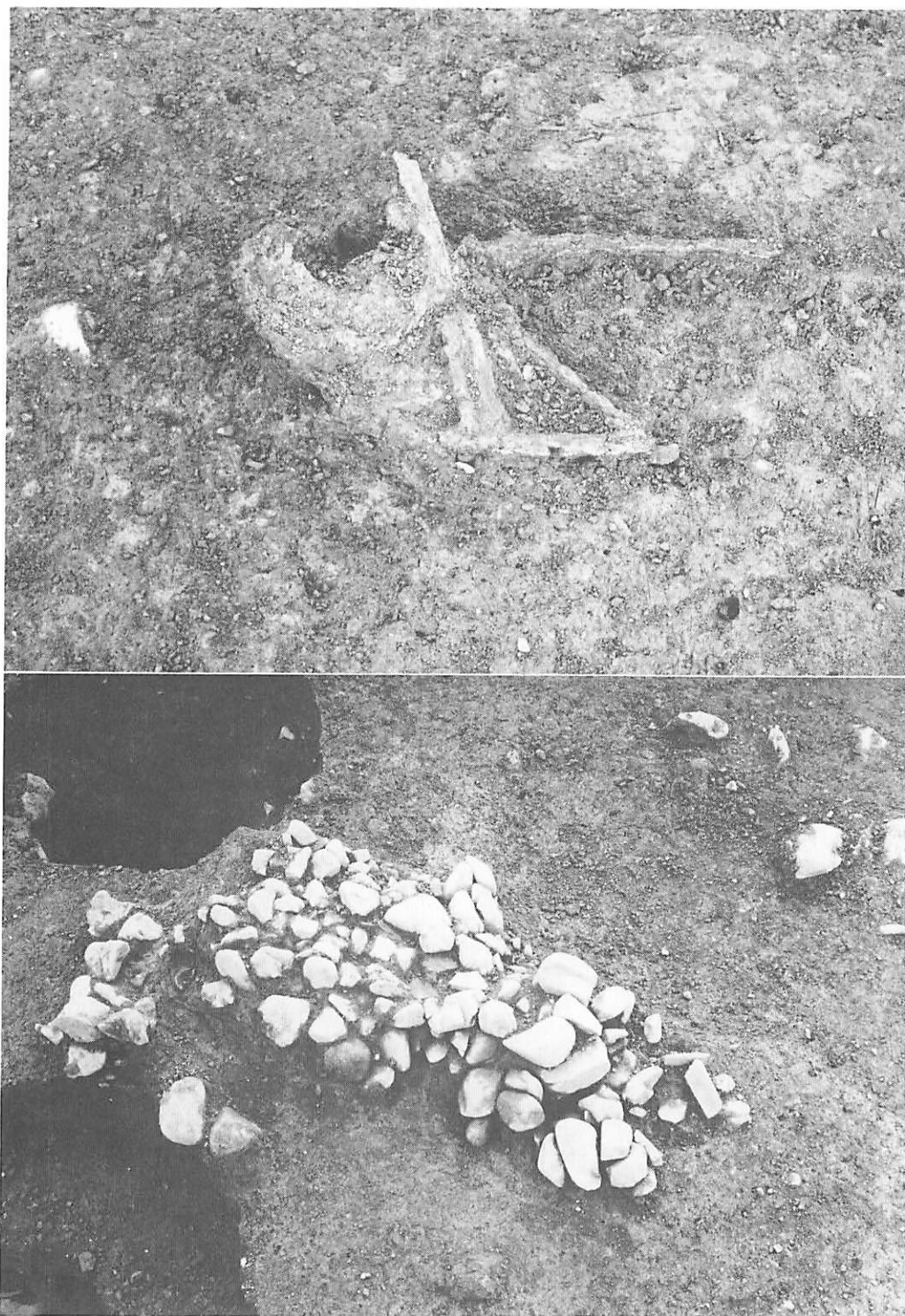
集石墓 上：S X13 下：S X14



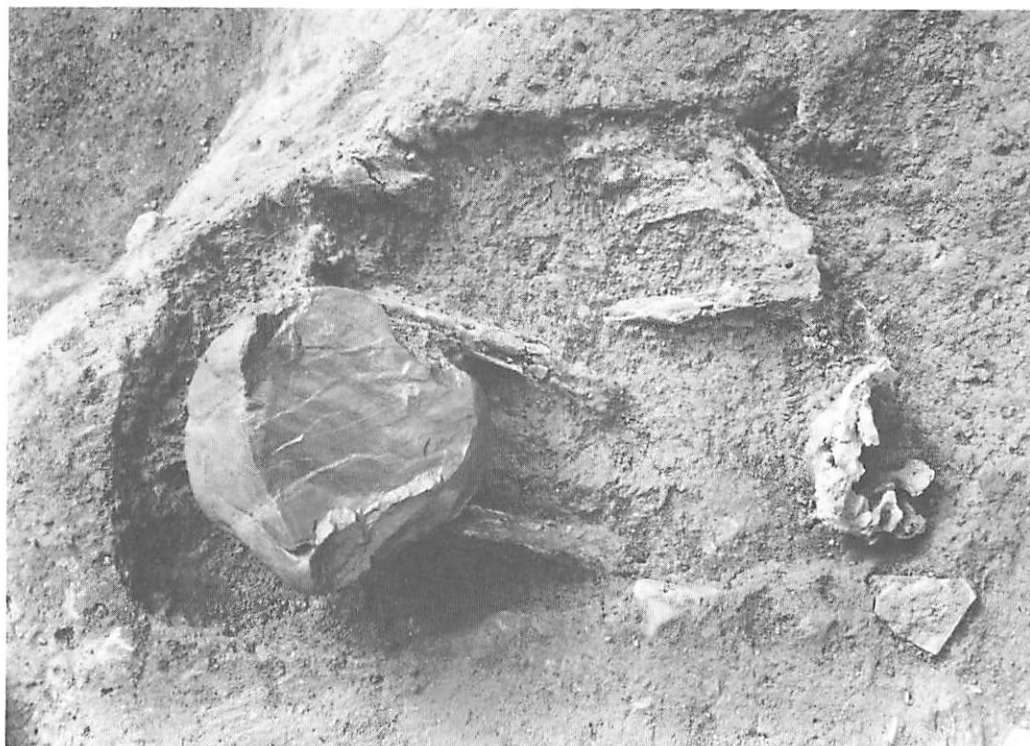
集石墓 上：S X19断面 下：S X19人骨



集石墓 上：S X15平面 下：S X15断面



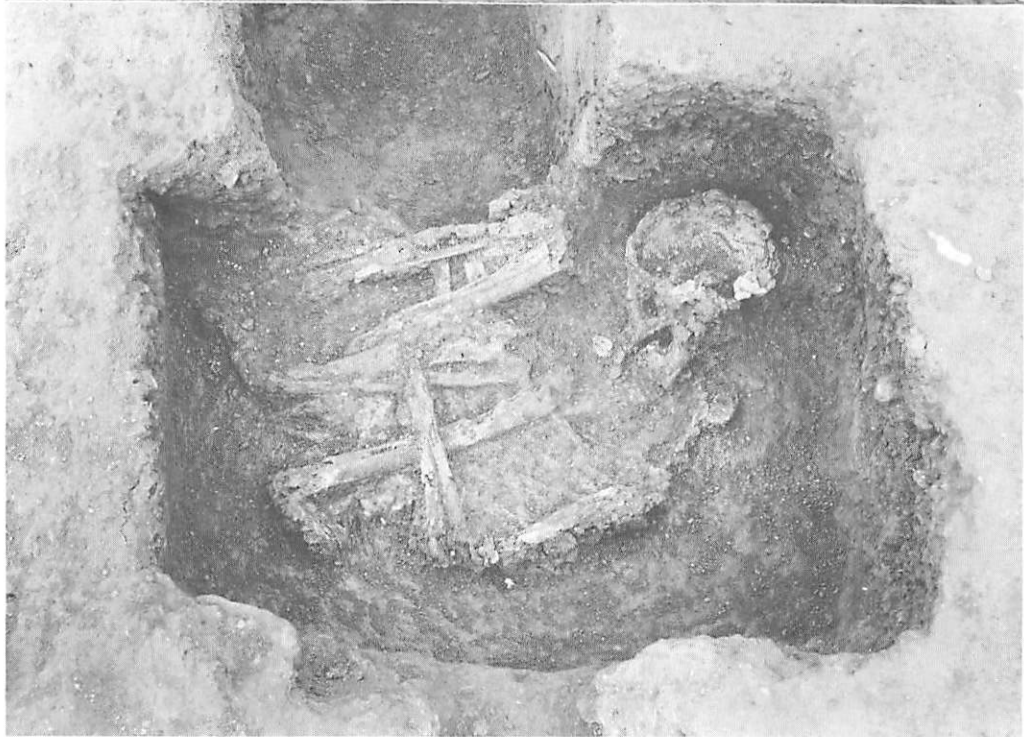
集石墓 上：S X322 下：S X337



土壙墓 S X54



土坑墓 上：S X80 下：S X82



土墳墓 上：S X 88 下：S X 90



土墳墓 上：S X 131 下：S X 138



土壙墓 上：S X183 下：竹製敷物 矢印は珠数玉



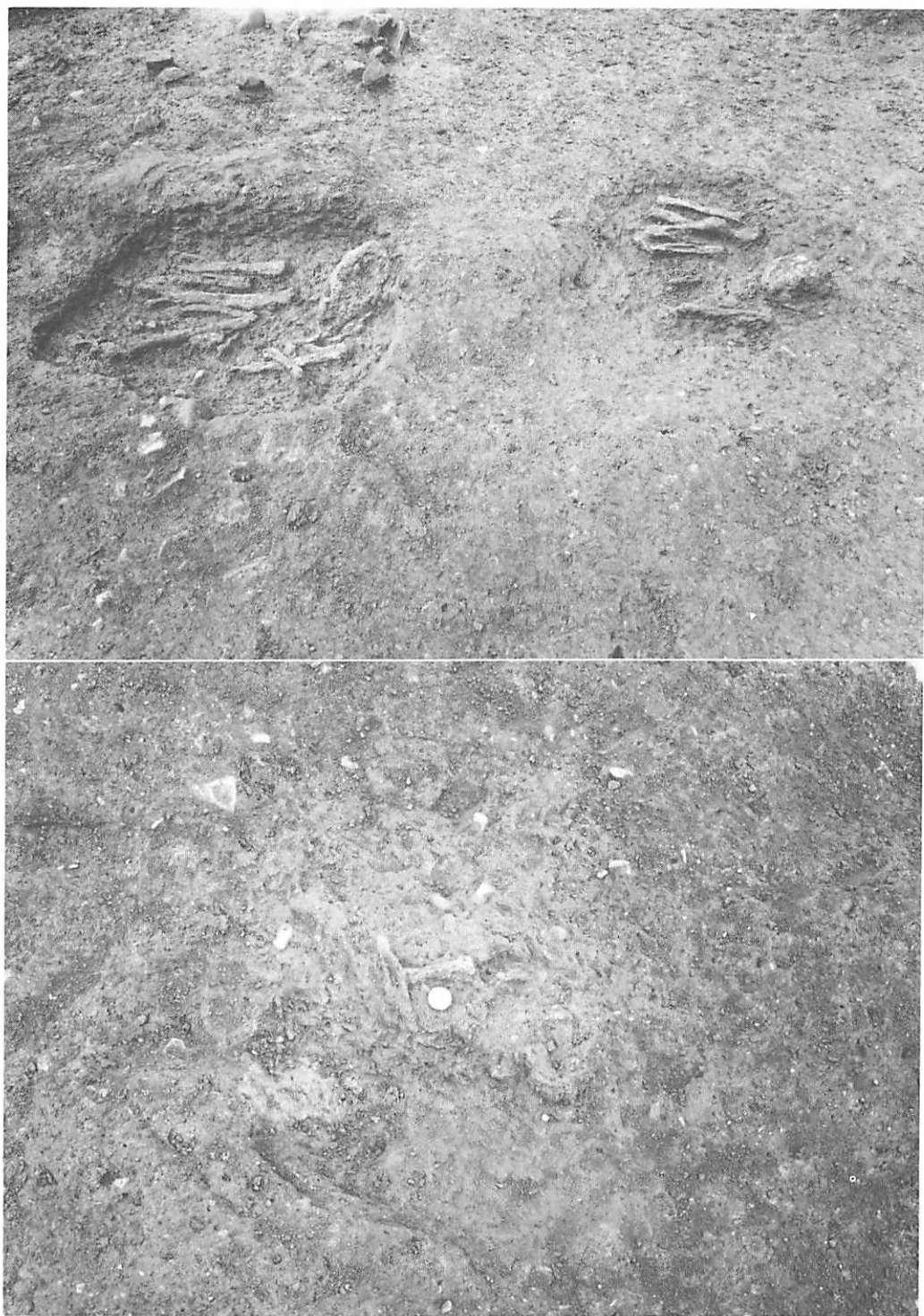
土壙墓 上：S X 140 下：S X 311



土壙墓 上：S X 312 下：S X 315



土壙墓 上：S X319 下：S X321



土坑墓 上：S X 319 · 321 下：S X 324



土城墓 上：S X 325 下：S X 315 • 325



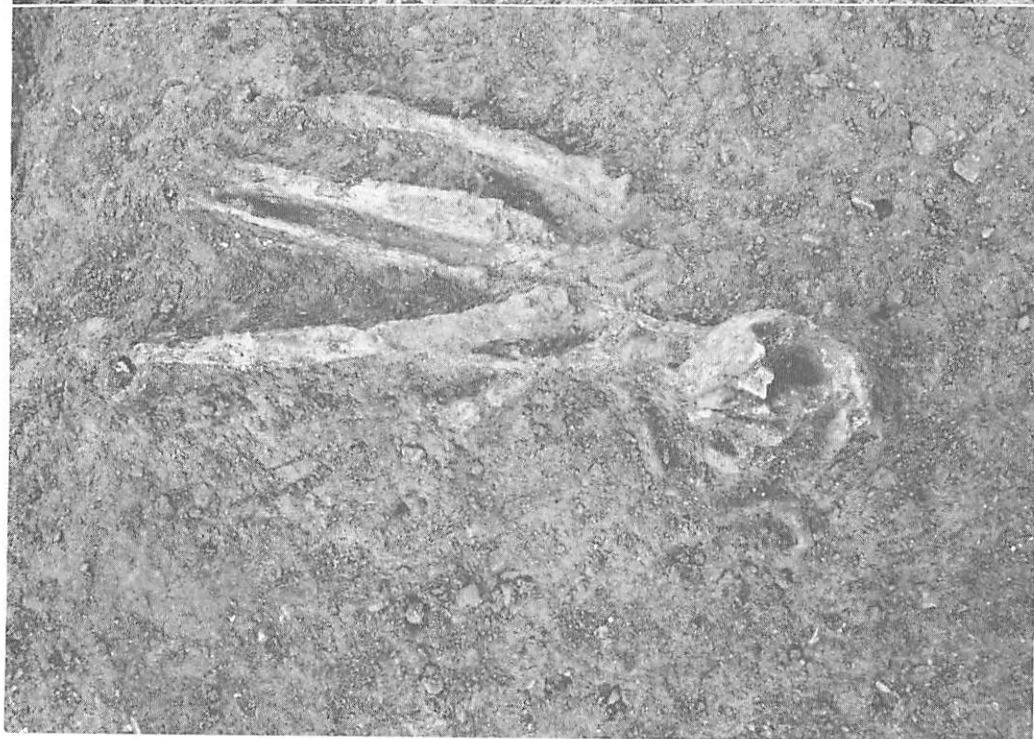
土城墓 上：S X 326 下：S X 332



土壙墓 上：S X 356 下：S X 359



土墳墓 上：S X 360 下：S X 315・360



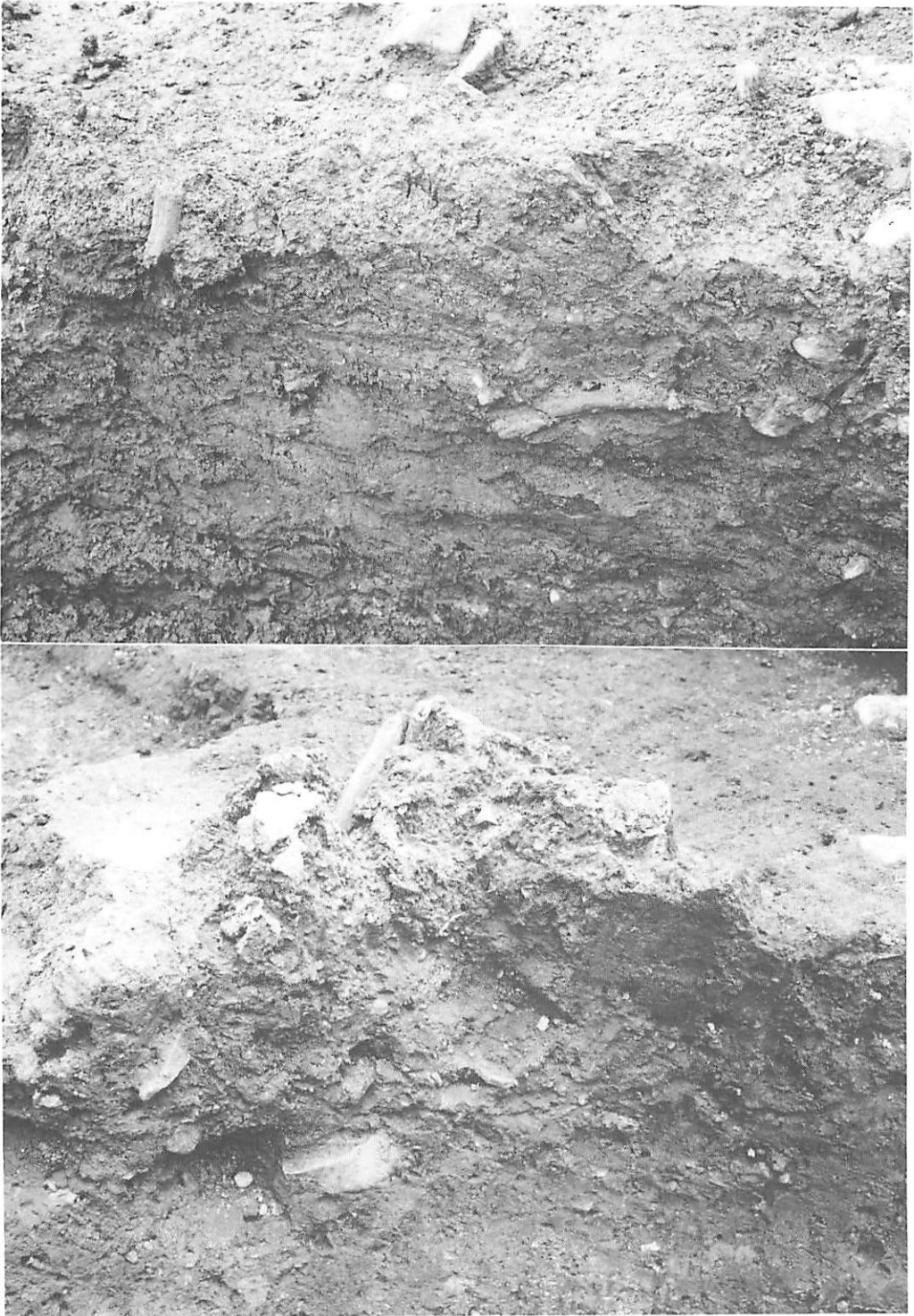
土城墓 上：S X 370 下：S X 384



土坑墓 上：S X 387 下：S X 399



上：火葬墓 SX372 下：二次堆積の人骨 SD45中



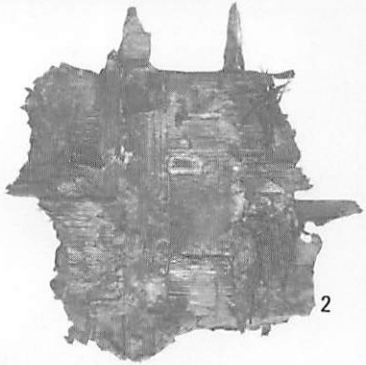
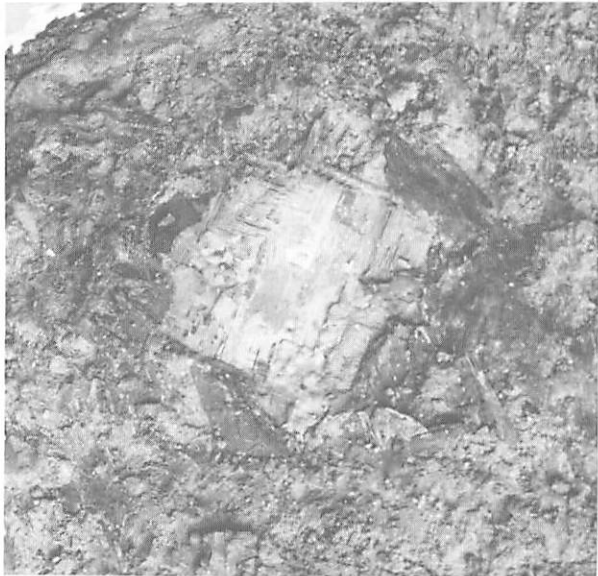
二次堆積の人骨 上：S X 336 下：S X 81



上：二次堆積の人骨 S X 334 下：犬の骨 S X 188



S X 54 人骨取上げ作業



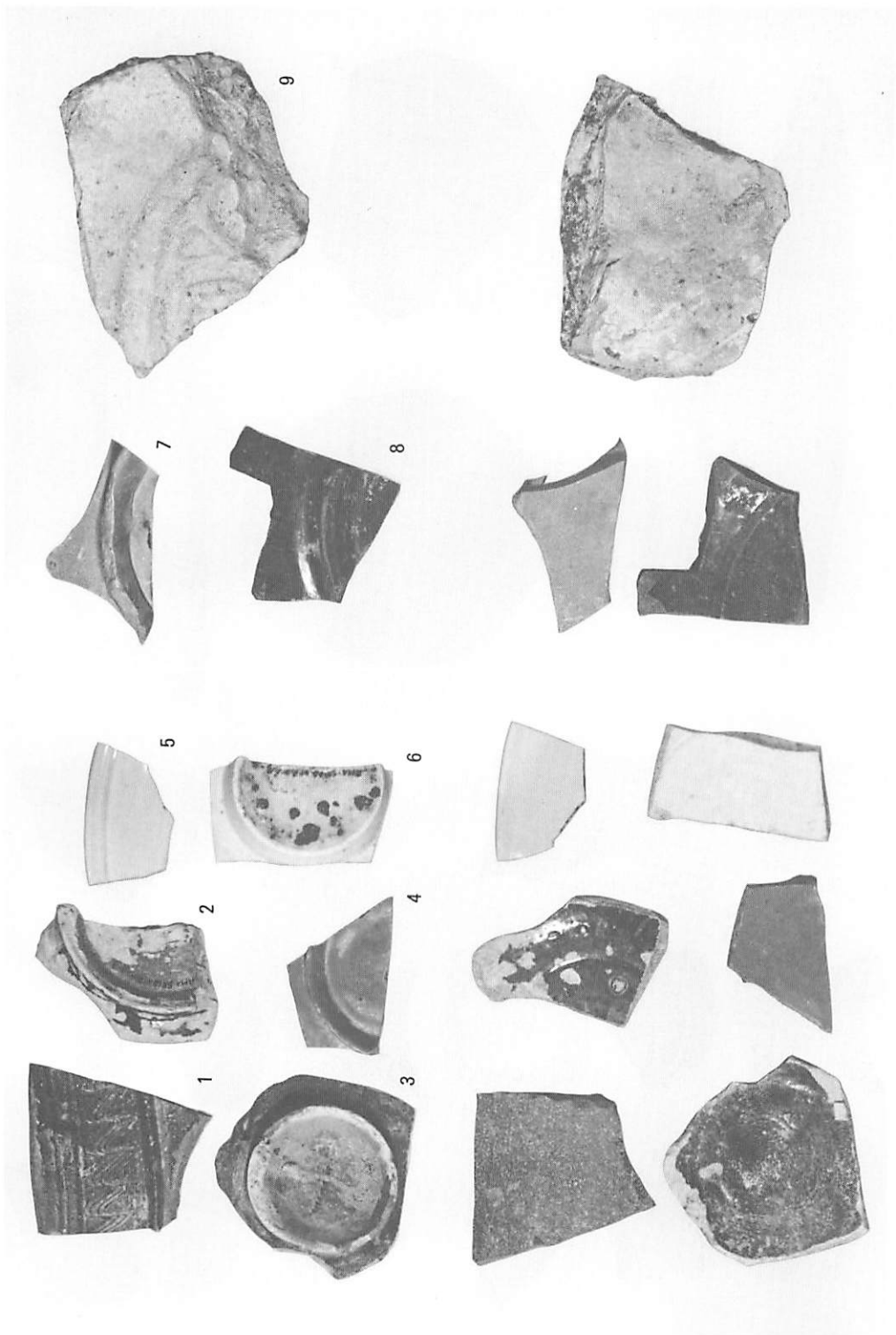
1

2

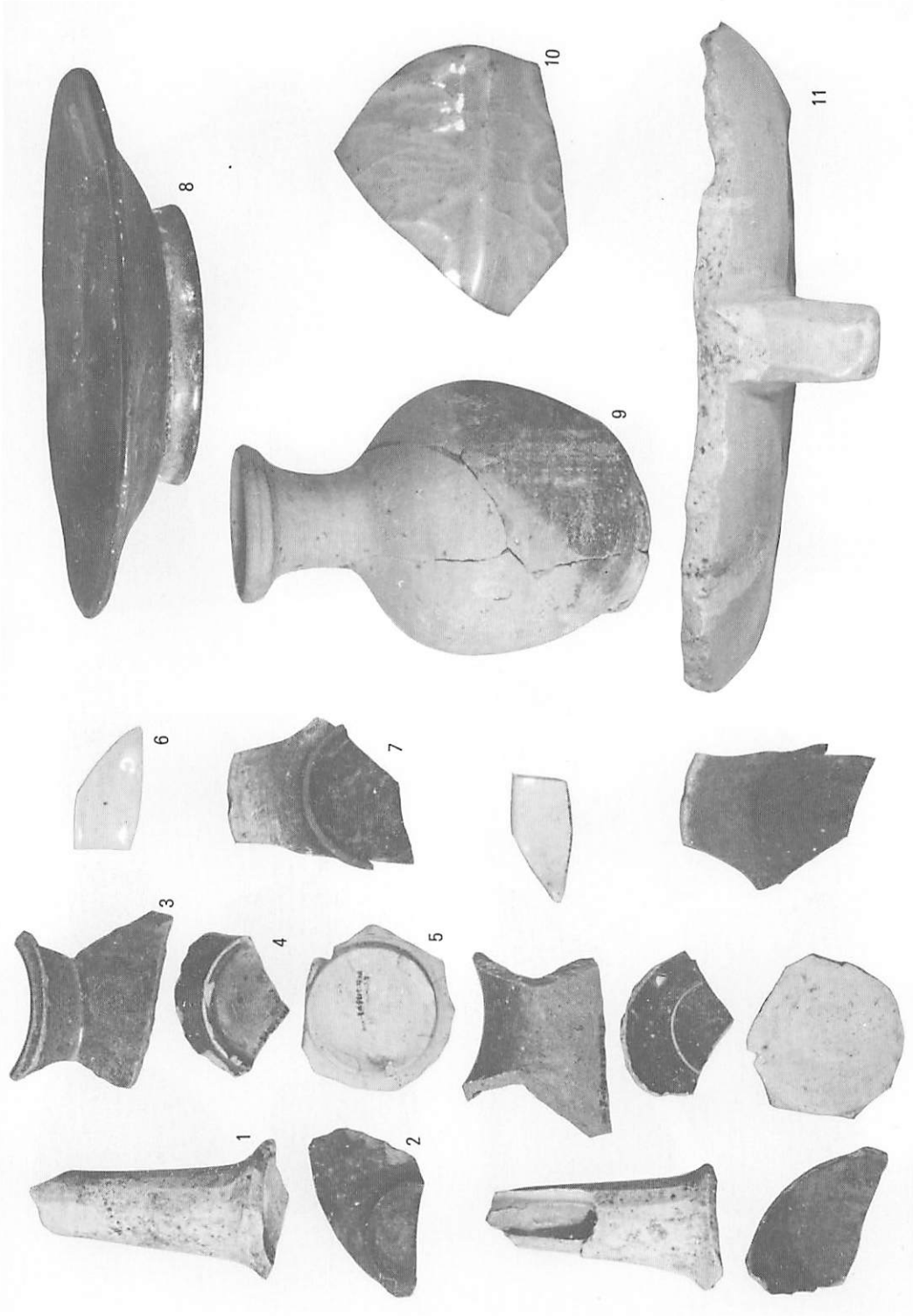
3

4

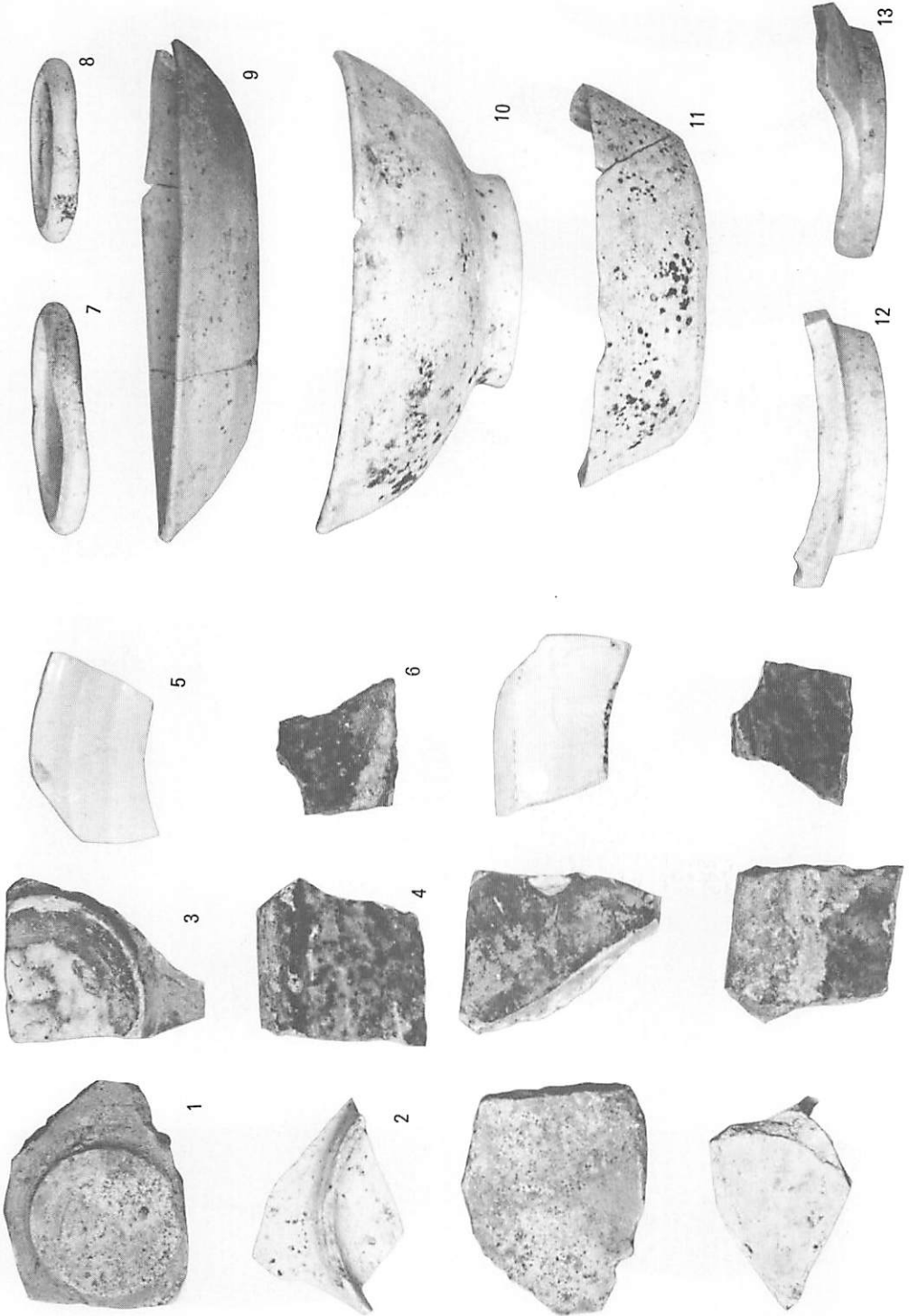
上：五輪石出土状態 1・2：S X 399出土竹製敷物 3：S X 183出土珠数玉
4：S X 356出土ビーズ玉



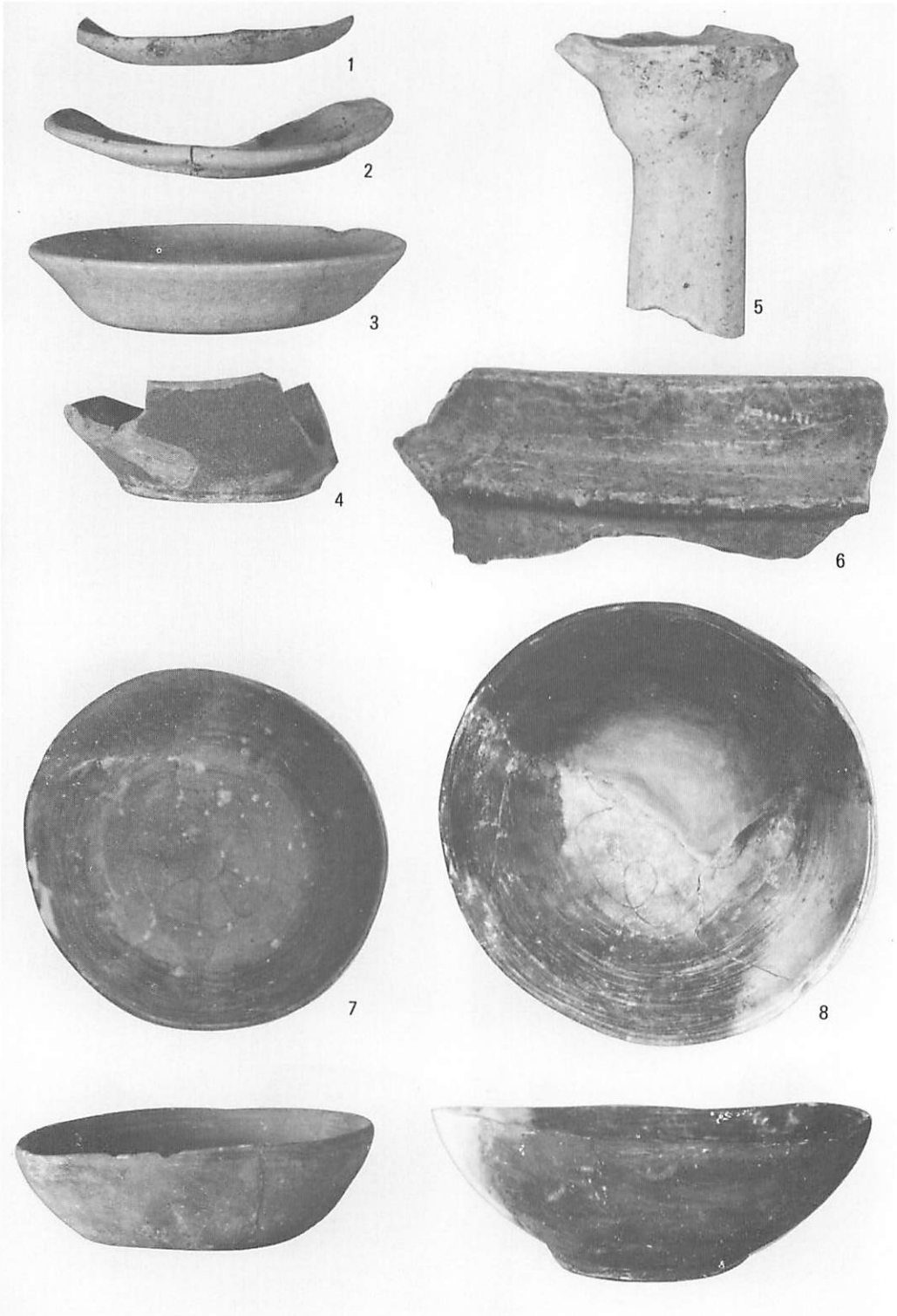
S B68・69(1~6), S B65-b(7~9)出土遺物



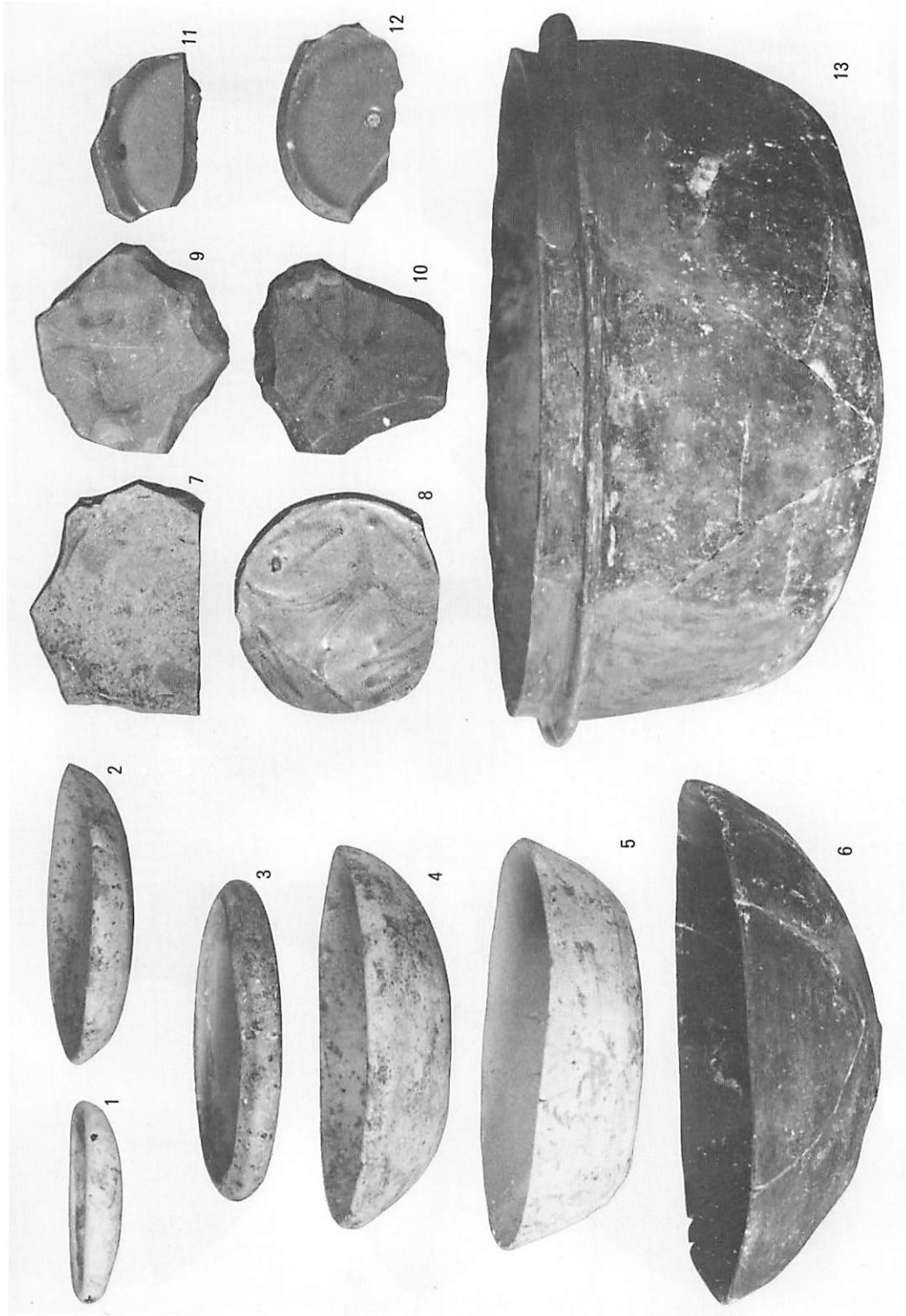
左：S XI71出土遺物 右：綠釉陶器・須惠器・青白磁



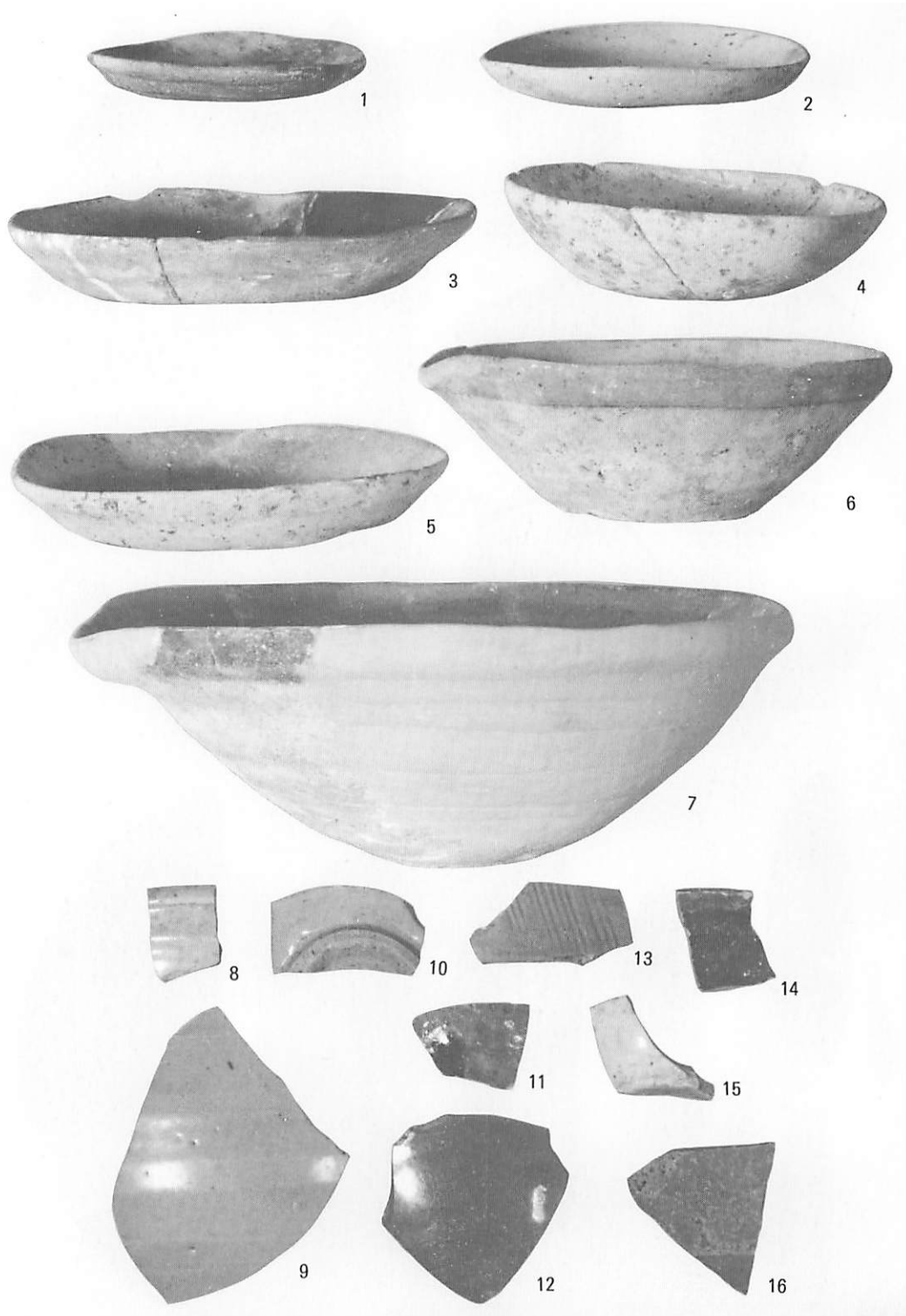
SK71(1~6)・SK79(7~13)出土遺物



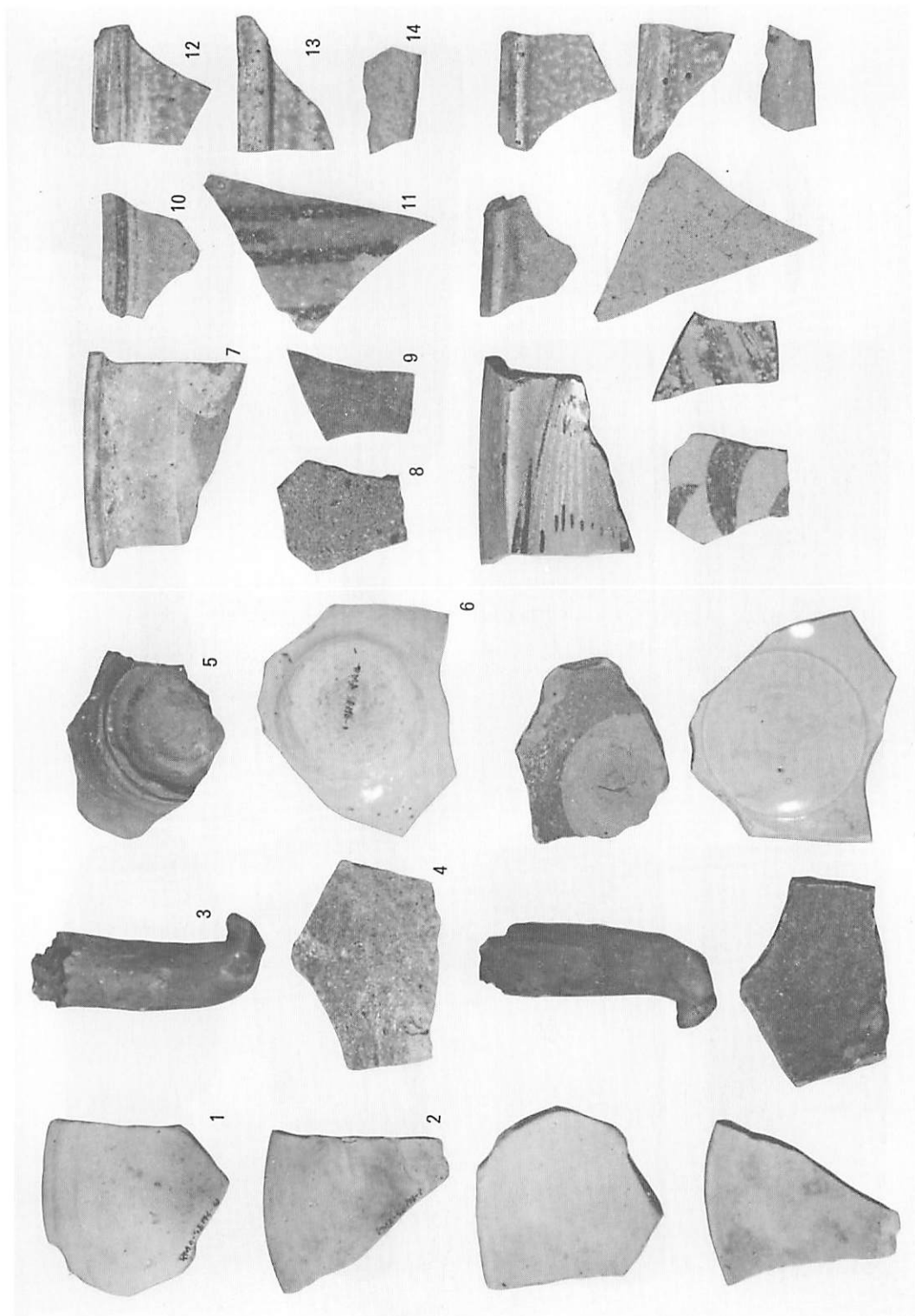
S K71出土遺物



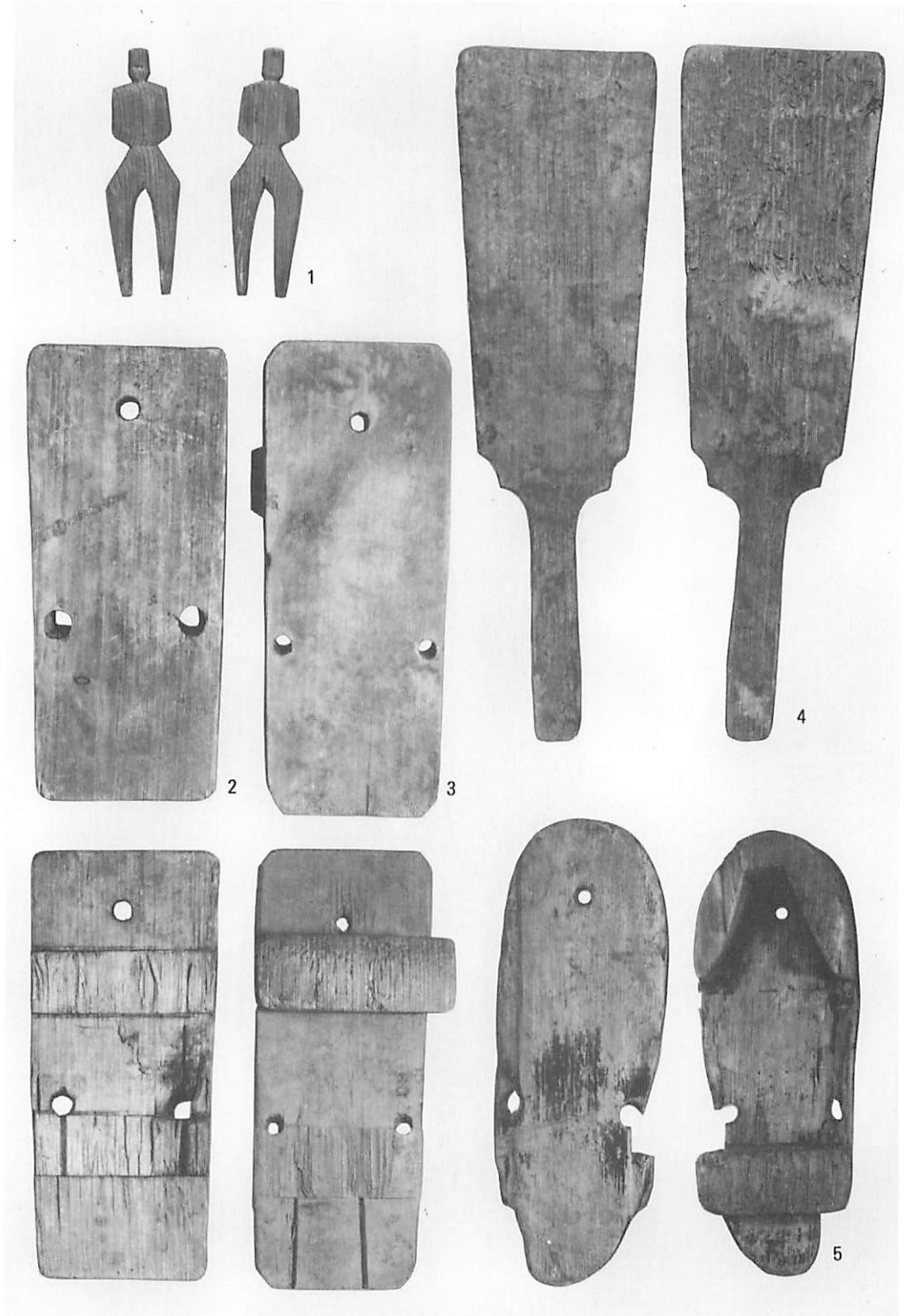
S K 101出土遺物(1~6)・S X 188出土遺物(7~13)



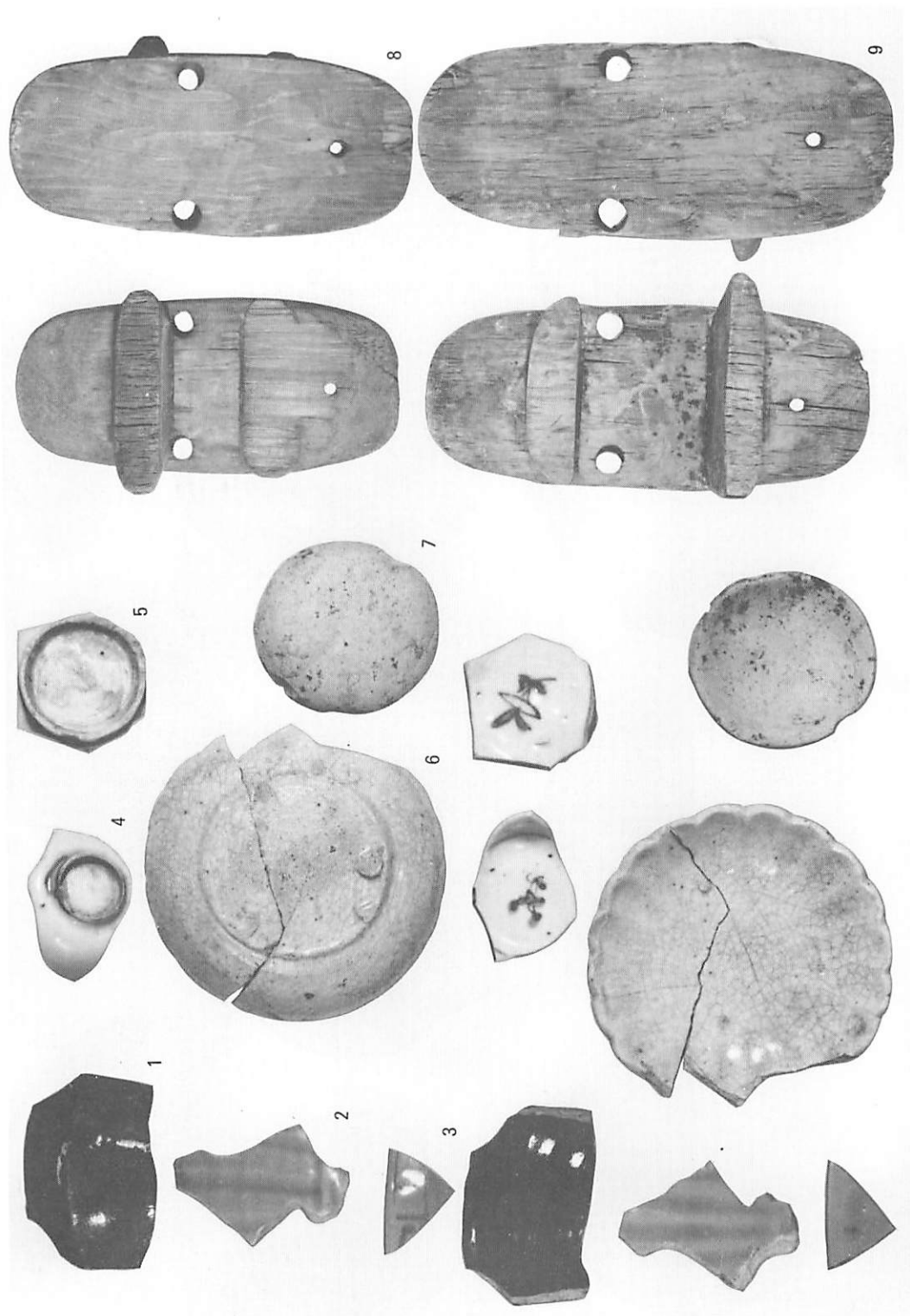
S K70出土遺物



S E 196出土遺物(1～6)・磁灶窯陶器(7～14)



S K 327出土木製品





出土軒丸瓦(1)



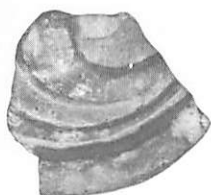
1



2



3



4



5

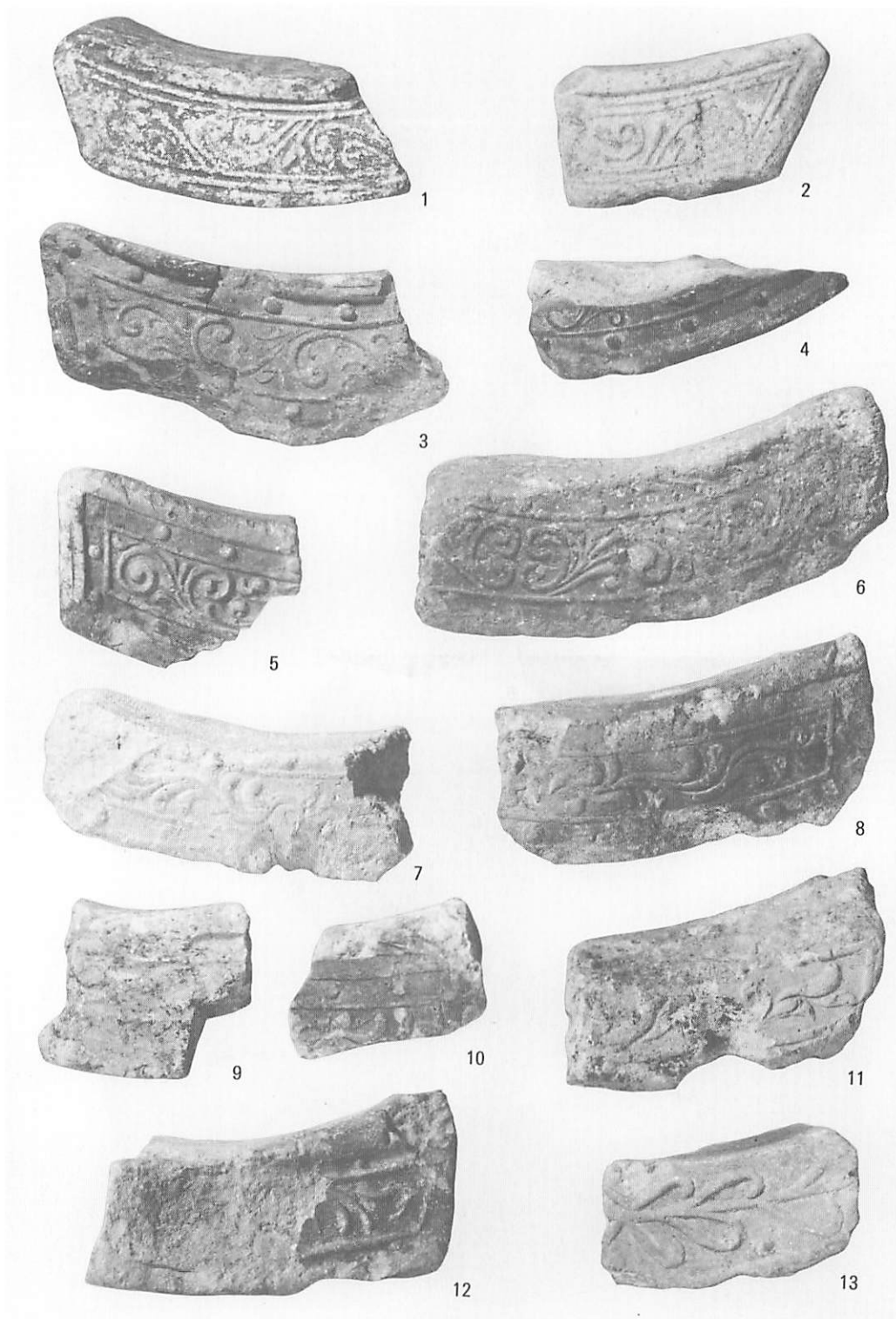


6

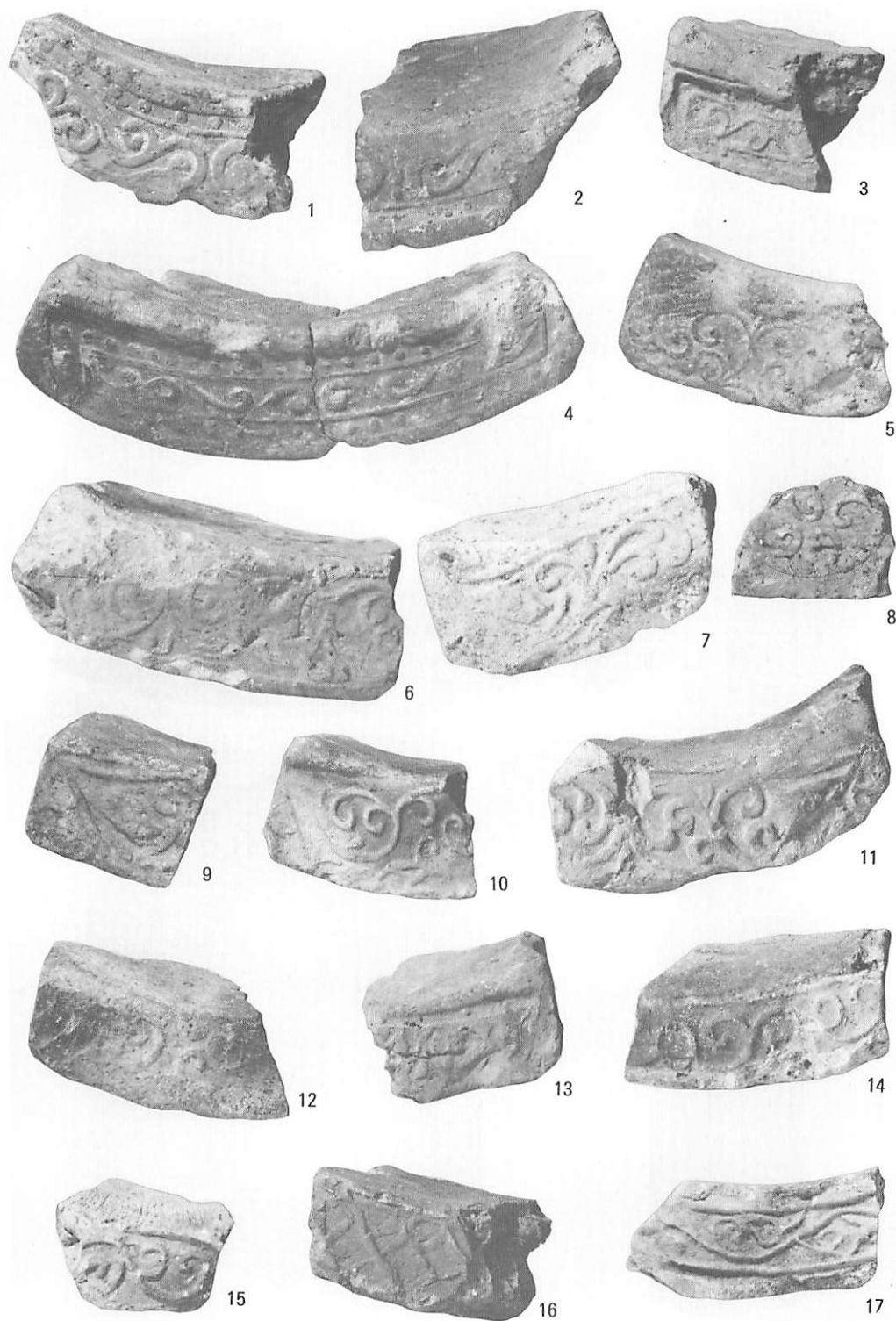


7

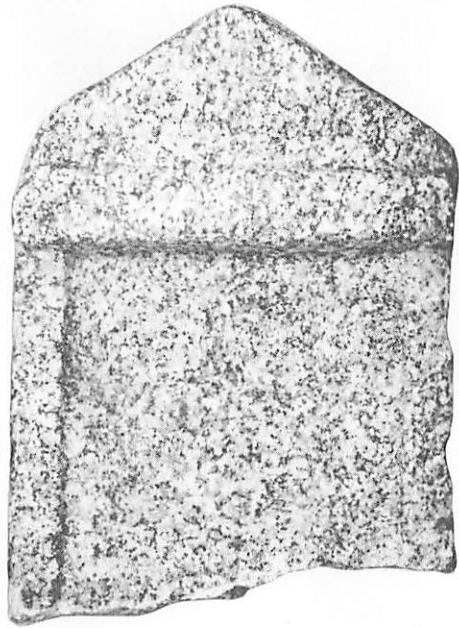
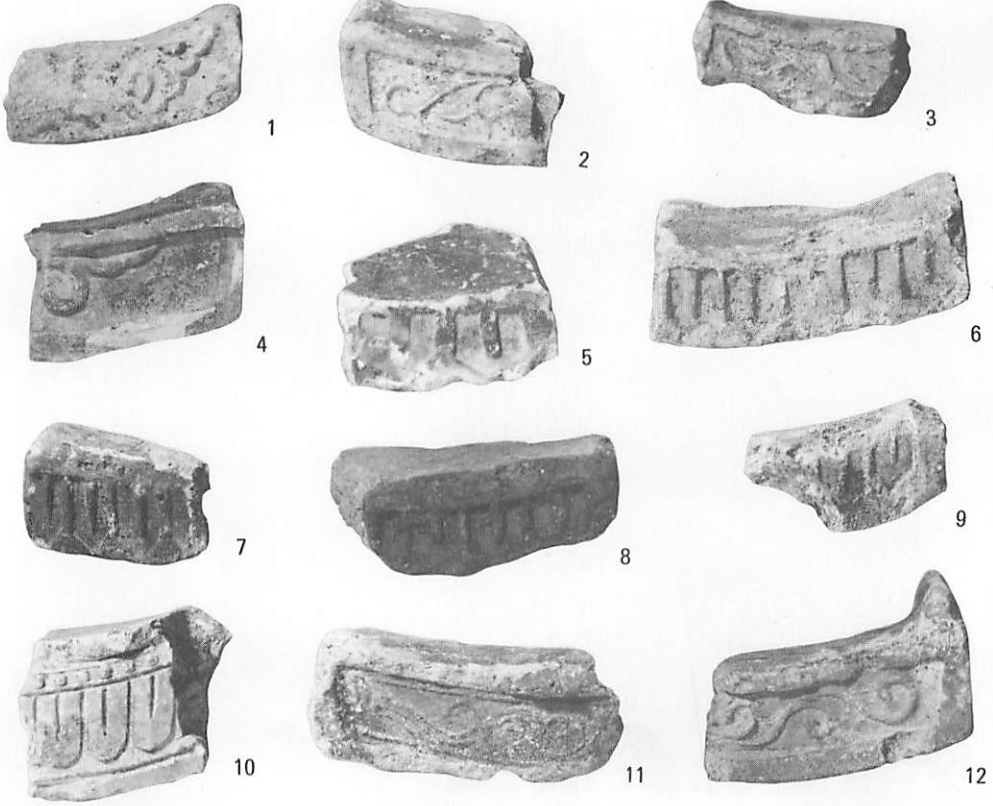
出土軒丸瓦(2)・S K 85出土軒瓦



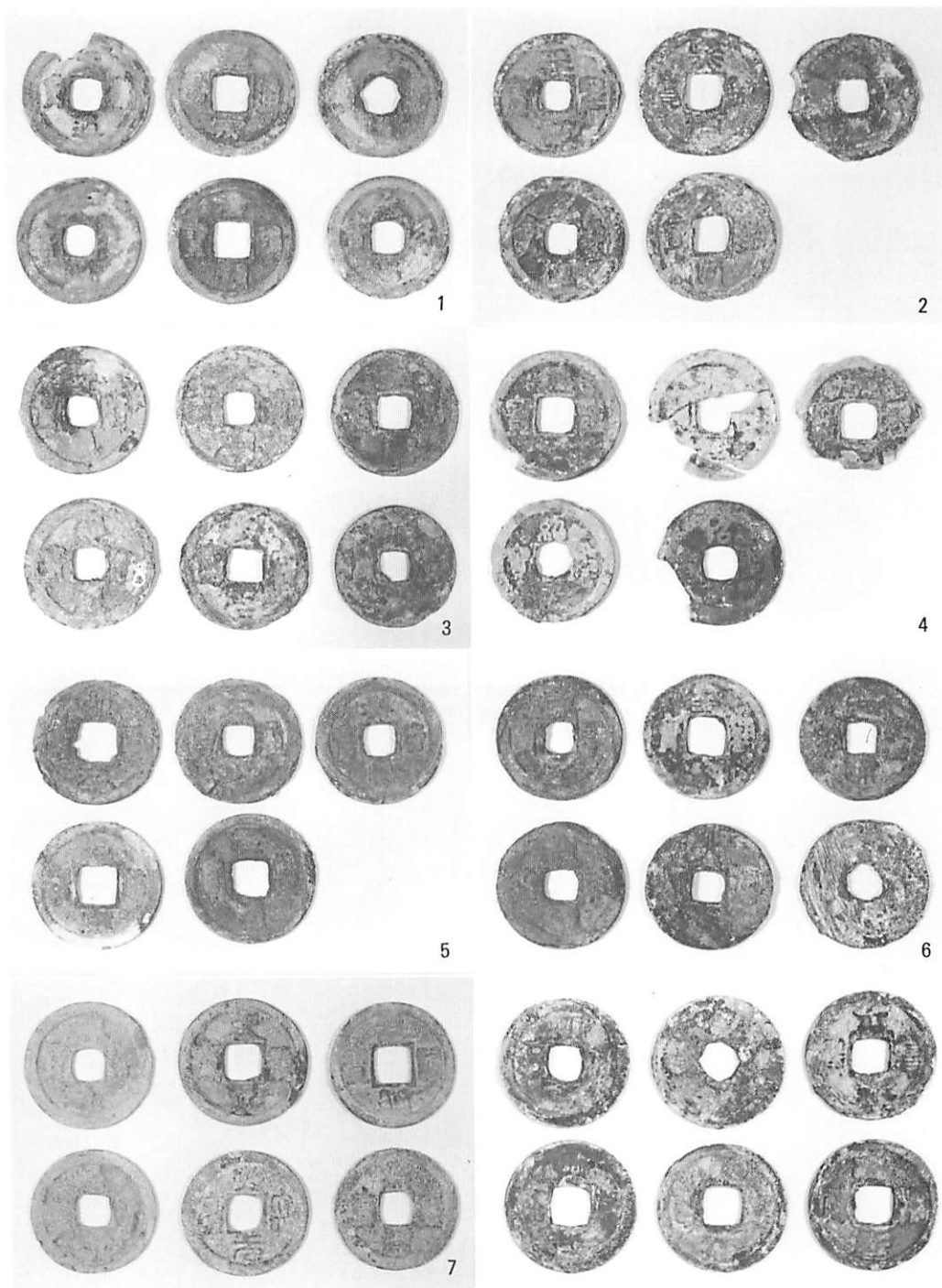
出土軒平瓦(1)



出土軒平瓦(2)

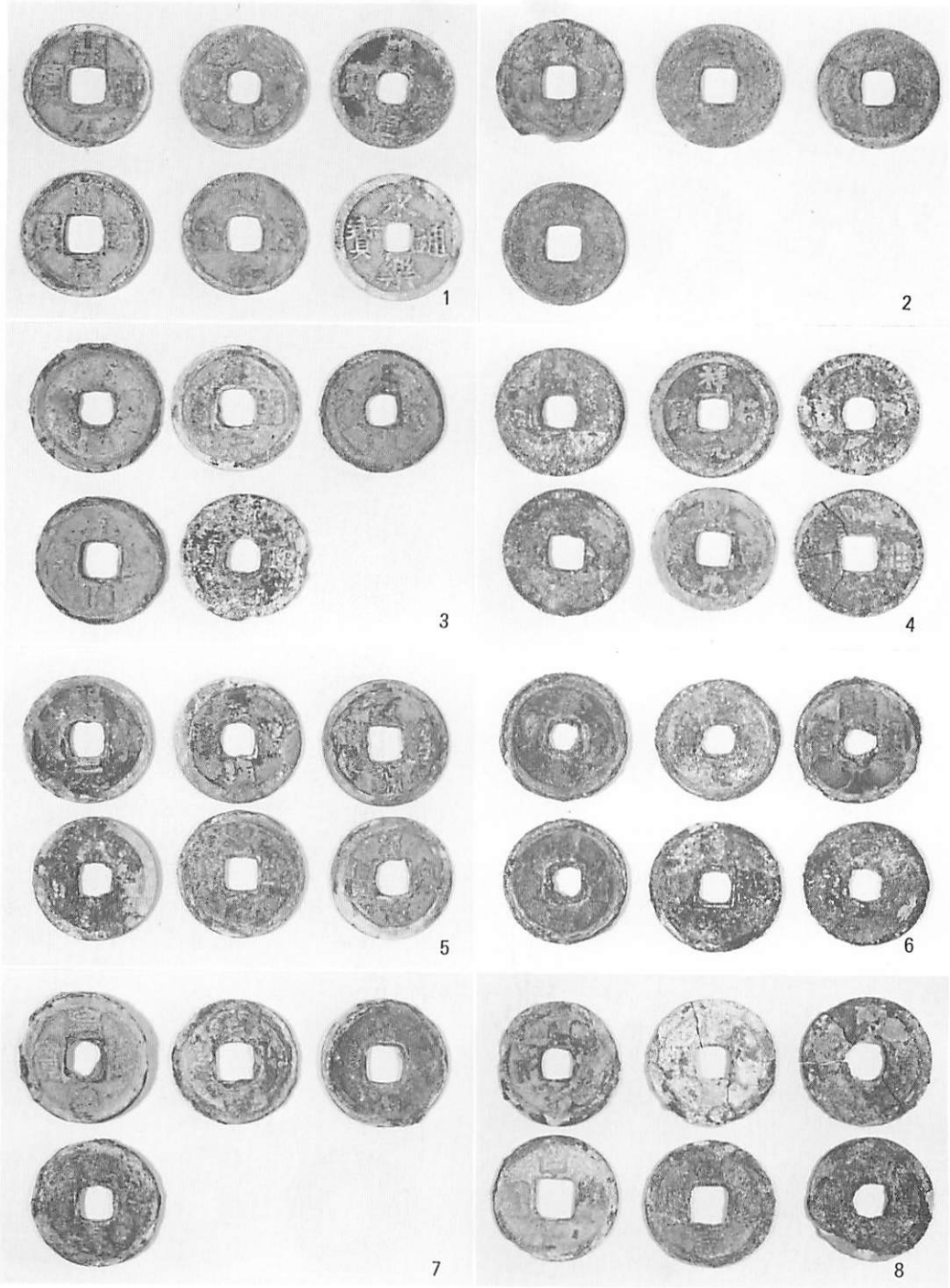


出土軒平瓦(2)・五輪石・板碑



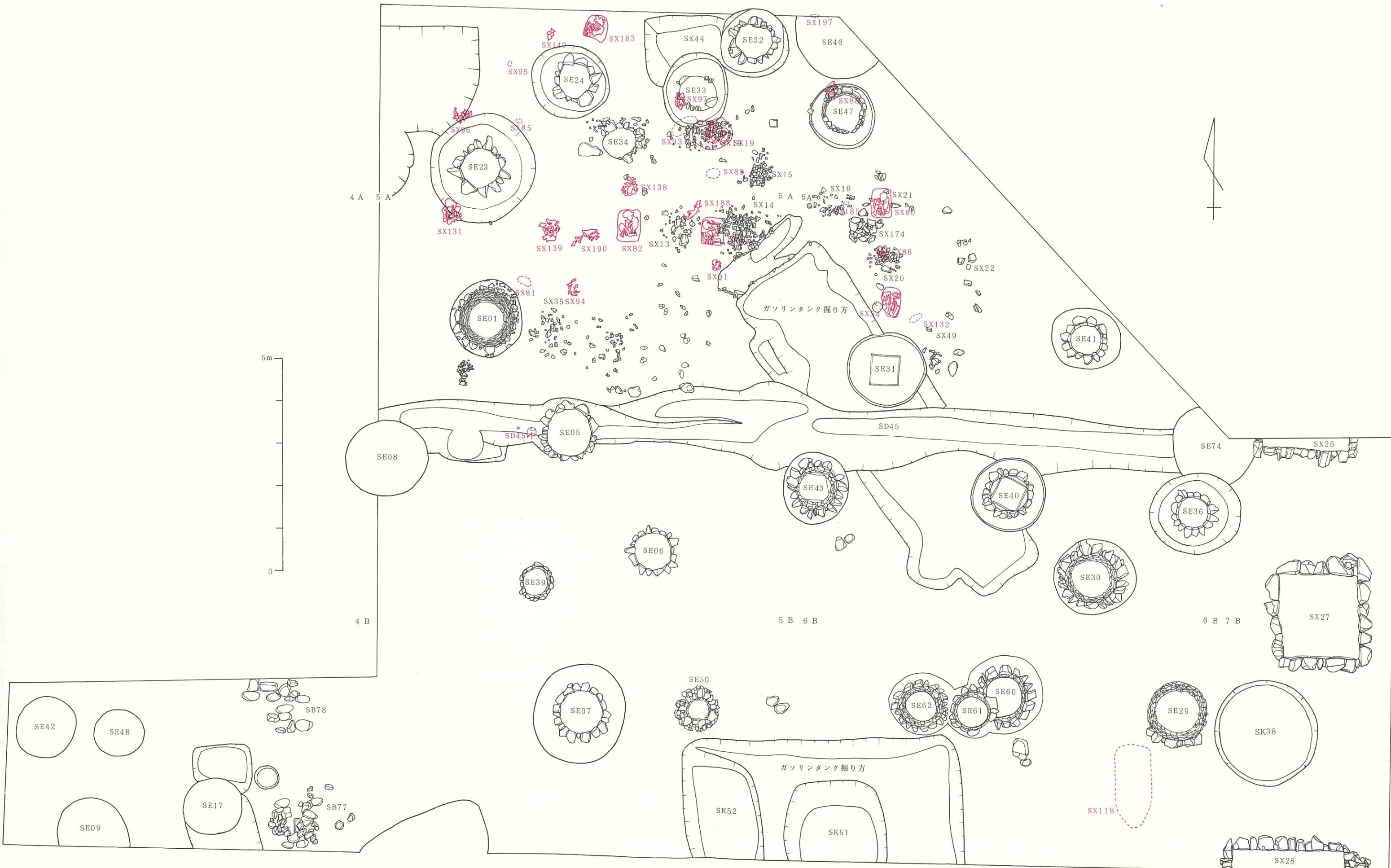
出土六文錢

- 1 : S X 90 2 : S X 97 3 : S X 131 4 : S X 140
 5 : S X 311 6 : S X 313 7 : S X 315 8 : S X 320



出土六文錢

- 1 : S X 324 2 : S X 336 3 : S X 356 4 : S X 359
5 : S X 362 6 : S X 376 7 : S X 387 8 : 3 A 15区



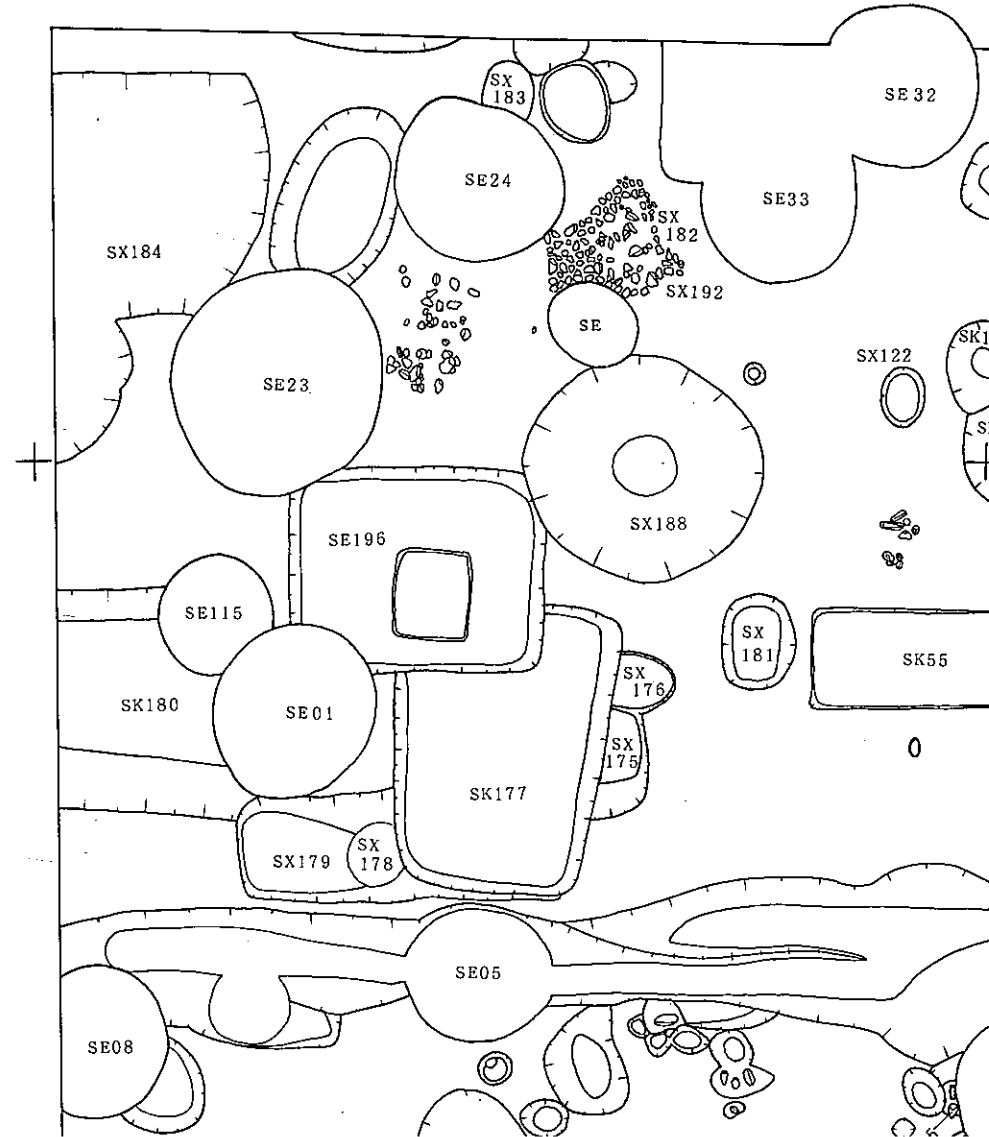
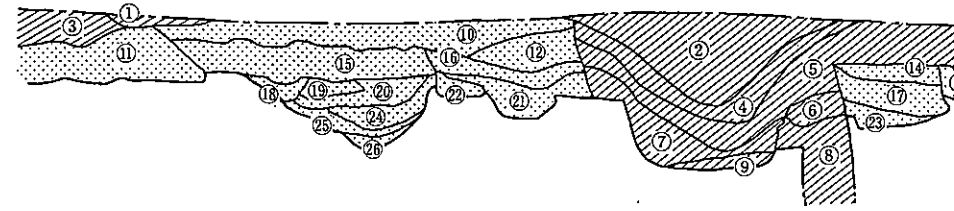
付図1. A区第1検出面実測図

A区南壁土層

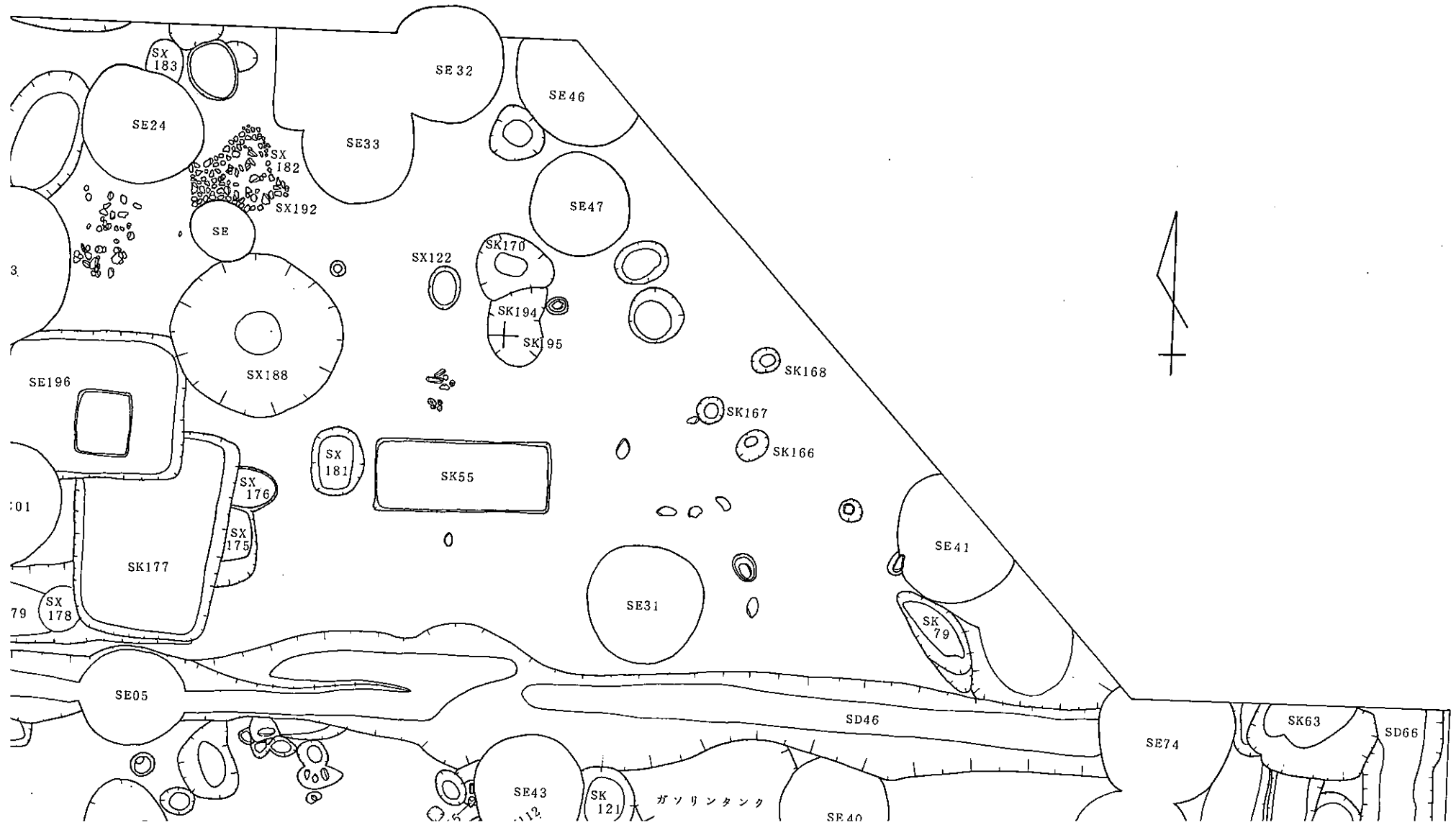
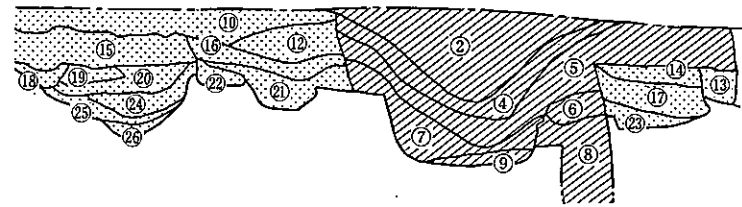
- ① 暗灰褐色土
- ② 黄褐色粘質土
- ③ 井戸 (SE62)
- ④ 炭混り暗灰色粘質土
- ⑤ 井戸 (SE09)
- ⑥ 灰褐色土
- ⑦ 淡褐色土 (礫, 土師器含む)
- ⑧ 掘り方
- ⑨ 茶褐色土 (地山粘質土ブロック含む)
- ⑩ 灰褐色土
- ⑪ 焼土, 炭互層
- ⑫ 茶褐色粘質土
- ⑬ 暗茶褐色土
- ⑭ 暗灰褐色粘質土
- ⑮ 炭混り暗灰色土
- ⑯ 炭, 暗灰色砂質土互層
- ⑰ 暗灰褐色土 (土師器含む)
- ⑱ 茶褐色土
- ⑲ 暗灰色粘質土
- ⑳ 灰褐色土 (焼土の混入あり)
- ㉑ 暗茶褐色土 (石, 黄色粘質土ブロック含む)
- ㉒ 暗茶褐色粘質土 (土師器多く含む)
- ㉓ 灰色土
- ㉔ 暗灰褐色土
- ㉕ 暗灰色粘質土
- ㉖ 暗褐色土 (黄色土ブロック含む)
- ㉗ 明茶褐色土 (土師器の小片含む)
- ㉘ 茶褐色粘質土
- ㉙ 炭層
- ㉚ 黒褐色土
- ㉛ 暗褐色土
- ㉜ 暗灰色土 (地山粘質土ブロック含む)
- ㉝ 暗褐色粘質土
- ㉞ 青褐色粘質土
- ㉟ 暗灰色粘質土
- ㊱ 暗灰色粘質土
- ㊲ 暗灰色土
- ㊳ 茶褐色土
- ㊴ 灰褐色土
- ㊵ 黄褐色土
- ㊶ 暗灰褐色粘質土

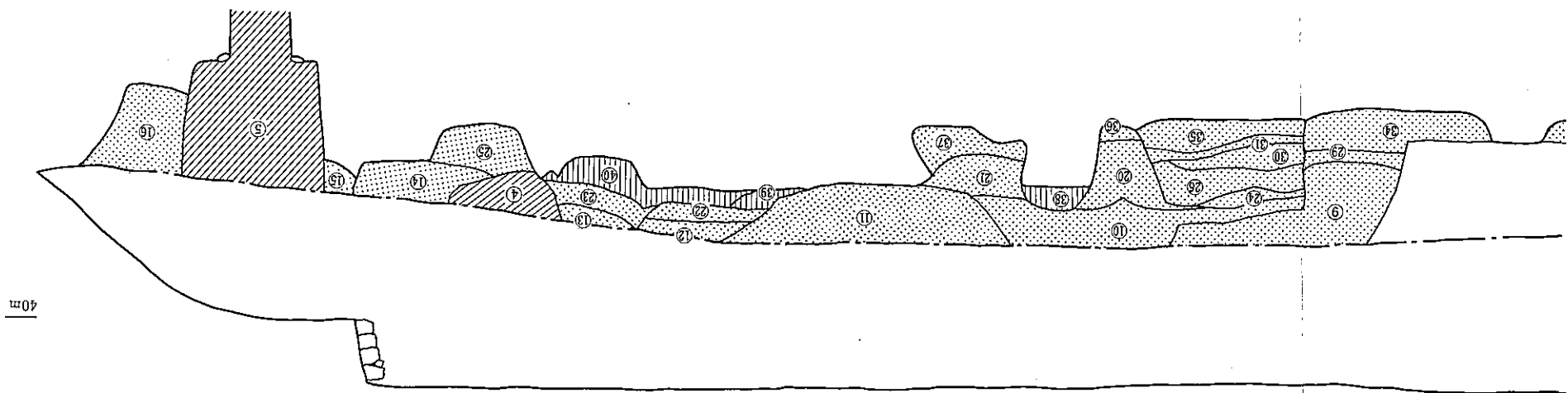
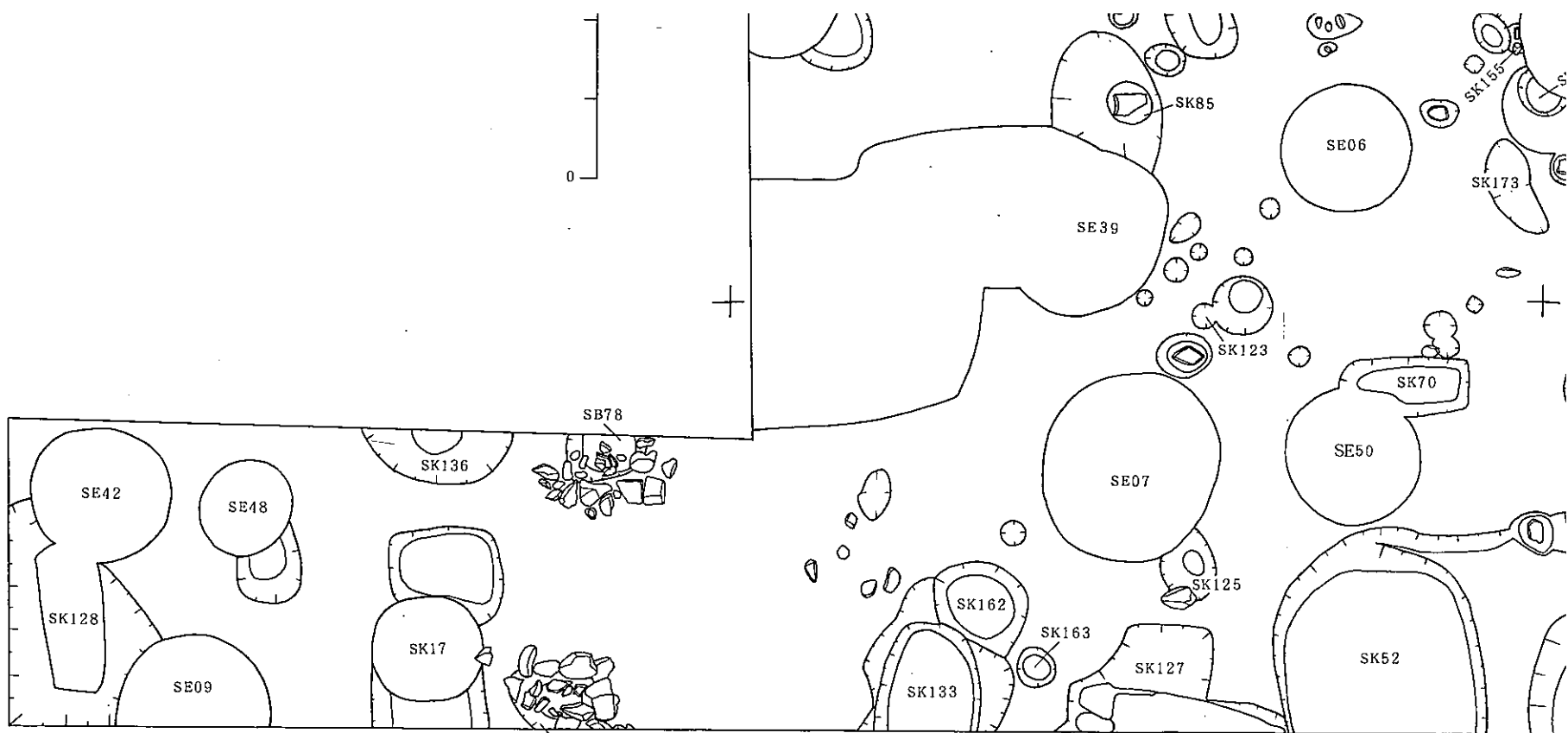
A区北壁土層

- ① 灰褐色粘質土
- ② 黄褐色砂質土 (礫を多く含む)
- ③ 灰褐色土 (土師器含む)
- ④ 暗灰褐色土 (炭を含む)
- ⑤ 暗茶褐色土 (茶色に腐食した有機物を多く含む)
- ⑥ 暗黄褐色土
- ⑦ 暗青灰色粘質土
- ⑧ 井戸 (SE32)
- ⑨ 暗青灰色粘質土 (有機物を多く含む)
- ⑩ 茶褐色土
- ⑪ 暗灰褐色土 (土師器含む)
- ⑫ 明褐色土 (小礫を含む)
- ⑬ 暗黄褐色土
- ⑭ 茶褐色粘質土
- ⑮ 暗茶褐色土 (礫, 土師器含む)
- ⑯ 暗茶褐色土
- ⑰ 暗黄褐色土 (礫, 焼土を含む)
- ⑱ 暗灰色土
- ⑲ 暗灰褐色土 (鉄分含む)
- ㉑ 暗黄灰色土 (鉄分含む)
- ㉒ 暗茶褐色土 (茶色に腐食した有機物を多く含む)
- ㉓ 暗黄褐色土
- ㉔ 黄褐色粘質土
- ㉕ 暗灰色砂質土 (鉄分含む)
- ㉖ 炭層 (土師器含む)
- ㉗ 灰色砂質土

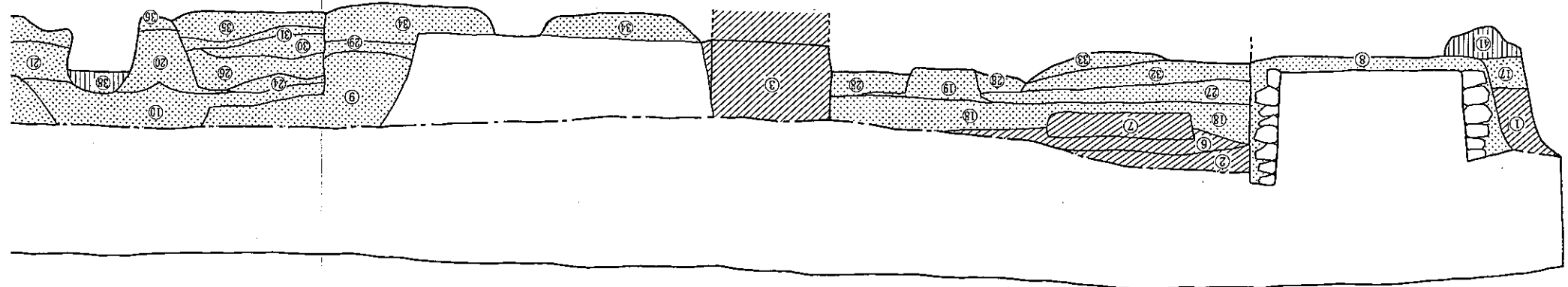
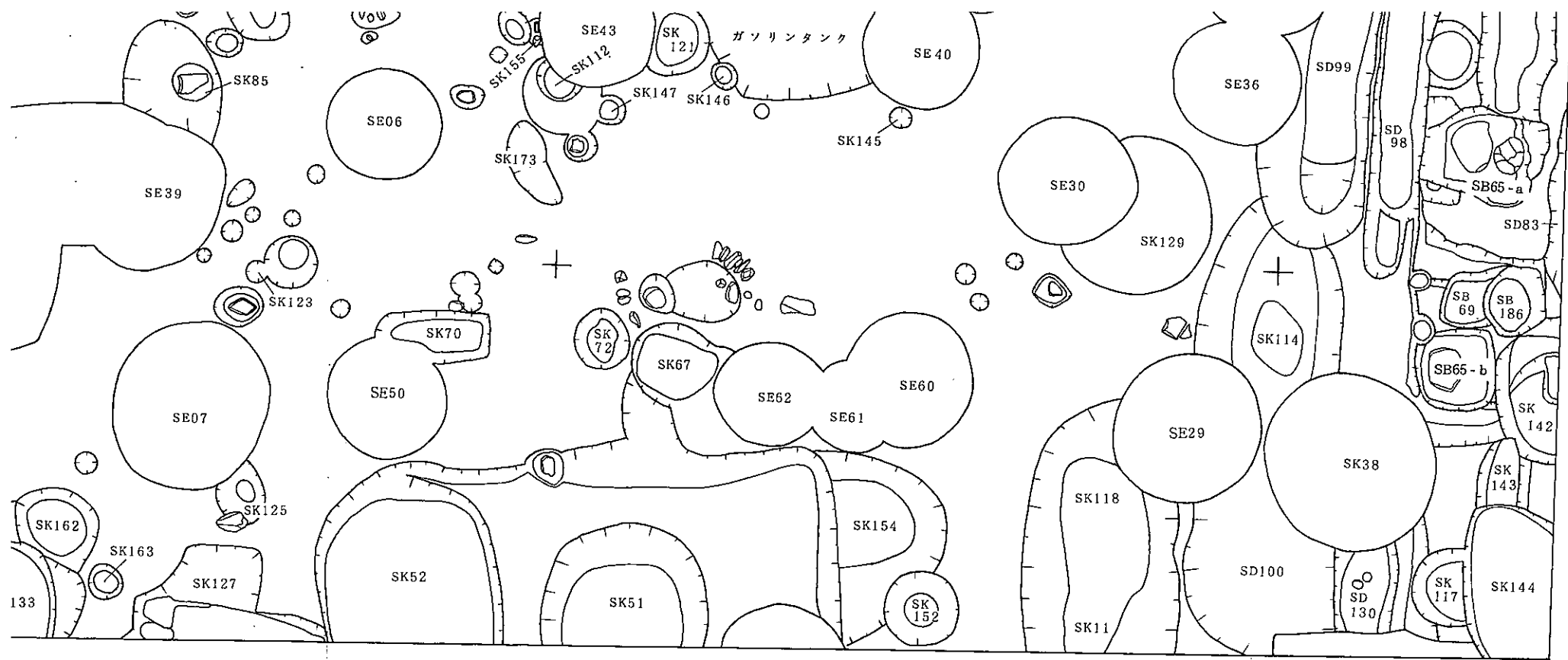


40m

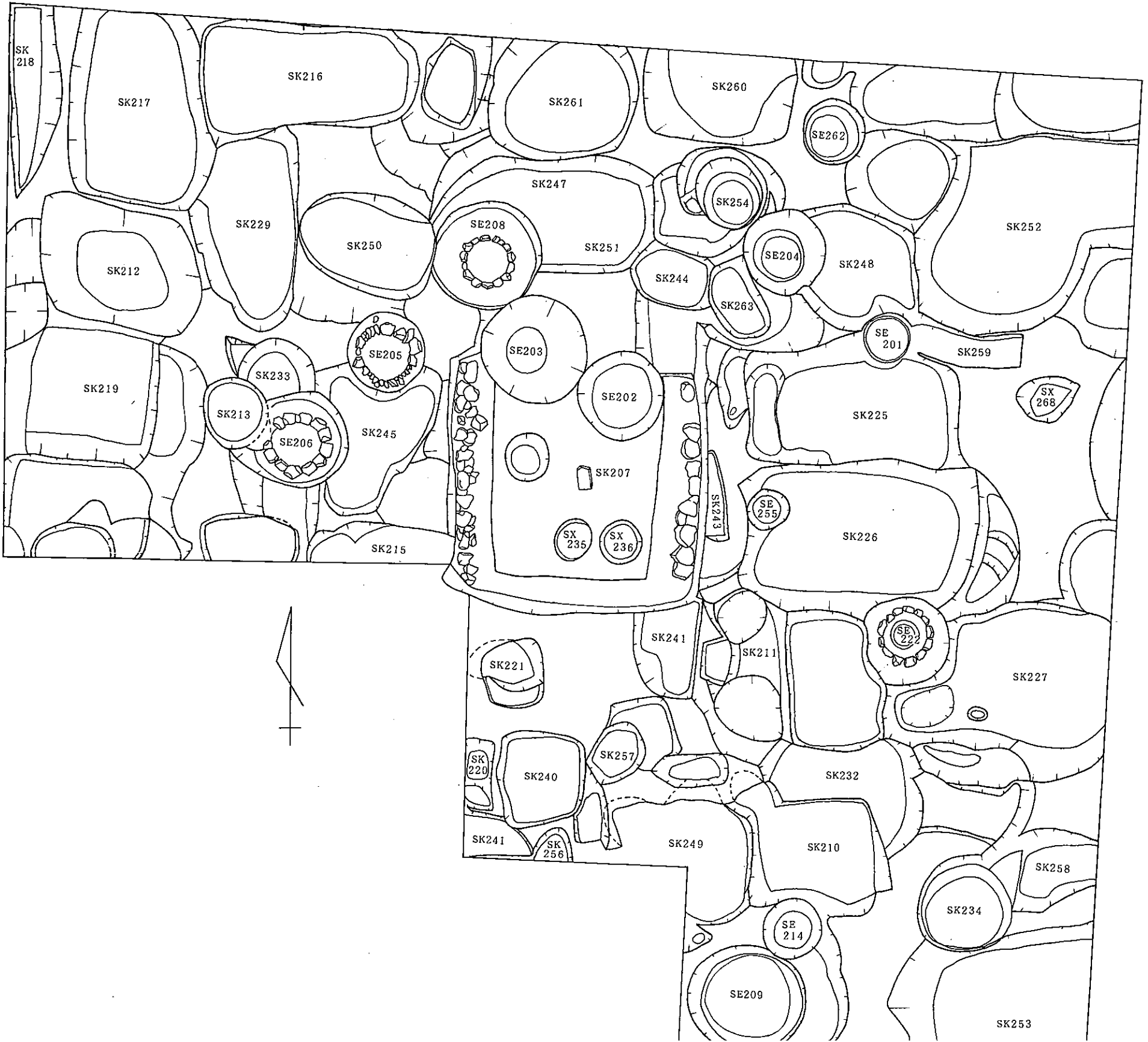
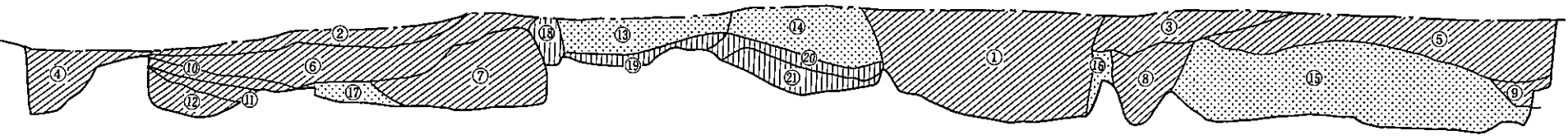




付图 2. A区第2 検出面実測図・断面図



付図2. A区第2検出面実測図・断面図

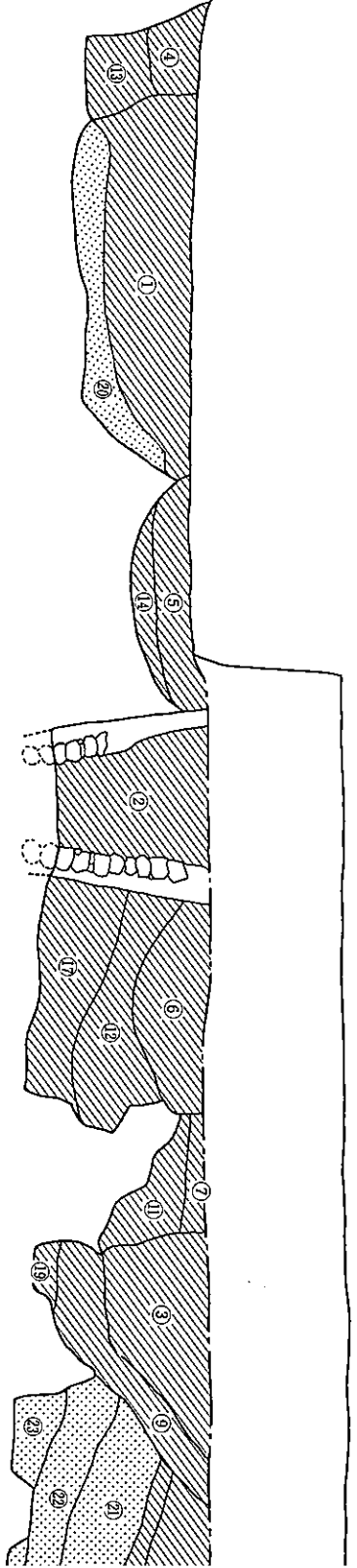


B区北壁土層

- ① 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ② 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ③ 褐色土 (焼土を含む)
- ④ 灰褐色土 (焼土, 炭を含む)
- ⑤ 瓦溜
- ⑥ 暗灰色土 (土師器を含む)
- ⑦ 茶褐色土 (焼土を含む)
- ⑧ 暗灰色土 (焼土を含む)
- ⑨ 暗褐色土 (炭を多く含む)
- ⑩ 灰黄色粘質土
- ⑪ 暗灰色土 (焼土, 炭を含む)
- ⑫ 黄灰色土 (焼土, 瓦を含む)
- ⑬ 暗茶褐色土 (土師器含む)
- ⑭ 黄褐色土 (土師器を少量含む)
- ⑮ 暗褐色土 (漆喰, 焼土, 礫を含む)
- ⑯ 黄灰色土
- ⑰ 暗灰色土 (礫を多く含む)
- ⑱ 黄褐色粘質土
- ⑲ 黄灰色砂質土
- ⑳ 黄褐色粘質土 (少量の土師器を含む)
- ㉑ 暗灰色土 (土師器, 炭を含む)

B区東壁土層

- ① 暗灰色粘質土 (木片, 貝を多く含む)
- ② 井戸
- ③ 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ④ 瓦溜
- ⑤ 暗褐色粘質土 (焼土, 灰を含む)
- ⑥ 暗褐色土 (焼土を含む)
- ⑦ 灰色土 (灰, 土師器を含む)
- ⑧ 灰褐色土 (礫, 貝, 瓦, 灰を含む)
- ⑨ 灰黄色土 (焼土, 灰を含む)
- ⑩ 灰色土 (漆喰, 焼土, 焼礫を含む)
- ⑪ 灰褐色土 (漆喰, 炭焼土, 瓦を含む)
- ⑫ 瓦溜 (焼土, 礫を含む)
- ⑬ 暗褐色土 (炭を多く含む)
- ⑭ 黄灰色粘質土 (炭を含む)
- ⑮ 灰色土 (炭, 土師器を含む)
- ⑯ 灰色土 (焼土, 炭を含む)

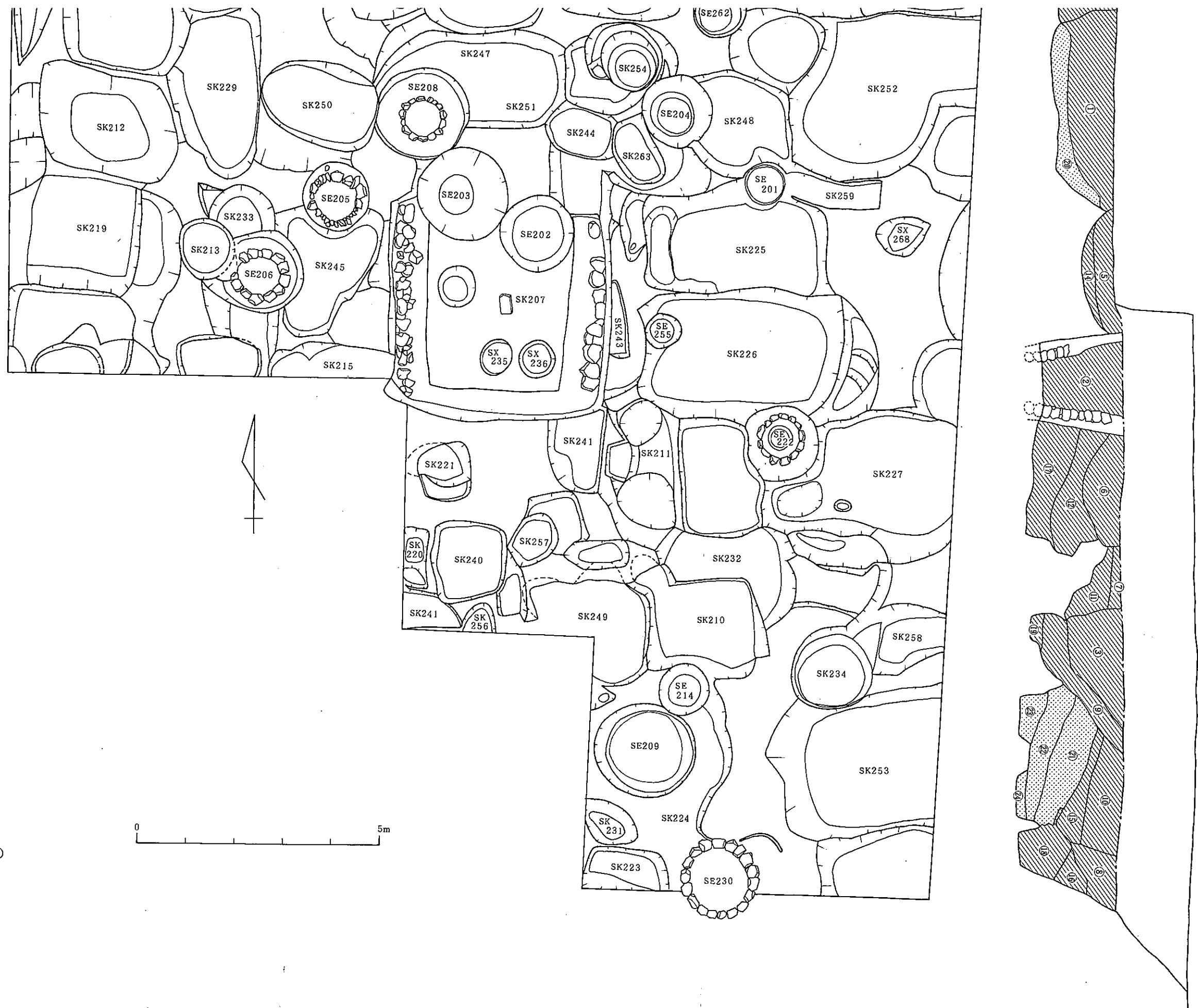


B区北壁土層

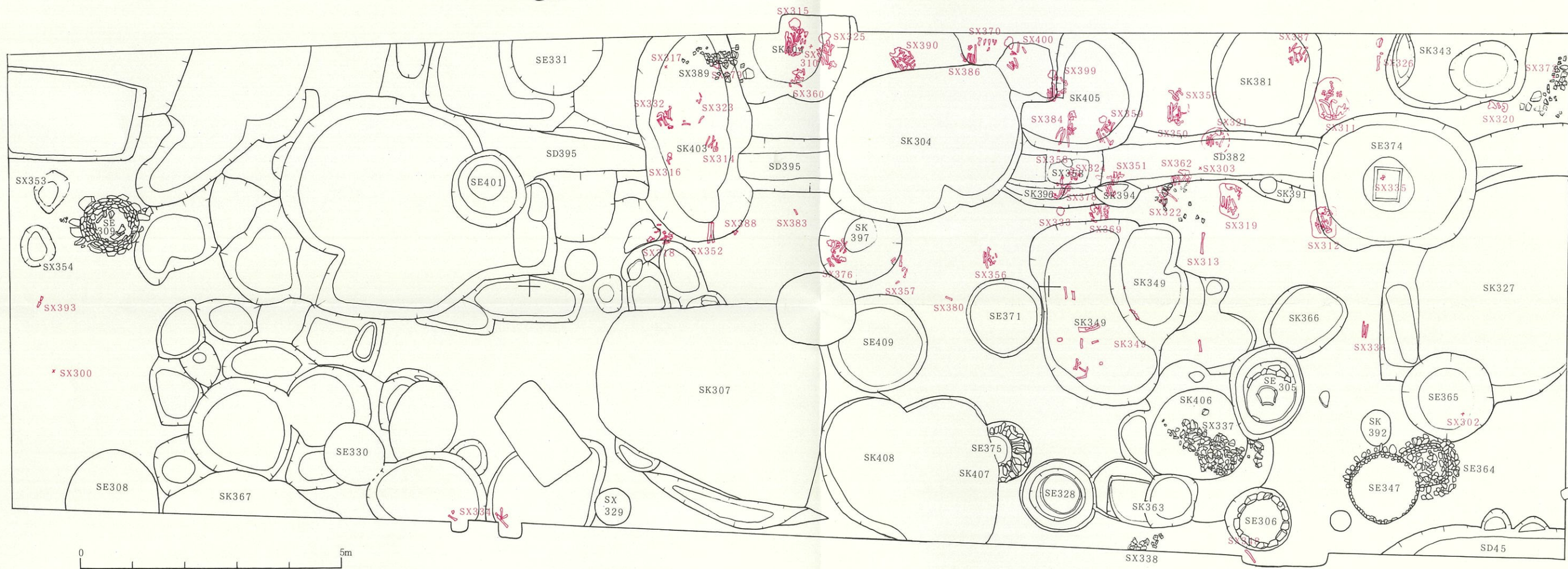
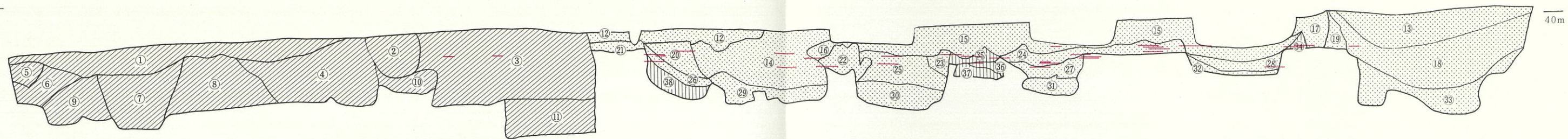
- ① 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ② 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ③ 褐色土 (焼土を含む)
- ④ 灰褐色土 (焼土, 炭を含む)
- ⑤ 瓦溜
- ⑥ 暗灰色土 (土師器を含む)
- ⑦ 茶褐色土 (焼土を含む)
- ⑧ 暗灰色土 (焼土を含む)
- ⑨ 暗褐色土 (炭を多く含む)
- ⑩ 灰黄色粘質土
- ⑪ 暗灰色土 (焼土, 炭を含む)
- ⑫ 黄灰色土 (焼土, 瓦を含む)
- ⑬ 暗茶褐色土 (土師器を含む)
- ⑭ 黄褐色土 (土師器を少量含む)
- ⑮ 暗褐色土 (漆喰, 焼土, 礫を含む)
- ⑯ 黄灰色土
- ⑰ 暗灰色土 (礫を多く含む)
- ⑱ 黄褐色粘質土
- ⑲ 黄灰色砂質土
- ⑳ 黄褐色粘質土 (少量の土師器を含む)
- ㉑ 暗灰色土 (土師器, 炭を含む)

B区東壁土層

- ① 暗灰色粘質土 (木片, 貝を多く含む)
- ② 井戸
- ③ 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ④ 瓦溜
- ⑤ 暗褐色粘質土 (焼土, 灰を含む)
- ⑥ 暗褐色土 (焼土を含む)
- ⑦ 灰色土 (灰, 土師器を含む)
- ⑧ 灰褐色土 (礫, 貝, 瓦, 灰を含む)
- ⑨ 灰黄色土 (焼土, 灰を含む)
- ⑩ 灰色土 (漆喰, 焼土, 焼礫を含む)
- ⑪ 灰褐色土 (漆喰, 炭焼土, 瓦を含む)
- ⑫ 瓦溜 (焼土, 礫を含む)
- ⑬ 暗褐色土 (炭を多く含む)
- ⑭ 黄灰色粘質土 (炭を含む)
- ⑮ 灰色土 (炭, 土師器を含む)
- ⑯ 灰色土 (焼土, 炭を含む)
- ⑰ 灰褐色土 (畑土, 炭を含む)
- ⑱ 瓦溜 (焼土を多く含む)
- ⑲ 瓦溜
- ㉑ 灰色砂質土 (木片を含む)
- ㉒ 灰褐色土 (漆喰, 炭, 焼土, 瓦を含む)
- ㉓ 暗灰色壘 (焼土, 瓦を含む)
- ㉔ 灰褐色砂質土 (漆喰, 貝を含む)
- ㉕ 灰褐色土 (炭を含む)



付図3. B区平面実測図



C区北壁土層

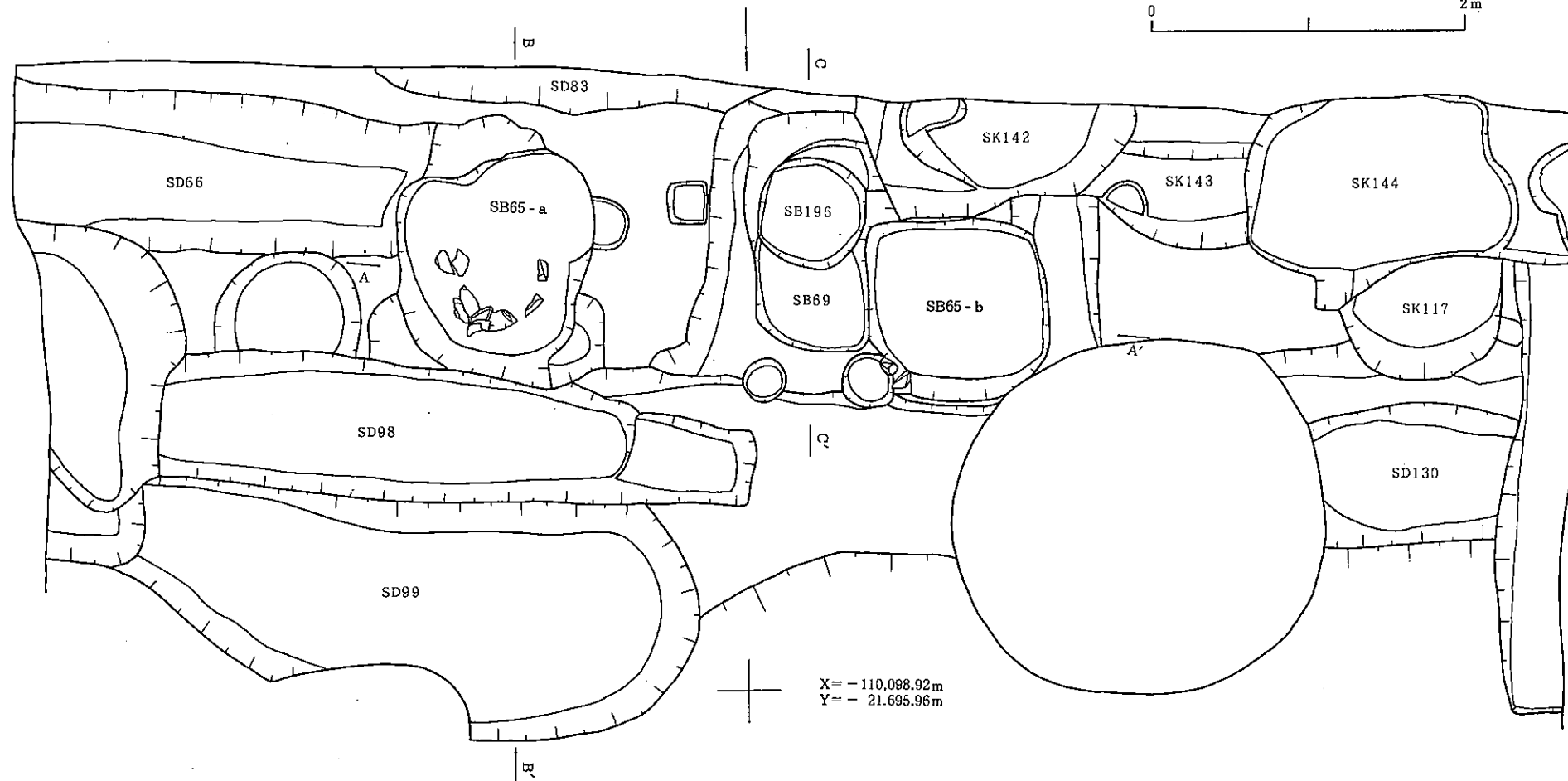
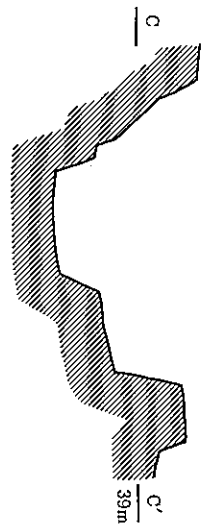
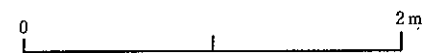
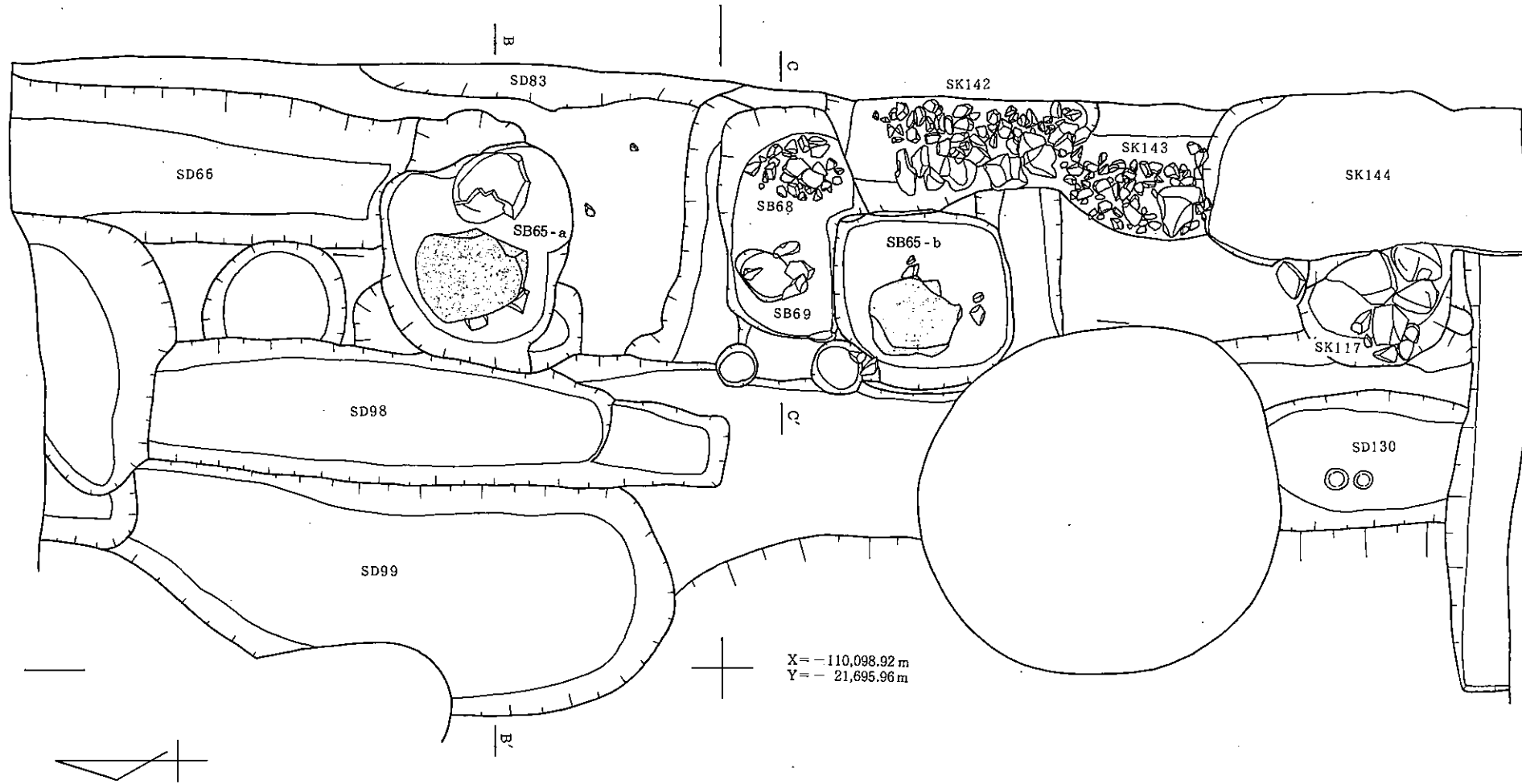
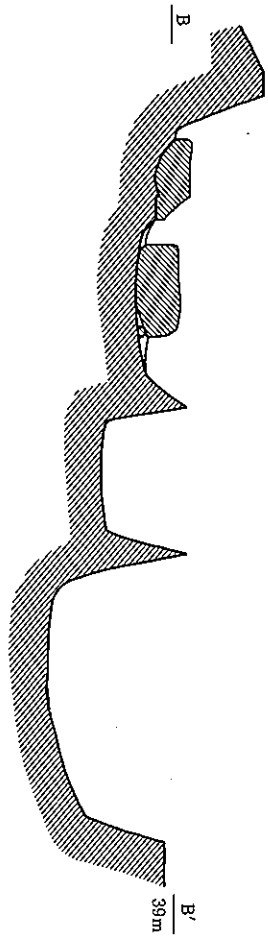
- ① 茶褐色土 (焼土, コンクリート含む)
- ② 礫
- ③ 褐色土 (漆喰, 瓦, 礫を多く含む)
- ④ 暗灰褐色土 (炭を含む)
- ⑤ 暗茶褐色土
- ⑥ 灰褐色土 (礫を含む)
- ⑦ 暗茶褐色土 (漆喰, 炭を含む)
- ⑧ 暗茶褐色土 (礫, 土師器小片を含む)
- ⑨ 灰褐色土 (地山, ブロック混じり)
- ⑩ 暗灰褐色土

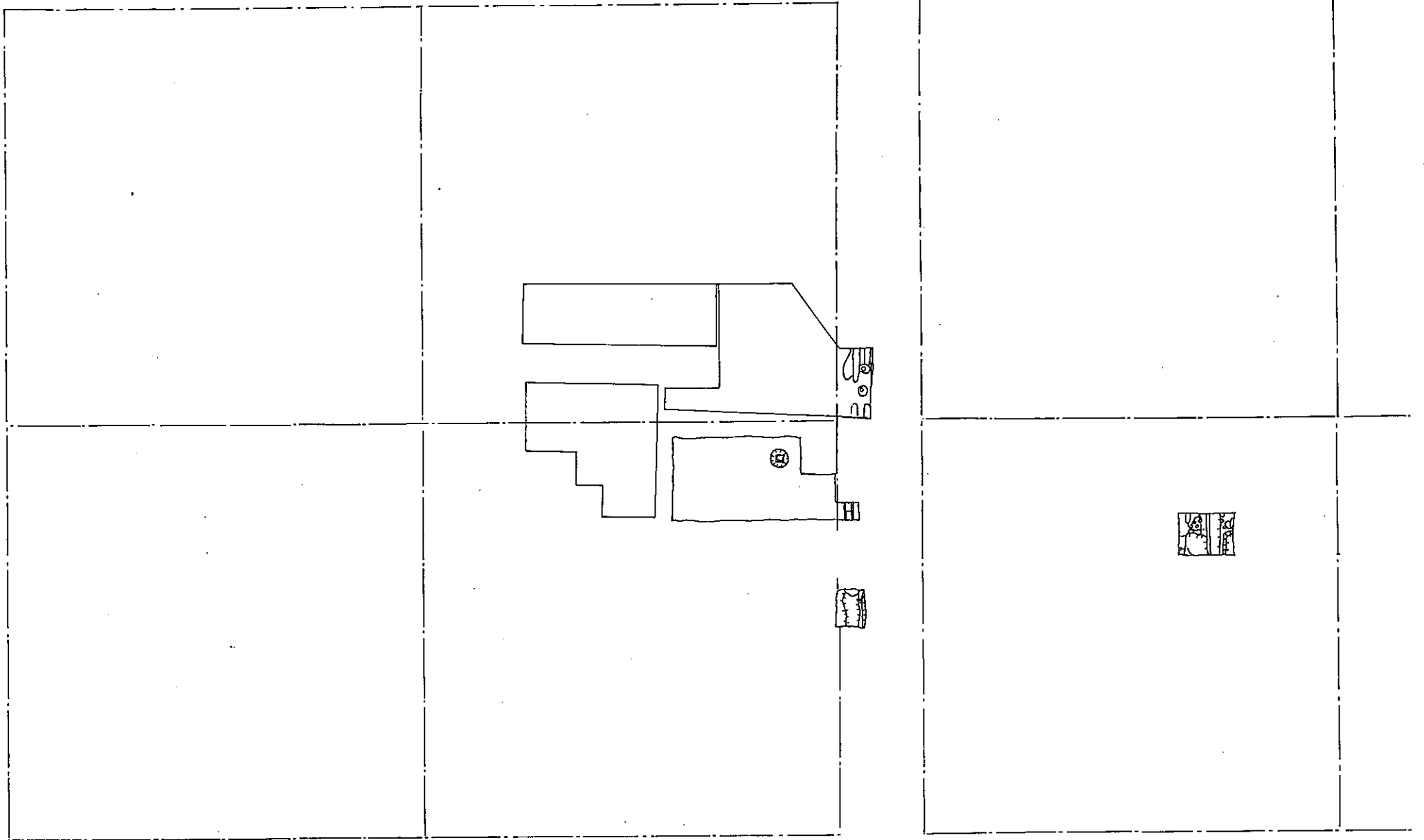
- ⑪ 井戸 (SE331)
- ⑫ 暗灰褐色土
- ⑬ 灰褐色粘質土
- ⑭ 暗灰褐色土 (小礫を含む)
- ⑮ 暗茶褐色土
- ⑯ 暗褐色土
- ⑰ 暗褐色粘質土
- ⑱ 暗茶褐色土 (木片, 箸等有機物を多量に含む)
- ⑲ 黄褐色粘質土
- ⑳ 暗灰褐色土 (礫を含む)

- ㉑ 暗灰褐色土 (炭を含む)
- ㉒ 黄褐色土
- ㉓ 暗黄灰色土
- ㉔ 暗黄褐色土
- ㉕ 暗茶褐色土
- ㉖ 炭層
- ㉗ 黄褐色粘質土
- ㉘ 暗黄褐色粘質土
- ㉙ 暗灰色土 (土師器, 地山ブロックを含む)
- ㉚ 暗黄灰色土 (炭, 土師器を含む)

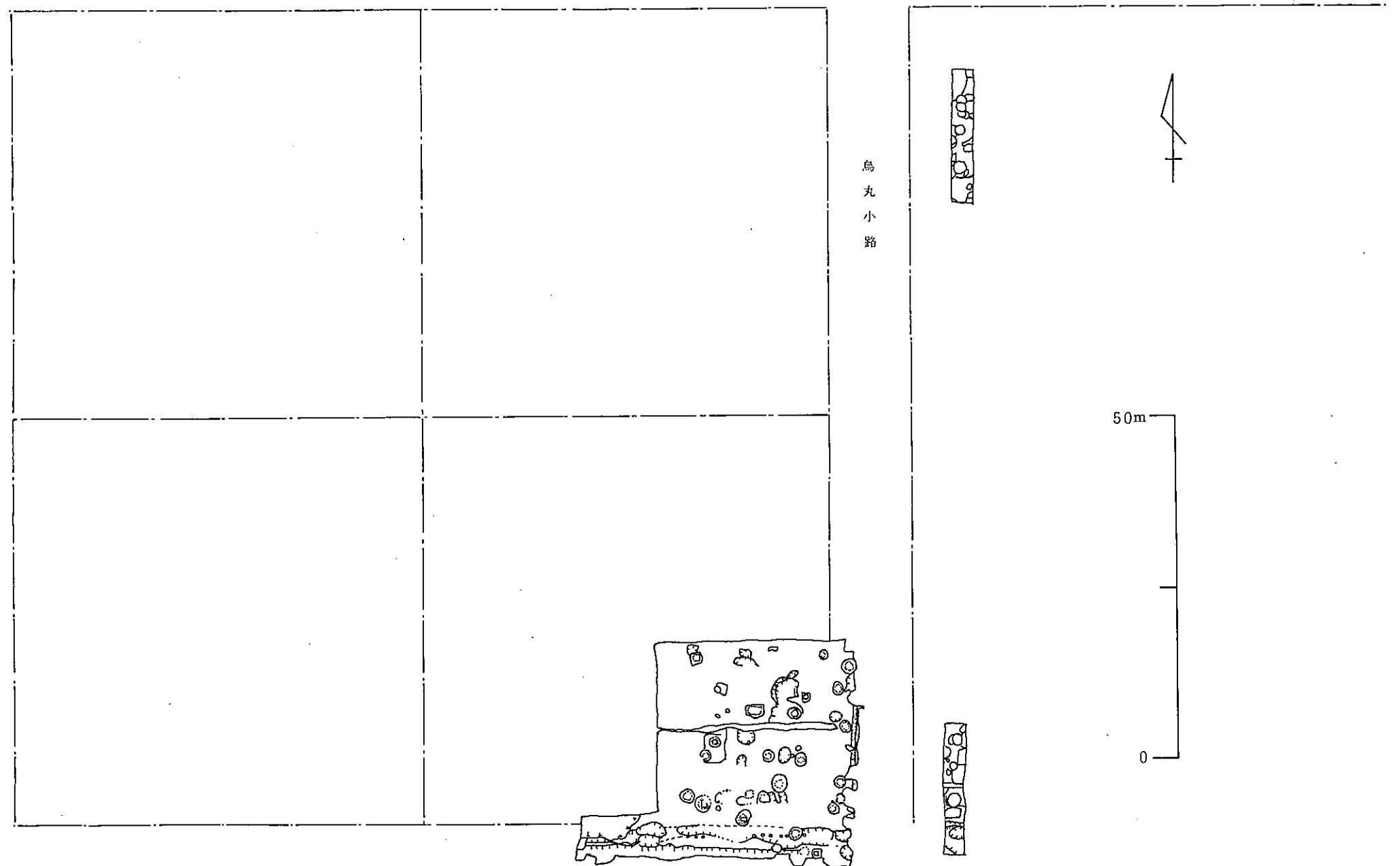
- ㉛ 暗灰色粘質土
- ㉜ 茶褐色粘質土
- ㉝ 灰色粘質土
- ㉞ 黄褐色粘質土
- ㉟ 暗黄褐色土
- ㊱ 黄褐色粘質土
- ㊲ 暗黄褐色土 (粘土, ブロックを含む)
- ㊳ 暗灰色土 (礫, 土師器を含む)

付図4. C区平面実測図・断面図





姉小路



鳥丸小路



付図6. 調査地周辺の遺構検出状況

平安京跡研究調査報告 第14輯

平安京左京三條三坊十一町

発行日 昭和59年3月31日
編集 平安博物館考古学第4研究室
寺島 孝一
発行 財団法人 古代学協会
604 京都市中京区三條高倉
TEL.075(222)0888
振替京都8-850番
制作 ビクトリー社
604 京都市中京区油小路通錦上ル
TEL.075(221)1420

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XIV

EXCAVATIONS AT THE ELEVENTH
INSULA, REGIO III, DECUMANUS III
IN THE PARS ORIENTALIS OF
THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXIV